

美濃加茂市民ミュージアム紀要 第5集

目次

「みのかも文化の森」における子どもワークショップ —平成17年度における実践事例—	辻 泰秀 ——— 1
可児市柿田の東海環状自動車道工事で産出した植物化石 伊奈 治行・鹿野 勘次 ——— 10	
尾崎遺跡出土の弥生時代から古墳時代前期の土器 —尾崎遺跡発掘調査報告書 補遺—	磯谷 祐子 ——— 19
博物館実習生からみた美濃加茂市民ミュージアムの現状と今後 実習生 ——— 36	

中山道太田宿の研究 I	カモ地域史研究会 ——— 1
加茂地域の円空仏について	杉浦 綾子 ——— 23
史料紹介 「天明2年(1782)加茂郡太田村絵図に関する一考察」	村瀬 英彦 ——— 28

「みのかも文化の森」における子どもワークショップ

—平成17年度における実践事例—

辻 泰 秀

1. はじめに

岐阜県美濃加茂市にある教育施設「みのかも文化の森」では、ミュージアムと体験学習室を併設している機能を活用して、各種のワークショップが開催されている¹⁾。そして、平成16年の夏休みには、筆者が岐阜大学で美術教育と生涯学習に関する教育研究をしていることもあって、子どもたちを対象にした造形ワークショップを2回実施した²⁾。17年度も8月、11月、3月の3回行う予定である。本稿では、17年度に既に実施した8月の「あかりにへんしん 森の木々」、11月の「かざりにへんしん 葉っぱや石」について実践の内容を報告する。

近年、ネットワークやボーダレスという言葉が一般化し、学校と地域と家庭、学校と美術館、大学と地域と学校といったように、様々な連携や協力が必要なことが提言されている。これらのワークショップも「みのかも文化の森」と岐阜大学教育学部のスタッフが企画と運営をして、学校や家庭の理解と協力を得て実施されている。回数・参加者数・実践の広がりといった点では、試行的な段階ではあるが、本年度の実践を発条にして、より一層充実した内容にしていきたいと考える。

2. 「あかりにへんしん 森の木々」の実践

(1) ワークショップの企画

夏休みなどの長期休暇には、子どもたちに日常の学校の生活では十分にできない体験学習をしてほしい。とりわけ子どもたちが豊かな発想をしたり材料にはたらきかける造形活動は、家庭からの要望も多い。そこで、夏休みの子どもたちを対象にした特別講座として、「あかりにへんしん 森の木々」というテーマでワークショップを行うことにした。

この実践は、平成16年に岐阜県美術館におい

て行われた夏休み子どもワークショップ「あかりアート」を参考にしている。造形作家の小宮伸二が、子どもたちを対象にして和紙と木の枝を材料にしたあかりの制作を指導した³⁾。筆者もサポーターとしてその場に参加している。また、以前に、美濃市立上牧小学校で筆者と小宮が共に実践した際に、和紙があかりの材料として魅力的であることを改めて確認している。

身近にある木の枝を組み合わせることで、立体的なオブジェが生まれる。今回の実践では、枝を骨組みにした空間を和紙で包み中に電球を入れることで、あかりとして表現しようとした。日常生活において規格通りに大量生産された照明器具を使うことに慣れているので、自分だけのあかりをつくることはほとんどない。ところが、材料や形を自分なりに工夫すれば、新たな自己表現が展開されるはずである。

「みのかも文化の森」という名称からも、森や林の木を活用することがふさわしいように考えた。ところが、施設の周辺は植林した杉林が多くまっすぐな枝が多い。そのため、大学のキャンパスや里山を歩いて、材料として使えそうな枝を集める。形を工夫しながら立体的な空間をつくるのに、手で曲げやすい材質が好ましい。折れたりボロボロにならないように耐久性が欲しい。和紙で包むのに細い枝が広がっている方が都合がよい。そのような条件から材料をさがす。

手で曲げやすく丈夫である点では、籠やリースをつくるようなつるが適切であるが、何げない木切れでも結構役立つ。「みのかも文化の森」には、間伐した杉の木があったので、それを平らに切断してあかりの土台として使うことにした。周辺にはどのような木があるのか、造形活動の材料になりそうなものがあるか、といった視点で身近な環境を見渡す機会にもなった。

和紙の光の通り具合や素材感などの条件を求めると、紙も高価で貴重になる。むしろ、今回は子どもたちが試行錯誤しながら紙のおもしろさを味わうことに重点をおいて、機械で漉いたロール和紙を切って使うことにした。

「みのかも文化の森」には、実技実習のための工芸棟があり、そこを主な活動場所にする。小学生ならば40名が座ることができるが、材料や用具を置いたり造形活動をするので30名程度の定員になる。本施設は郊外の高台にあり、自家用車での送迎が多くなることから、日曜日に実施することとなった。

(2) 事前準備

打ち合わせや参加者募集のプリントを作成する際に確認した内容はおおよそ下記のようなものである。

《趣旨》

身近にある木の枝や和紙を使って、子どもたちが創意工夫をしながら、あかり（ランプシェード）をつくります。

《参加者募集プリントの言葉》

「木の枝をひろっていろいろ組み合わせるといろいろなかたちになるよ。表面に和紙を貼って、あかりの『らんぶしえいど』をつくってみよう。

《日時》 平成17年 7月31日（日）

午前10時～午後3時

《場所》 みのかも文化の森・美濃加茂市民ミュージアム 工芸室 他

《子どもの持ち物》

お弁当、水筒、作品を入れてかえる袋。

《服装》 活動のできる服装で。

《指導側の準備物》

材料：木の枝、板材、細目の竹、竹かご、針金、麻ひも、木工用ボンド、くぎ、又くぎ、和紙、絵の具、染料、ビニールロープ
用具：のこぎり、金づち、きり、ペンチ、はさみ、筆、ハケ、パレット、容器、筆洗、ぞうきん、洗濯ばさみ、電球、コード

《講師》 辻 泰秀（岐阜大学教育学部助教授）

《サポーター》

岐阜大学の学生・みのかも文化の森のスタッフ・保護者

《参加者》

美濃加茂市及びその周辺の子どもたち 32名（定員30名）とサポーター 15名

《内容》

- 材料になりそうな木の枝を選ぶ。森で枝をさがす活動も取り入れたい。
- 和紙に模様をつける。絵の具（染料）や植物の汁で色をつける。
- 和紙を森の木につるして乾かす。和紙の色で身近な風景をかえる。
- 木の枝の特徴を生かしながら、あかりの形を工夫する。自在に発想する。
- のこぎり・金づちなど使って造形活動をする。木の枝を組み合わせて固定する。
- 木の枝によるかたち（空間）を和紙で包み込む。和紙を接着する。
- 中に電球を入れてみて、一人ひとりのあかり（ランプシェード）を鑑賞する。

筆者が準備をした木の枝・材料・用具を前日に車で運搬をした。その際に、森の中に入って枝の落ち具合を見ると、杉の枝が落ちている。竹も在庫があるそうである。また、和紙を染める染料については、おりしもこの日に「夏を染める」という講座があったので、草木染めの液を提供していただいた。打ち合わせの内容にそって教育担当のスタッフが試作をつくっており、魅力的な作品になっていた。子どもたちと造形活動をする場合には、試作をしながら支援の方法を確かめることが大切である。

(3) 当日の実践内容

当日の朝にスタッフが材料・用具を整える。工芸棟の教室の前列の机にのこぎり・金づち・ペンチ・はさみといった用具、木工用ボンド・麻ひも・くぎといった材料を並べて子どもたちが手にとって使えるようにした。屋外のテラス

には、木の枝を積み上げたり、工作用の角椅子を置く。そして、和紙を染めるための染料の入った容器とハケを用意した。

予定通り10時頃に参加者が教室に集った。早速あいさつをして活動の概要について説明する。各小学校の1～6年までいるので、普段の学級とは幾分異なる雰囲気である。夏休みの日曜日ということもあって親子での参加も結構多かった。問い合わせがあったときに、のこぎりや金づちを使うので低学年の場合はできれば付き添いをお願いします、といった説明もあったからであろう。

「あかりにへんしん 森の木々」ということで、木の枝を組み合わせてその周りを和紙で包む。最後に電球を入れてあかりとして鑑賞するといったことを伝える。

①和紙に模様を描く。和紙を色で染める。

和紙を好みの色や形に染めて乾かす活動から始めた。白い和紙で一様に包むよりは、ドーローイングを施した方が個性的な表現になる。染まった部分を通して色彩的なあかりができる。おおよそ90×150cm程に切った和紙を配布して、後であかりの模様になるように、和紙に自在に色や形をつけることにした。染料（染め粉）の手持ちがあったので、色ごとにバケツに入れておいて必要に応じて樹脂のコップに分けて使った。

「あかりにふさわしい模様になるように自由に描く」という呼びかけに対して、子どもたちは幾分戸惑ったようであった。子どもたちは学校の授業では構図・色彩・筆触・描く手順といったことについて丁寧に指示を受けることが多い。自由に・気軽にといった言葉を受けると、一瞬どのようにしたらよいかを考える。自己選択・自己決定の経験が思いの外少ないようである。また、自由にという言葉は、適切な表現方法を自分なりに工夫するという意味を含んでいるが、子どもによっては「でたらめにする」という意味に理解されることがある。

本来子どもたちは、白い画面に自在に描く活

動が好きである。上手に描かなければならないという観念から解放されてリラックスしてくと、筆がスムーズに動き出した。

このようなワークショップの場合には、友達や兄弟等と一緒に参加しないと、初対面の人ばかりと接することになる。ところが、子どもたちの方がむしろ開放的で、描いているうちに自然な状態で交流が進む。一人だけにいる子どもにはスタッフから声をかけるようにしている。

当初は、どのように描いたらよいか迷っている子どもでも、周りの子どもたちが描いている様子を見て、いろいろな表現方法を学びとっている。ハケや筆で色をつけた和紙は、杉の木々を結んだビニールのロープに洗濯ばさみを使って吊るした。様々な色や形が並んでいる光景を見て「きれい」「私もこんなふうにしてみたい」といった声が聞かれた。



図1. 和紙に自在に模様を描く。



図2. 森の木に和紙を飾って乾かす。

②木の枝を切る。組み合わせる。

染料をつけた紙を乾かす状態に入ったところで、「森にいて木の枝を集めてみよう」と呼びかけた。あらかじめ枝を積み上げてはいたが、自分で材料をさがすことは大切であるし、30名以上が表現するには材料の追加が必要であった。子どもたちは林を歩きながら地面を見渡して、細くてあかりの支柱の材料として使えそうな枝を次々と拾い集めた。



図3. 森の中で材料を見つける。

枝には長すぎるものもあり、あかりの大きさを意識しながら、好みの長さのにこぎりで切ることにする。子どもたちはのにこぎりは見たことはあるけれども、学校や家庭で使用した経験はほとんどないようである。そのため、両刃のにこぎりには横びきと縦びきがあり今回は横びきの方が使いやすい、手・足や角椅子などを使ってしっかりと木を押さえて切る、引くときに力を入れて往復運動をすると切れるといった内容を、動作を交えて説明をする。低学年の子どもにはスタッフがついて木を押さえてあげたり切り方のコツを助言した。

木の枝を接着することは、大変な様子であった。子どもたちはボンドをたくさんつければ何でも接着できると思っている。けれども、枝と枝を針金で結んだり釘で打ち付ける方が効果的である。木工用ボンドをつけただけでは、すぐにはずれてしまうことが多い。2人一組になって釘・針金・麻ひもなどでとめるとよい。

組み合わせてとめる活動をしなが、あかり

の大きさや形が次第に具体化してくる。昼食前に切断をしたり大まかな形を組み合わせ、午後の活動において骨組みが丈夫になるように接着するといった具合である。枝の形を組み合わせ、立体的な形ができてくる過程で、子どもたちの創意工夫が見られた。



図4. のこぎりを使って木の枝を切る。



図5. 木切れを組み合わせる。

③和紙で包みこんで、あかりの形を整える。

立体的な空間ができてきたら、午前中に乾かしておいた和紙で包むことになる。丸ごと包み込むと枝が隠れてしまうので、木の部分を外に出して和紙を中に入れ込むようにすると素材感を生かしやすい。和紙は柔らかいので形を整えやすい。丸めたり切ったりしながら電球を入れる空間をつくり出す。木と和紙との調和を考えたり、和紙につけた模様を意図的に活用したりしていた。そのままだと和紙がずれてしまうので、部分的にボンドなどでとめておくとよい。

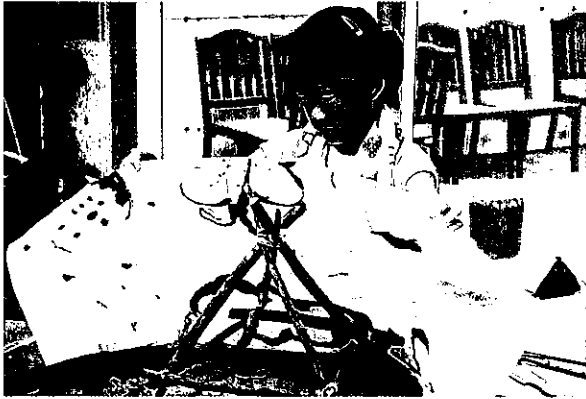


図6. 和紙で空間を包み込む

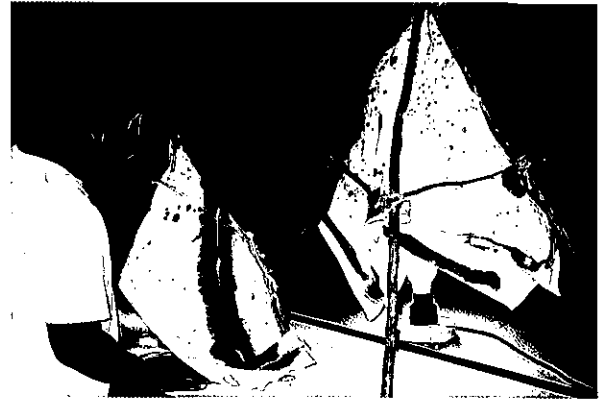


図8. 中に電球を入れて「あかり」にする。

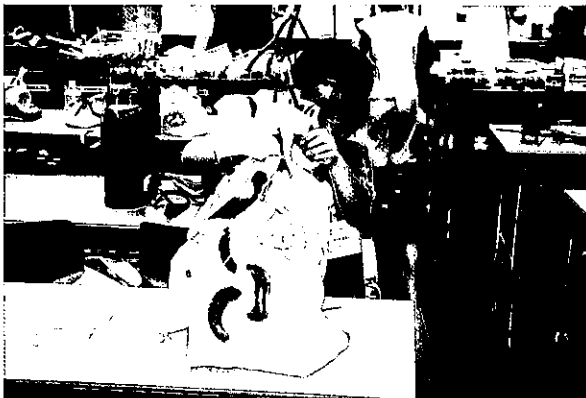


図7. 和紙をひもやボンドでとめる。

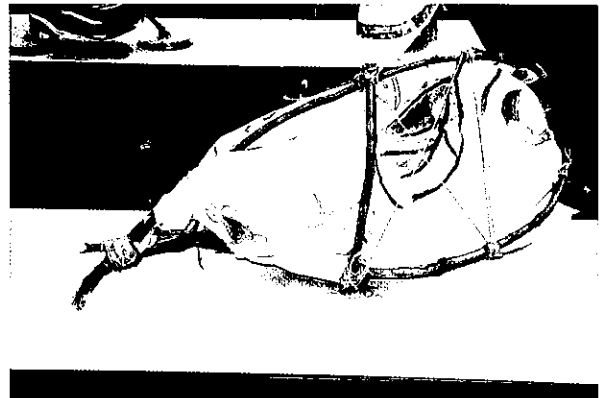


図9. 和紙と木のオブジェ作品

④電球を中に入れてあかりにする。あかりを鑑賞する。

外光を遮断できる別室（研修室）に電球とコードを設置する。作品の透き間から電球を入れてスイッチを入れると、一瞬にしてあかりに変容する。木や和紙を組み合わせて形を工夫したので、個性的なあかりが並ぶ。和紙に描かれた模様が内側から光に照らされて美しく浮かび上がって見える。

自分や友達のを鑑賞したり、デジタルカメラを使って写真を撮影した。電球やコードを含めると高価になるため各自に配布できなかったが、ホームセンターで購入できることや設置の方法を紹介した。作品に加えてデジタルカメラでとった写真を手渡すことで、あかりとしての表現を確認できるようにした。機会があれば、夜に屋外のスペースに並べて鑑賞したり、作品展を実施したい。

3. 「かざりにへんしん 葉っぱや石」の実践

上記のように、夏休み子どもワークショップ「あかりにへんしん 森の木々」では、身近にある木の枝や和紙を使って、子どもたちが創意工夫をしながら、あかり（ランプシェード）をつくった。秋の子どもワークショップでも、木の葉や石といった素材にかかわりながらものづくりをすることにする。落ち葉などを並べて模様にしたたり、石に彩色して生きものなどに似せたりすることにした。

参加者募集のプリントを作成する際に打ち合わせをした内容は、次のようである。

みのかも文化の森・秋の子どもワークショップ
「かざりにへんしん 葉っぱや石」

《日時》 平成17年11月3日（祝日）

午後1時30分～午後4時

《場所》 みのかも文化の森・美濃加茂市民ミュージアム 工芸室 他

《講師》 辻 泰秀（岐阜大学教育学部助教授）

《サポーター》

岐阜大学の学生・みのかも文化の森のスタッフ・保護者

《定員》 30名程度（部屋で活動できる人数）

《内容》

- 材料になりそうな木の葉を選ぶ。森で落ち葉をさがす活動も取り入れたい。
 - 秋にふさわしい色の和紙を選ぶ。
 - 葉っぱやちぎった和紙を並べて、模様をつくる。
 - ラミネーターを使って固定する。
- 「秋の色や形を並べる」
- 自然の石の形から発想をめぐらす。
 - 石に彩色する。

「ストーン・ペインティング」

《準備物》

- ・ラミネーター 3台程
- ・ラミネート用フィルム 200枚程度
- ・いろいろな葉っぱ 袋に集めておく
- ・染め粉（染料） 5色程度
- ・和紙 ロールをカット
- ・いろいろな石（100個程度）
- ・アクリル絵の具（12色） 40箱
- ・使い捨てパレット 40枚
- ・細い筆 80本
- ・筆洗 40個
- ・ホットメルト（ホットボンド） 5本
- ・ホットボンド用ステック 20本程
- ・木工用ボンド 15本
- ・杉の木の輪切り 40個
- ・参考作品や図書

（1）「秋の色や形を並べる」の内容

子どもたちがラミネーター用の透明シート（ラミネート・フィルム）の上に落ち葉を並べて封入する活動である。生活科の授業などで本のしおりをつくる場合に、同様にラミネーターを使うことがある。今回の実践では、葉っぱを並べたり組み合わせたりして、自然物の形と色の

おもしろさを感じることを意図した⁵⁾。

まず、落ち葉を中心にして色々な葉っぱを集める。例年は11月に入ると落ち葉が一面に積もるくらいになるが、今年は温暖な日が続いたためか紅葉になっていなかったり落ち葉の量が限られていた。そこで子どもたちが公園や里山を歩いて落ち葉を拾う活動を見送り、あらかじめスタッフの側で葉っぱを集めるようにした。

前平公園をはじめ周辺の公園に行き、できるだけ多様な形や色の葉っぱを集めた。子どもたちが材料にするのに十分な量を大きなビニール袋につめて移動をした。

当日は朝から雨が降っていたので、渡り廊下に白色のロール和紙を敷いて、子どもたちが葉っぱを並べる活動から始めた。葉っぱといっても緑・黄・赤・茶などの色彩があり、大きさや形も一つひとつ異なる。袋や容器にたくさん集めた葉っぱを色が次第に変化するように並べてみた。

緑色から始まり黄色になり次に赤色や茶色になる変容の様子を和紙の上で確かめる。当初は自分の手元だけを見ているが、横とのつながりや画面全体の変化を意識するにつれて、子どもたち相互の交流や協力が生まれる。

普段見過ごしてしまうことの多い葉っぱでも、実に様々な色や形をしていること、同じ赤色でも微妙に色が異なることなどに気づいた。「きれいやね」「絵の具みたいな鮮やかな色をしている」といったつぶやきがあった。一応和紙がうまるくらい並んだところで、全体を見渡して鑑賞した。



図10. 色の変化を意識して落ち葉を並べる。

次に工芸棟の教室に入りA4サイズのラミネーター用のシート（ラミネート・フィルム）を配布して、そこに葉っぱを並べたり組み合わせることを伝えた。再度渡り廊下に行き、白い和紙の上に置いた葉っぱの中から好みの色や形の葉っぱを5～10枚ほど選んで透明シートに置いてみる。色や形を抽象的に組み合わせる子どもがいたら、動物などに意図的に似せる子どもがいた。必要に応じて葉っぱをはさみで切ったり、染料で染めた和紙を切ったりちぎったりして葉っぱと組み合わせる子どもがいた。並べ方・組み合わせ方を工夫したところで、ラミネーターの機械を通して封入し固定した。機械を通すとシートが完全に透明になるので、子どもたちは興味深く見ていた。重ね過ぎたりして厚みのあるものは、ラミネーターを通るときに中でつまってしまうことがある。ラミネーターは2～3台あると、活動がスムーズにできる。

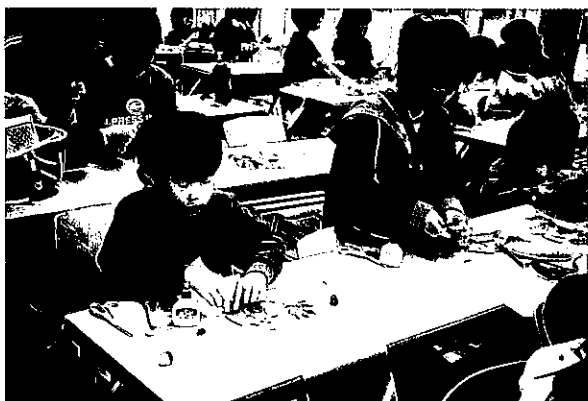


図11. 葉っぱの組み合わせを工夫する。

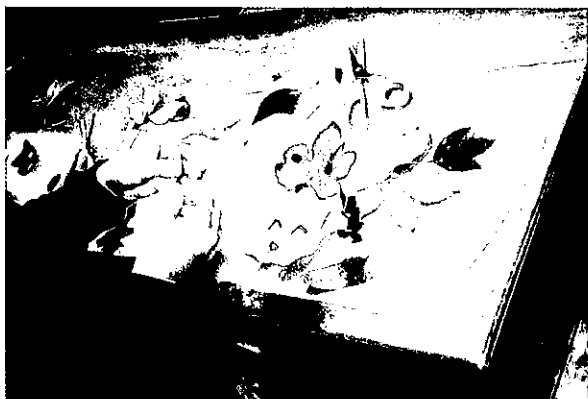


図12. 葉っぱを動物に見立てる。



図13. ラミネーターで封入する。

封入した作品は、ビニールひもにとめていって順に鑑賞できるようにする。透明の部分を通して光を通すので、葉っぱの部分が浮き立って美しく見える。ラミネーターによって真空状態になっているので、落ち葉であっても比較的長い期間にわたってその色や形を保存できる。早くできた子どもは、異なるサイズのシートに挑戦した。



図14. シートを透かして鑑賞をする。

(2) 「ストーン・ペインティング」の内容

河原に落ちている何げない石でも、ちょっと色をつけたり絵を描き加えることで、生き物・食べ物・乗り物・日用品などに似せることができる。石の形から発想をめぐらして、ユニークなものに変身させるようにした。

とりあえず、大学生の制作したストーン・ペインティングの作品を提示して何に見えるかを問いながら、表現の方法を確認した。河原の石は、美濃市の板取川で拾ったものから、好みの石を1～2個選ぶことにする。

後で手で触れても色落ちがしないように、アクリル絵の具を使用した。子どもたちは、何か宝物を扱うようにして、丁寧に彩色していた。大人は固定観念が強く石は石にしか見えないことが多い。子どもたちの方がしなやかに発想をしているいろいろなものに似せる。

石は立体的なものであるが、一方向からしか見ていないことがあるので、どの方向から見ても何かにみえるようにすると効果的である。このように見立て方を工夫する子、石を立体的な画面として風景や模様を丹念に描き込もうとする子などが出てきた。最後に、子どもたちのストーン・ペインティングの作品を集めて、それぞれの表現のよさを鑑賞した。石の形に変化があり、子どもたちは平面的な画用紙に描くときは異なるおもしろさを感じていた。



図15. 石を手にとって形から発想をする。



図16. アクリル絵の具で石を彩色をする。

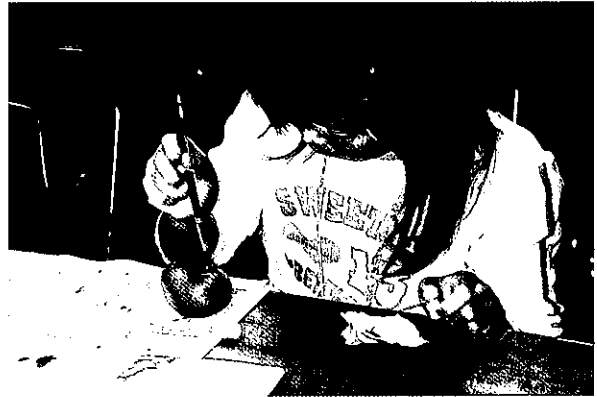


図17. 石をみかんに見立てる。



図18. いろいろな方向から描く。

4. まとめ

「あかりにへんしん 森の木々」や「かざりにへんしん 葉っぱや石」といったテーマからも理解できるように、身近な環境にある材料を活用している。あらかじめ準備をしてしまったものもあるが、できるだけ材料をさがす活動を子どもたちと一緒にするとよいと考える。普段は何げなく通りすぎたり見過ごしているものでも、発想をめぐらすことによって素晴らしい芸術作品に変容することが理解できれば幸いである。

ワークショップでは、いろいろな学校・学年・学級の子どもたちが集まり活動をする。当初はやや不安そうな表情をしている子どもがいるが、活動をするうちに積極的になって友達の良いところを学んだり、気軽に話しかけたりする場面が見られる。このように活動を通して人の輪を広げたり学び合うことが大切であると考える。

岐阜大学から美濃加茂市まで片道1時間半を

要するという距離的な問題や、試行的な実践のために現在のところ予算的な問題は残されているものの、子どもたちのためになることであれば全面的に協力しあうという相互の意気込みで今後も継続していきたい。

注

- 1) 土・日曜日などの学校休業日を活用したイベント（ワークショップ）を年間60回以上開催し、普通日には、学校の体験学習の場になっている。
- 2) 木とふれあうことをめざした子ども造形ワークショップとして、平成16年9月18日（土）に「きって、うって、ふしぎなキー木で生きものなどをつくる」、9月19日（日）に「ころころ がたがた たのしいキー木の動くおもちゃをつくる」の実践を行った。
- 3) 岐阜県美術館の夏休み子どもワークショップとして16年7月～8月に小宮伸二氏を招いて「あかりアート」を行った。小宮はオーストリアなどでアーティスト・イン・レジデンスをしながら、身近にある素材を使ったあかりの制作に取り組んでいる。
- 4) 子どもたちが白い和紙に自在に描くことを目的としたワークショップを岐阜県美濃市において実践してきた。辻泰秀「地域の特色を生かした造形コラボレーションの実践的研究－美濃市での路上ワークショップ－」（岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究 第8巻 2006）を参照。
- 5) 愛知教育大学で工芸教育を担当されている樋口一成助教授が、公園や校庭などで拾った落ち葉をラミネーターで封入する実践を行っており、参加させていただいている。筆者としては美濃市立上牧小学校において2回ほど同様の実践をしている。

謝 辞

ここで報告した二つの実践を行うに際して、みのかも文化の森・美濃加茂市民ミュージアムの可児光生館長をはじめスタッフの皆さんにお世話になりました。とくに芝辻竜也・山田三千代・西尾円さんは、準備から後片付けにいたるまで精力的に支援下さいました。記して厚謝申し上げます。

（つじ やすひで 岐阜大学教育学部助教授）

可児市柿田の東海環状自動車道工事で産出した植物化石

伊奈 治行・鹿野 勘次

1 はじめに

岐阜県南部の美濃加茂盆地には新第三紀中新世の瑞浪層群が分布し、植物化石や動物化石が豊富に産出する。本地域において美濃加茂盆地の北部から東部にかけて、瑞浪層群を貫いて東海環状自動車道の工事が行われた。工事に伴って地層が掘削され、大規模の土石置き場が作られた。その中から大型植物（葉）、淡水二枚貝、褐炭、こはく等の化石が産出した。そこで、化石調査をすると共に化石の産出層準を明らかにするために周辺地域の地質調査を行い、地質と産出化石についてその概要を報告した（鹿野・伊奈, 2005）。

前期中新世中村累層の植物化石については、これまでに江場（1955）や徳永・尾上（1960）、Tanai（1961）、Huzioka（1964）により研究され

てきた。江場は可児地区の植物化石を研究し、その植物化石群を中村植物群と命名し、東北地方の阿仁合型植物群に属するとした。徳永・尾上は可児地区の中村累層と土岐地区の土岐夾炭累層の植物化石を報告し、土岐地区の植物化石には暖帯種が含まれることを指摘し、土岐地区の植物化石は阿仁合型～台島型の過渡的な植物群と位置づけた。一方TanaiとHuziokaは可児地区、土岐地区に加え、岩村地区の阿木累層の植物化石を一括して、日吉植物群と命名し、阿仁合型植物群に属するとし、日吉植物群中に暖帯種が含まれるのは東北地方の阿仁合型植物群とくらべ南に位置しているためとした。

今回調査した植物化石は、中村累層上部層のシルト岩と砂岩から産出したもので、比較的多くの標本を採集することができた。これまでに中村累層上部層として報告された植物化石はなく、中村累層下部層の植物化石との相違点の有無を知る上で、中村累層上部層の植物化石を調査、検討することは有意義であると考えられる。

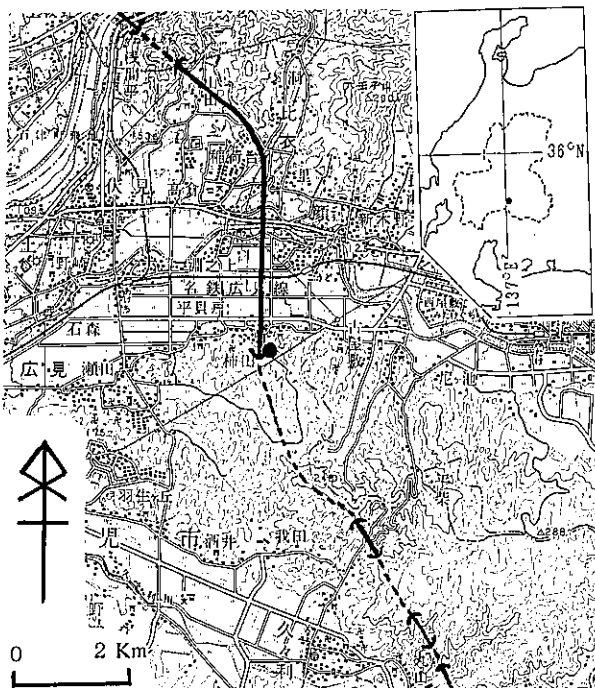
本研究では、調査した地質の概要を整理して、採集した植物化石の詳細を報告する。

2 地質概説

調査地域は、美濃帯中生層を基盤として、瑞浪層群・瀬戸層群・段丘堆積物が分布する。

美濃帯中生層は上麻生ユニットから成り、チャート・砂岩・泥岩および混在岩が分布する。

瑞浪層群は、下位から蜂屋累層・中村累層・平牧累層が分布し、その積算層厚は600m以上に及ぶ。蜂屋累層は主に火山碎屑岩で構成され、層厚は約330mである。中村累層は河川性の碎屑岩で構成され、層厚は約150mである。平牧累層は河川～湖沼性の碎屑岩に大量の火山碎屑岩が混じり込んで堆積し、層厚は約150mである。各



第1図 可児市柿田地域の位置

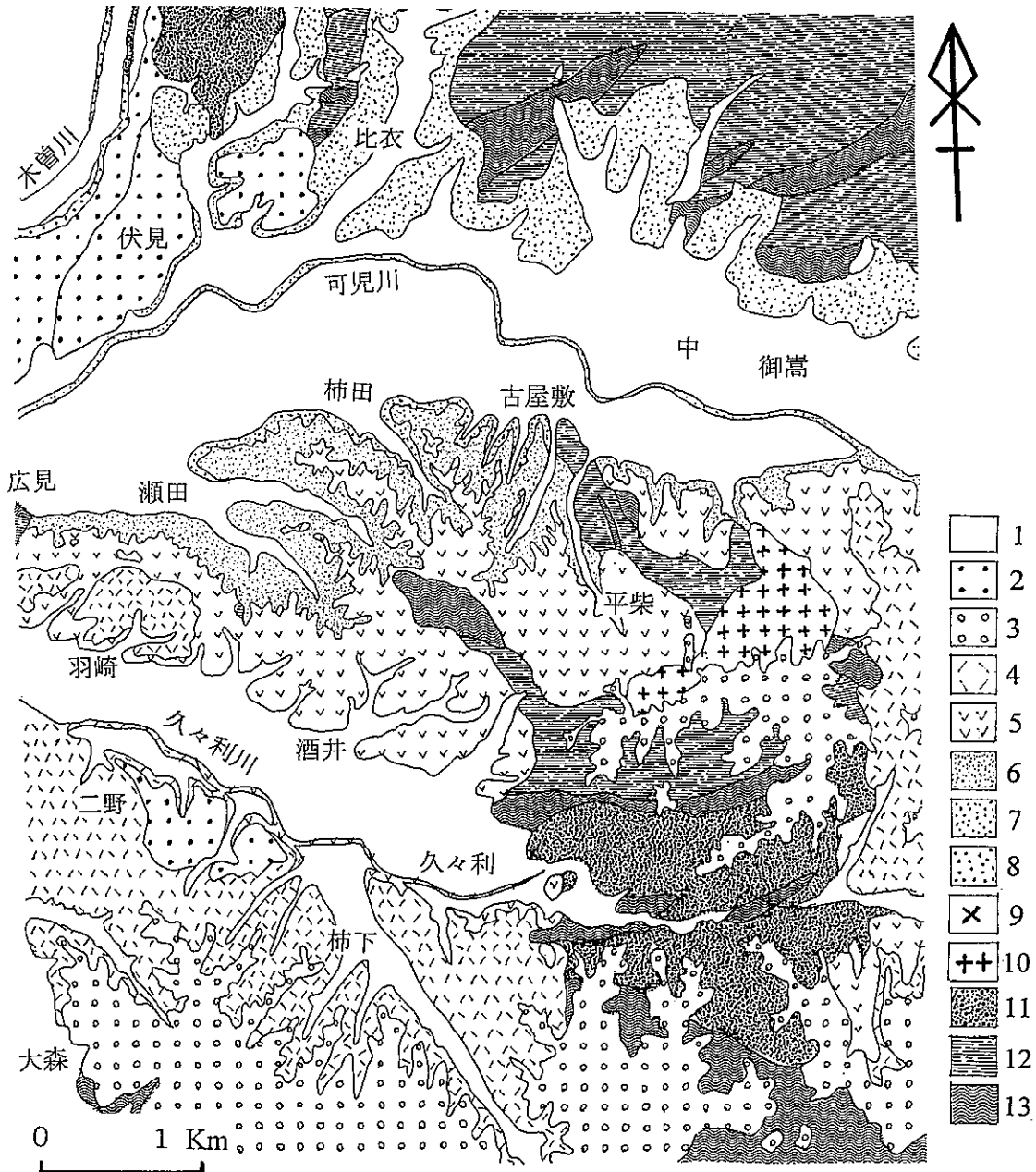
国土地理院発行の5万分の1地形図「美濃加茂」の一部を使用した。太線が東海環状自動車道。

累層の絶対年代は鹿野（2003）により、蜂屋累層が約2400～2000万年前、中村累層が約2000～1850万年前、平牧累層が約1850～1700万年前とされている。

美濃帯中生層や瑞浪層群を不整合に覆って、瀬戸層群の土岐砂礫層が分布する。段丘堆積物はおもに瑞浪層群をおおって分布し、木曾川と飛騨川沿いに数段に及ぶ典型的な河岸段丘群を

形成する。

可児市柿田地域には、美濃帯中生層を基盤岩として、中村累層中部～上部層・平牧累下部層が分布する。調査地域の地質図及び地質柱状図を、第2図および第3図に示す。中村累層上部層は対になる2層の凝灰岩層から上位であり、砂岩・泥岩・礫岩・褐炭および凝灰質砂岩で構成され、その層厚は約40mである。上部層の地層



第2図 可児市北東部地域の地質図

- 1：完新統，2：中位～高位段丘堆積物，3：瀬戸層群土岐砂礫層，（4～8：瑞浪層群），
 4：平牧累層上部層，5：平牧累層下部層，6：中村累層上部層，7：中村累層中部層，
 8：中村累層下部層，9：花崗斑岩，10：土岐花崗岩，（11～13：美濃帯堆積岩類），11：混在岩，
 12：泥岩砂岩互層，13：チャート

には平行葉理や斜交葉理が発達し、斜交層理がしばしば見られる。砂岩層の一部には、級化層理や漣痕が見られることがある。植物化石は平行葉理が発達する砂岩層に含まれ、二枚貝化石は層厚数10cmの塊状砂岩から産出する。上部層基底部の凝灰岩のフィッシュン・トラック年代は $20.4 \pm 1.2\text{Ma}$ である（鹿野，2002）。

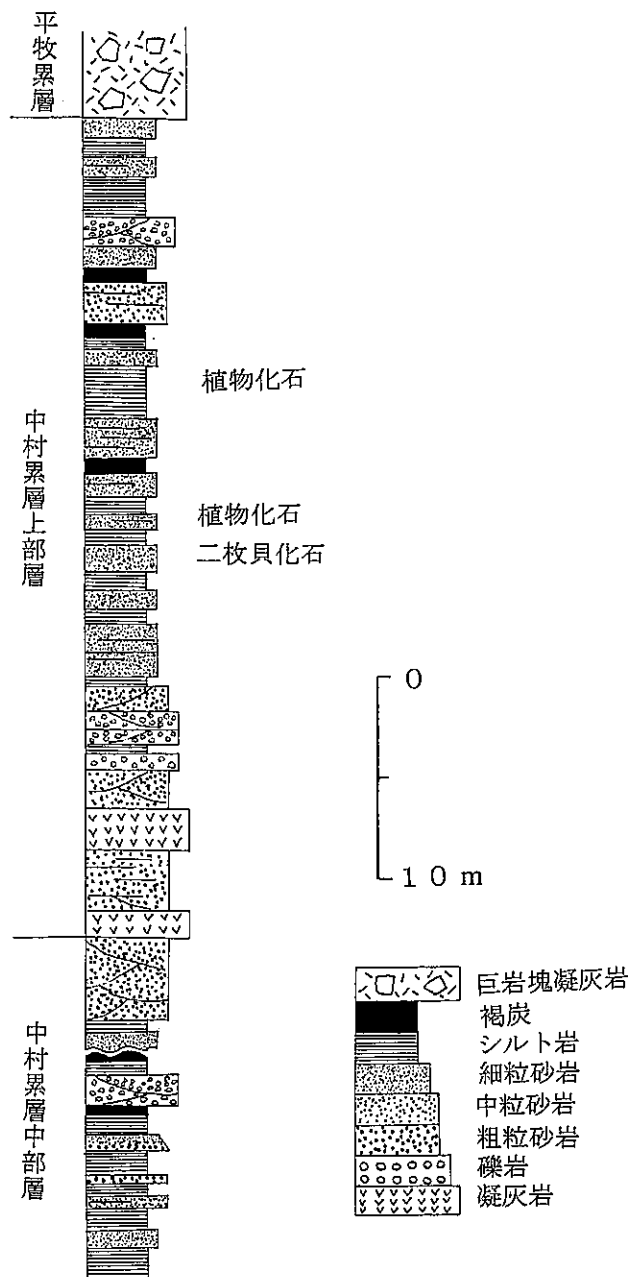
平牧累層下部層は巨岩塊を含む凝灰岩で構成され、特徴的な岩相を呈する。中村累層上部層を覆って約35mの厚さで分布する。巨岩塊は、

中村累層起源の砂岩・泥岩・凝灰岩・砂岩泥岩互層・褐炭の他に美濃帯起源のチャート・砂岩・泥岩・混在岩などで、角礫～亜角礫を呈する。美濃帯起源の巨岩塊は、基盤が近くに分布する地域に多くみられる。これらの巨岩塊の大きさは、最大では長径が約30mにも及ぶものから、数cmの小さな岩片まで大小さまざまである。凝灰岩中における岩塊の占める割合が高い。本凝灰岩のフィッシュン・トラック年代は $18.4 \pm 1.2\text{Ma}$ である（鹿野，2002）。

3 中村累層上部層における植物化石の組成

調査地域において、138点の中村累層上部層の標本を検討し、9科15属21種を認めることができた（第1表）。その内訳は針葉樹2種、広葉樹19種で、広葉樹が優勢である。*Picea cf. maximowiczii*は常緑針葉樹で、球果が1個体採集された。*Metasequoia occidentalis*は落葉針葉樹で、球果と葉を伴う小枝が採集された。広葉樹は葉、小葉、および小苞が採集され、すべて落葉樹と推定される。もっとも種数の多い科はBetulaceae（カバノキ科）で3属6種が認められた。次いでUlmaceae（ニレ科）の種数が多く、2属5種を認めた。また、Juglandaceae（クルミ科）は3属3種、Fagaceae（ブナ科）は2属2種を認めることができた。他の科は1種よりなる。

中村累層上部層の植物化石のうち、*Metasequoia*属と*Carya*属を除くすべての属は日本に現存する。比較的採集量の多かった種は、*Metasequoia occidentalis*, *Alnus prenepalensis*, *Ulmus pseudolongifolia*, *Ulmus takayasui*, *Ulmus miopumila*である。これらの種と、採集量は少なかったが、*Pterocarya asymmetrosa*, *Alnus arasensis*, *Zelkova ungeri*などは、一般に湖沼や河川の周辺、あるいは氾濫原に生育していたと推定される種である。したがって、中村累層上部層の植物化石群は、堆積の場である湖沼や河川周辺、および氾濫原に生育していたと考えられる種が多く、極相林ではなく、地域的な植生を強く反映したものであると考えられる。



第3図 調査地域の地質柱状図

第1表 中村累層上部層の植物リスト

Pinaceae (マツ科)	<i>Picea cf. maximowiczii</i> Rgel
Taxodiaceae (スギ科)	<i>Metasequoia occidentalis</i> (Newberry) Chaney
Juglandaceae (クルミ科)	<i>Carya miocathaensis</i> Hu and Chaney <i>Juglans japonica</i> Tanai <i>Pterocarya asymmetrosa</i> Konno
Betulaceae (カバノキ科)	<i>Alnus arasensis</i> Huzioka <i>Alnus prenepalensis</i> Hu and Chaney <i>Betula uzenensis</i> Tanai <i>Carpinus stenophylla</i> Nathorst <i>Carpinus subcordata</i> Nathorst <i>Carpinus subyedoensis</i> Konno
Fagaceae (ブナ科)	<i>Castanea miomollissima</i> Hu and Chaney <i>Fagus antipofi</i> Heer
Ulmaceae (ニレ科)	<i>Ulmus miopumila</i> Hu and Chaney <i>Ulmus pseudolongifolia</i> Oishi and Huzioka <i>Ulmus sekiensis</i> Huzioka <i>Ulmus takayasui</i> Huzioka <i>Zelkova ungeri</i> (Ettings.) Kovats
Rosaaceae (バラ科)	<i>Rosa usyuensis</i> Tanai
Leguminosae (マメ科)	<i>Maackia onoei</i> Matsuo
Aceraceae (カエデ科)	<i>Acer ezoanum</i> Oishi and Huzioka

4 中村累層下部層と上部層の植物化石群比較

中村累層下部層の植物化石群は、落葉広葉樹を主体とし、針葉樹やシダ類及び水生植物で構成される(伊奈ほか, MS)。一方上部層の植物化石群も針葉樹を伴い、落葉広葉樹がひじょうに優勢である。また、上部層の植物化石群を構成する21種のうち、12種が下部層から産出していて、上部層と下部層とでは共通する種が多い。採集量においても、上部層から多く採集された *Metasequoia occidentalis*, *Alnus prenepalensis*, *Ulmus pseudolongifolia*, *Ulmus takayasui* は下部層からも豊富に産出する。したがって、中村累層上部層と下部層の植物化石群との間には大きな相違点はない。

中村累層下部層からしばしば採集される水生植物や、下部層の主要な構成種である *Salix varians* Goeppert, *Acer rotundatum* Huzioka,

"*Alangium*" *aequalifolium* (Goeppert) Krysht.などは上部層から見つからないが、これらの植物は局所的な植生を反映しやすく、上部層の化石がより広範な地域から多量に採集されれば、発見される可能性がある。

中村累層上部層からは *Carya miocathaensis*, *Carpinus stenophylla*, *Castanea miomollissima*, *Rosa usyuensis*, *Maackia onoei* のような東北地方の阿仁合型植物群には見られない種が含まれる。このことは Tanai (1961) や Huzioka (1964) がすでに指摘しているように、本地域が東北地方にくらべ南に位置しているためであると考えられる。

5 中村累層上部層の気候環境

中村累層上部層の植物化石は採集量、同定できた種数が少なく、これらの植物化石から当時の気候を推定することはまだまだ十分な資料ではない。しかしながら、あえて本植物化石群から古気候を推定すると、*Picea cf. maximowiczii*, *Pterocarya asymmetrosa*, *Betula uzenensis*, *Carpinus stenophylla*, *Carpinus subcordata*, *Fagus antipofi*, *Ulmus takayasui*, *Acer ezoanum* などはそれらの近似現生種が主に冷温帯に分布する。また、それ以外の種も近似現生種が冷温帯から暖温帯に分布するものである。したがって中村累層上部層が堆積した当時の気候は冷温帯、あるいは冷温帯から暖温帯にかかる気候環境であったと推定されるが、その信頼度は低い。

6 おわりに

美濃加茂盆地で瑞浪層群を掘削する工事が行われると化石が産出する。とくに、中村累層の特定の層準からは豊富に産出する。また、中村累層の上部層には小型ほ乳類・魚類・二枚貝が多産する層準が発達する。東海環状自動車道の柿田トンネルの入り口付近は、中村累層の上部層が広く分布することから、上述の化石に注目して調査した。掘削した中村累層の岩石は、雨等で湿った後に乾燥するともろくなって細かく

砕ける性質があるため、雨にさらされない状態で調査する必要がある。また、大量の土石が捨てられるため調査が追いつかないことが多い。今回の調査では比較的豊富な資料を収集することができたのでここにまとめて報告した。なお、産出化石のうち、本報告に含まれるものは大部分を標本資料として保管している。

文献

江場信彦 (1955), 岐阜県可児郡地方の中村・平牧層の植物群について. 名古屋地学, (6), 6-8.

Huzioka, K., 1964, The Aniai flora of Akita Prefecture, and the Aniai-type floras in Honshu, Japan. *Jour. Min. Coll. Akita Univ.*, ser. A, 3 (4), 1-105.

坂巻幸雄・鈴木泰輔・小尾五明 (1969), 岐阜県御嵩地区の地質とウランの産状. 地質調査所報告, 232, 747-771.

鹿野勘次 (2003), 岐阜県美濃加茂盆地の下部中新統・瑞浪層群のフィッシュン・トラック年代. 美濃加茂市民ミュージアム紀要, 2, 1-8.

鹿野勘次・伊奈治行 (2005), 可児市東部地域の東海環状自動車道の地質と化石. 岐阜県地学教育, 41, 1-8.

Tanai, T., 1961, Neogene floral change in Japan. *Jour. Fac. Hokkaido Univ.*, ser. 4, 11 (2), 119-398.

徳永重元・尾上 亨 (1960), 岐阜県美濃炭田土岐・可児両地区ならびに天草・三池両炭田における主炭層の古植物学的研究報告. 地調月報, 11 (9), 577-584.

富田幸光 (1999), 岐阜県可児市産の小型哺乳類化石ー日本初の第三紀小型哺乳動物化石群ー. 国立科学博物館ニュース, 367, 20-23.

安野敏勝 (1982), 可児盆地の瑞浪層群産コイ亜科魚類化石. 瑞浪市化石博物館報告, 9, 15-23.

図版1 中村累層植物化石 I (×1)



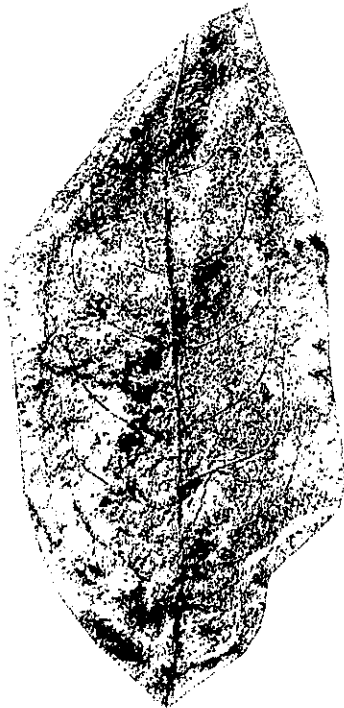
Metasequoia occidentalis (Newberry) Chaney



Picea cf. *maximowiczii* Rgel



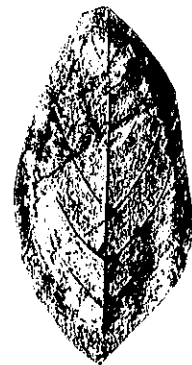
Carya miocathaensis Hu and Chaney



Juglans japonica Tanai



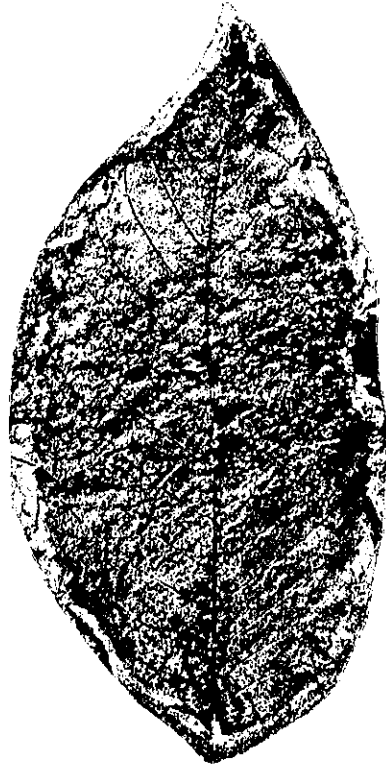
Pterocarya asymmetrosa Konno



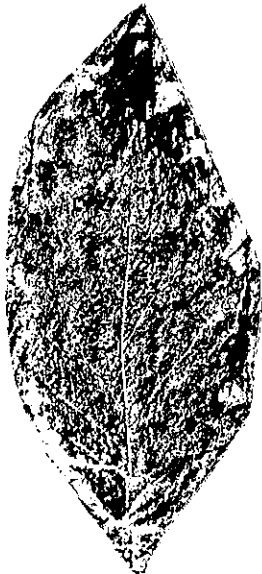
Alnus arasensis Huzioka



Ulmus sekiensis Huzioka



Ulmus takayasui Huzioka



Zelkova ungeri (Ettings.) Kovats.



Rosa usyuensis Tanai



Maackia onoei Matsuo



Acer ezoanum Oishi and Huzioka

尾崎遺跡出土の弥生時代から古墳時代前期の土器

—尾崎遺跡発掘調査報告書 補遺—

磯谷 祐子

はじめに

尾崎遺跡は、美濃加茂市蜂屋町に所在する集落遺跡であり、木曾川、飛騨川によって形成された上位段丘上に位置している。本遺跡は、「みのかも文化の森」整備計画に伴い平成5年7月から平成14年3月まで発掘調査が行われ、2002年に「尾崎遺跡発掘調査報告書」が刊行されたが、出土資料が膨大であったため現在も整理作業を継続して行っている。

また、市調査区の南に隣接する地区では、平成4年から5年まで（財）岐阜県文化財保護センターによって、国道41号線美濃加茂バイパス建設に伴う発掘調査が行われ、竪穴住居址、建物址、溝状遺構など弥生時代中期～奈良時代、中世に属する遺構が検出された。

他に遺跡の周辺では、西へ3.7kmの地点に有孔磨製石鏃や独鈷石などが出土した弥生時代から古墳時代の集落址である南野遺跡、西へ2.5kmの地点に鉄剣や多孔銅鏃などが出土した弥生時代後期の墳丘墓である伊瀬粟地遺跡などが知られている。

尾崎遺跡の遺構

尾崎遺跡では、弥生時代中期から古代にかけての集落址として竪穴住居址、掘立柱建物址が検出されたほか、縄文時代晩期の埋甕遺構、中世の塚、時期は不明ながら鍛冶に関わると見られる遺構などが存在していた。また、今回は触れないが、遺構の存在しない広場状の空白域に大量の須恵器片が集中して出土する地点も見つかっている。

今回紹介する資料は、報告書刊行後に整理を行った弥生時代中期と後期から古墳時代前期にかけての住居址から検出された土器類を中心とし、その他の遺構、包含層検出の当該期の土器も加えている。報告書において尾崎Ⅲ期～Ⅴ期の三期に区分される期間にわたっているが、ここで紹介する資料には必ずしも出土遺構自体の年代観に合致し

ないものも含まれているため、掲載順序は遺構の年代観によらず、遺構番号の順によることとした。

尾崎遺跡における当該期の住居址としては、弥生時代中期（尾崎Ⅲ期）の71、75号住居址、弥生時代後期～古墳時代初頭（尾崎Ⅳ期）の33、37、38、42、70、78、80、86、87、102、103号住居址、古墳時代前期（尾崎Ⅴ期）の50、72、73、74、76、77、79、82、85、88、89、92、97、101号住居址が確認されている。このうち、75、33、37、42、86、73、82、85号住居址については、報告書掲載分以外に追加報告すべき資料がなかったため、今回は掲出していない。

その他の掲載資料は、性格不明遺構5と、215、262、748、757、767、787、804号土壇及び包含層からの出土である。

当該期の遺構は、33号住居址が本館地区、85号住居址が東駐車場地区、性格不明遺構5が神社地区にある以外、ほとんど生活体験館地区と南駐車場地区、同進入路区に集中している。今回掲載する包含層出土の資料も、生活体験館地区と南駐車場地区及び同進入路区において検出されたものである。

ただし、本館地区では、今回掲載の範囲外である6世紀前葉の時期に属すると見られる61号住居址から、石庖丁や有肩石斧が出土し、付近の包含層からパレス壺も出土している。これについて、報告書掲載の61号住居址実測図を再確認したところ、その覆土の土層断面図から2つの遺構の切合いが読み取れた。報告書の段階では認識されていなかったが、61号住居址は弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構と6世紀前葉の遺構が重複したものであると考えられる。

なお、本館地区において、弥生時代中期に属すると思われる土器片が、遺構に伴わない形で集中して検出された地点が2ヶ所あり、遺物集中区13、14とされているが、特殊な出土状況であるため今回は取り扱わず、後日稿を改めて紹介したい。

各遺構と遺物の検討

今回紹介する資料のうち、出土遺構の年代観と明らかに矛盾するものについては、なるべく本来の帰属を検討している。ただし、尾崎V期の遺構である72号住居址の条痕文系土器は、特に量が多く、形のまとまったものもあるため、一応72号住居址の遺物として掲載した。これについては、第3図-1の条痕文系土器が、住居址内炉址脇のピットから出土している状況を見ても、より古い時代の遺構をV期の住居址が壊し、古い遺構とそれに伴う遺物の一部が残されていた可能性がある。なお、報告書掲載の72号住居址の平面図では、ピットが炉跡を切っているように表現されているが、これは掘りすぎによると考えられる。

74号住居址は遺物量が豊富で、高杯、壺類、S字甕が多寡の別なく存在し、それぞれの器種に形態、法量の多様性も認められる。この74号住居址からは、床面直上より2個の粘土塊が検出され、土器の原材料かとも思われるが、焼成など製作に関わる遺構は確認されておらず、その性格は不明である。

102号住居址も遺物量が豊富で、個々の資料の残存度も高い。74号住居址と102号住居址では、柱穴に土器の埋納が見られた。

第6図-17、18は790号土壙出土の資料であるが、790号土壙は92号住居址を切っている遺構であり、同土壙からは6世紀前葉の須恵器も出土しているため、今回掲載分については一応92号住居址に帰属するものとしている。

第7図-16の高杯が出土した性格不明遺構5は、床面ほぼ中央に被熱部をもつ平面不整形の遺構である。尾崎遺跡の調査区のうち、当遺構が位置する神社地区には、覆土に鍛造剥片などの鍛冶に関する遺物を含む土壙状の遺構が複数検出され、当遺構もそのひとつであった。これらの遺構からは主に6世紀前葉の須恵器などが出土しているが、当遺構については、出土の土器が掲出以外も含めてほとんど弥生時代後期に属すと見られ、床面直上からの検出も多いのに対し、須恵器などは小片がわずかに含まれるに過ぎない。また、遺構の掘り下げにあたっては二段階にわたってプランが確

認されており、その状況からは、鍛冶関連遺構の下層に弥生時代の遺構が遺存していたことが読み取れる。同じ神社地区の通常の竪穴住居址である4、12号住居址からも鍛造剥片などが検出されており、住居の廃絶後に鍛冶関連の廃棄物が投棄されたことをうかがわせるが、当遺構についても同様の状況が考えられるであろう。本遺跡においては、現在でも竪穴住居址が埋まりきらず、窪地となっている場合が多いことから、当地で鍛冶が行われた当時においても、廃棄物の投棄場所として選択されやすかったと推察できる。したがって、当遺構床面中央付近に見られる被熱部分が、弥生時代の竪穴住居址の炉跡であったか、鍛冶に関するものであったかは判断できない。

第8図-1のワイングラス形高杯が出土した215号土壙は削平を受けた住居址の柱穴か貯蔵穴などの部分がかろうじて遺存したものであろうかとも考えられる。

同-2の高杯が出土した262号土壙も複数の柱穴が切りあった状態だが、柱穴自体の所属時期は不明である。

748号土壙は76号住居址の上層にあった土壙であり、点数がまとまっているので独立して掲載しているが、その資料については76号住居址との関係を検討すべきであろう。

同-9の条痕文系土器が出土した757号土壙は、76号住居址によって切られている、より古い時代の住居址であった可能性が高い。

同-11の脚台部が出土した787号土壙は、検出面からの掘り込みが非常に浅く、遺存状況が極めて悪かったため判然とはしないが、住居址であった可能性もある。

804号土壙は101号住居址上にあり、掲出の資料は、101号住居址に関わるものである可能性もある。

包含層出土資料のうち、第8図-13~15は生活体験館地区の出土で、13は78号住居址の東側約1~3mの地点、14、15は76号住居址と767号土壙の間の地点で検出されている。同-16、18、19は南駐車場進入路の出土で、16は51号住居址の東2~4mの地点、18は50号住居址の東0~2mの地点から検出されている。19は52号住居址の遺物とし

て検出されたが、同住居址は8世紀後葉から9世紀前葉の時期の遺構であり、当然伴うものではないと考えられるので包含層扱いとした。同-17は南駐車場地区の出土で、38号住居址の西北隅を含む2m四方の範囲から検出されている。

今回掲出の資料について

今回紹介する個々の資料についての説明は遺物観察表に譲り、ここでは概観を述べたい。

まず、器種としては壺、甕、高杯、器台、他に体部器形不明の脚台部片、把手があり、中でも、条痕文系土器の甕、S字甕、高杯などが多い。

条痕文系土器は、概ね胎土に白色砂粒を多量に含むが、第3図-2、3と第6図-2、3はやや少ない。他の砂粒については、第2図-14、15、第3図-3、5、7、8、第6図-5が少量、第3図-6、第6図-2～4が若干、その他が多量に含んでいる。砂粒の形状は、角礫状～亜角礫状が多いが、第2図-6、第3図-6は亜円礫状のものが多く、第4図-18は雲母片を若干含んでいる。胎土の粗いものが多いが、第4図-18は空気孔が多いが密な土であり、第6図-3、4は粘りのある質感を有する。

S字もしくはその他の台付甕は、角礫状～亜角礫状の砂粒を含むものが多いが、第3図-11、第6図-17では亜円礫状を呈する。ほとんどの個体で雲母片が観察できる。胎土はやや粗く、砂っぽいものが多いが、第6図-17は密な土、第4図-16、第8図-8、10、11はやや密な土である。

他の壺、甕、鉢は胎土に角礫状～亜角礫状の砂粒を含むものが多いが、第5図-4、第7図-15は円礫状、第8図-6は亜角礫状～亜円礫状、第8図-13、18は亜円礫状の砂粒を含んでいる。また、第8図-5の砂粒は特に鋭い角礫状を呈している。含まれる砂粒の量は概ね多いが、第2図-4、13、第3図-20、第6図-15、第8図-5は少量である。第4図-3、5、第5図-12、第8図-4には雲母片が確認できる。胎土はほとんど密だが、第4図-4はやや粗く、第4図-2は粗い。

高杯、器台なども胎土に角礫状～亜角礫状の砂

粒を含むものが多いが、第3図-13、第4図-19は亜角礫状～亜円礫状、第8図-19は亜円礫状、第5図-8は円礫状の砂粒を含む。概ね白色砂粒を多く含み、他の砂粒は多寡にばらつきがある。第2図-8、第5図-7、第7図-6は白色砂粒が少なく、第7図-7、16、第8図-19はほとんど含まない。胎土は密で均質なものが多いが、第2図-10、第3図-15、17、第4図-19、第5図-1はやや粗い。第5図-16には若干の雲母片が見られる。

以上の観察より、今回紹介する資料は大部分が胎土に角礫状～亜角礫状の砂粒を含んでいると言えるが、一部の高杯と加飾壺には円礫状～亜円礫状の砂粒が含まれており、産地の違いを示唆するものと思われる。ほとんどのS字甕と若干の壺、甕、高杯に雲母片が見られることについても同様のことが言えるであろう。

円礫状～亜円礫状の砂粒を含むものに関しては、河川の下流域において採土されたことが推察され、当地の周辺では木曾川下流域が挙げられるであろう。その地域からの製品、もしくは原料の搬入が想定できるのではないだろうか。

なお、本遺跡出土の酸化焰焼成の土器は、焼成状態が不良ないしやや不良と判断されるものが多いが、その程度に関しては、同遺跡内の個々の資料同士の比較材料にはなっても、絶対評価や他遺跡の資料との比較には直接つなげられない。なぜならば、丘陵上にある本遺跡の資料は周辺河川流域の遺跡に見られる同時期の資料に比べて明らかに保存状態が劣り、原状の復元が困難であると同時に本来の焼成状態の判断も下しがたい状況にあるからである。一個体の資料の中でも黒斑部分は遺存状態が良好である場合が多いため、本遺跡の資料が元来取り立てて焼成状態の劣悪なものであったとも考えられない。このような状況は、保水力の弱い砂地にある河川流域の遺跡に比べ、本遺跡のような丘陵地の遺跡では土壌の粘性が強く保水力が高いために起こると考えられる。

黒斑部分の状態が比較的良好なのは、炭素吸着が耐水性に関わっているからであろう。須恵器において、いわゆる「生焼け」のもの遺存状態が

特に劣悪であるのもそのためであると思われる。

個々の資料について、環境その他の諸条件を考慮に入れながらの、より客観性の高い資料分析が今後必要であろうと考えられる。

おわりに

本遺跡は、河川による開析のため南に向かって舌状を呈する高位段丘上に展開した集落遺跡であり、特に弥生時代～古墳時代前期の遺構は、先端に近い南半部分に集中している。その中でも、弥生時代中期には住居址が極少数点在する状況であったものが、弥生時代後期～古墳時代前期には集落としてまとまっていく様相が、市調査区とともに南に隣接する県調査区の報告からも伺える。

今回は、主に住居址出土の土器資料についてのみ検討を行ったが、今後は、集落部分から外れた遺物集中区13、14の資料調査を進め、当該期の遺跡の全体像をより明確なものにするとともに、有肩石斧や有孔磨製石鏃など、土器以外にも特徴的な資料が多く出土している本遺跡の有する性格について検討を加えていきたい。

謝辞

本稿の作成にあたっては、次の方々のご協力を賜った。記して感謝の意を申し上げたい。

(五十音順、敬称略)

(実測) 井戸美里、日比野典子

(トレース) 日比野典子

(拓本) 竹谷洋子、星野京子、渡辺りゅう子

(遺物観察表) 藤村 俊、日比野典子

(いそがい ゆうこ 日本考古学協会会員)

追記

本稿脱稿後、可児市教育委員会 吉田正人氏より、74号住居址出土の資料(第3図-14)について北陸系とのご教示を賜った。記して感謝の意を申し上げるとともに今後また各方面よりさらなるご教示を賜れるよう切に願うものである。

遺物観察表 (紀要掲載分)

出土地区	実測図	登録資料番号	遺物整理番号	遺構名	器種	残存度	時期	法量(cm)			胎度	焼成	色	調	成形調整等		備考
								器高	口径	胴径					底径	外面	
南駐車場	第2図	794	460	38号住居址	広口壺	口縁部1/4	尾崎IV	4.3	-	-	粗	不良	明黄褐10Y6/6	ナデ	縦位ハケメ	口縁部内面斜位刺突	
南駐車場	第2図	793	459	38号住居址	高杯	口縁部小片	尾崎IV-1	(23.8)	-	-	普	不良	明黄褐10Y6/6	ナデ	-	-	
南駐車場	第2図	798	500	50号住居址	壺	口縁~胴部上半	尾崎IV	(7.0)	-	-	普	不良	淡黄2.5Y8/3 黄灰2.5Y4/1	ナデ	ナデ	広口	
生活体験館	第2図	850	615	70号住居址	甕	口縁部1/4	尾崎IV	(32)	-	-	密	普	明黄褐10Y7/6	ナデ	ナデ	-	
生活体験館	第2図	851	612	71号住居址	壺	頸部小片	-	7.3	-	-	普	不良	にぶ黄褐10YR7/4	ナデ	直線文 条痕	-	
生活体験館	第2図	852	611	71号住居址	深鉢	底部	尾崎III	-	-	8.4	普	普	にぶ黄褐10YR5/4	ナデ	縦位条痕	条痕文系 底部外面に布目痕	
生活体験館	第2図	859	649	72号住居址	高杯	杯~脚部1/2	-	-	-	-	密	良	にぶ黄褐10YR6/4	ナデ	ハラミガキ ナデ	有段	
生活体験館	第2図	853	635	72号住居址	高杯	脚部	尾崎V	6.2	-	-	普	普	にぶ黄褐10YR7/4	ナデ	ナデ	椀形 三方向透孔	
生活体験館	第2図	854	632	72号住居址	高杯	脚部	尾崎V	7.4	-	-	普	普	明黄褐10YR6/6	ナデ	ハラミガキ ナデ	-	
生活体験館	第2図	858	648	72号住居址	高杯	脚部小片	-	4.5	-	-	普	不良	黄橙10YR8/6	ナデ	ナデ	-	
生活体験館	第2図	872	639	72号住居址	器台	基部	-	-	-	-	普	普	明黄褐10YR7/6	ナデ	-	-	
生活体験館	第2図	873	644	72号住居址	-	脚台部	-	-	-	-	普	普	にぶ黄褐10YR7/4	ナデ	-	径1.5cm程度の透孔	
生活体験館	第2図	861	641	72号住居址	壺	1/6	-	3.2	-	-	普	不良	橙7.5YR6/6	ナデ	ナデ	-	
生活体験館	第2図	867	628	72号住居址	深鉢	口縁部小片	尾崎III	-	-	-	普	良	褐7.5YR4/4	ナデ	口唇斜位条痕 横位条痕	条痕文系	
生活体験館	第2図	868	650	72号住居址	深鉢	口縁部小片	尾崎III	-	-	-	普	普	明褐7.5YR5/6	ナデ	口唇斜位条痕 横位条痕	条痕文系	
生活体験館	第2図	856	652	72号住居址	甕	胴部小片	尾崎IV	5.7	-	-	粗	不良	明黄褐10YR6/6	ナデ	下半縦位条痕 上半斜位条痕 ナデ	条痕文系	
生活体験館	第3図	863	653	72号住居址	甕	2/3	尾崎IV	21.3	-	-	粗	不良	褐7.5YR4/4	ナデ	縦位条痕	条痕文系	
生活体験館	第3図	857	651	72号住居址	甕	底部2/3	尾崎IV	-	-	(5.9)	普	普	にぶ黄褐10YR6/4	ナデ	縦位条痕後端部ナデ	条痕文系	
生活体験館	第3図	871	645	72号住居址	深鉢	底部小片	尾崎III	-	-	(10.0)	普	普	明黄褐10YR6/6	ナデ	縦位条痕後端部ナデ	条痕文系	
生活体験館	第3図	864	620	72号住居址	深鉢	口縁部小片	尾崎III	-	-	-	普	不良	にぶ黄褐10YR5/4	ナデ	横位条痕	条痕文系	
生活体験館	第3図	865	623	72号住居址	深鉢	口縁部小片	尾崎III	-	-	-	普	普	にぶ赤褐5YR4/3	ナデ	横位条痕	条痕文系	
生活体験館	第3図	866	646	72号住居址	深鉢	口縁部小片	尾崎III	-	-	-	粗	不良	にぶ黄褐10YR5/4	ナデ	横位条痕	条痕文系	
生活体験館	第3図	869	627	72号住居址	深鉢	口縁部小片	尾崎III	-	-	-	普	不良	にぶ赤褐5YR4/3	ナデ	横位条痕	条痕文系	
生活体験館	第3図	870	626	72号住居址	深鉢	口縁部小片	尾崎III	-	-	-	普	不良	暗赤褐5YR3/3	ナデ	横位条痕	条痕文系	
生活体験館	第3図	862	637	72号住居址	S字甕	口縁部小片	尾崎IV-1	-	-	-	普	普	にぶ黄褐10YR5/4	ナデ	横位条痕	条痕文系	
生活体験館	第3図	860	640	72号住居址	台付甕	脚台部1/2	-	-	-	-	普	普	明黄褐10YR7/6	ナデ	ナデ	S字甕C類	
生活体験館	第3図	855	634	72号住居址	台付甕	脚台部	-	-	-	-	普	普	にぶ黄褐10YR6/4	ナデ	ナデ	-	
生活体験館	第3図	456	683	74号住居址	高杯	杯部下半 脚部4/5	尾崎V	8.0	-	-	普	不良	淡黄橙7.5YR8/4~6	ナデ	脚部四方透孔	椀形	
生活体験館	第3図	455	812	74号住居址	高杯	脚部1/2	尾崎V	10.4	-	-	普	普	淡黄橙~にぶ黄橙 10YR6~7/4	ナデ	脚部三方透孔 ミガキ	椀へ向かうにつれてハの字状に黒く	
生活体験館	第3図	880	800	74号住居址	高杯	杯部1/3	尾崎V	5.7	(21.2)	-	粗	不良	淡黄橙7.5YR8/4	ナデ	ミガキ	北陸系	

出土地区	実測図	登録資料番号	遺構名	器種	残存度	時期	法量(cm)			胎度	焼成	色調	成形・調整等		備考	
							器高	口径	胴径				底径	外面		内面
生活体験館	第3図	15	891	684	74号住居址	高杯	杯~脚部	尾崎V?	5.4	-	-	不良	にぶい黄楢10YR6/4	ミガキ	-	楕形
生活体験館	第3図	16	877	804	74号住居址	器台	脚部	尾崎V	7.7	-	-	不良	黄楢7.5YR7/8	脚部三方透孔	-	楕へ向かづにつれてハの字状に照く
生活体験館	第3図	17	878	664	74号住居址	高杯	脚部	尾崎V-2	7.9	-	-	不良	楢7.5YR6/8	-	シボリメ	有段高杯
生活体験館	第3図	18	876	671	74号住居址	高杯	脚部	尾崎V-2	7.1	-	-	普	にぶい黄楢10YR6/4	-	-	有段高杯
生活体験館	第3図	19	875	676	74号住居址	壺	口縁部	-	-	(11.8)	-	不良	楢7.5YR6/6	ナデ	ナデ	-
生活体験館	第3図	20	881	811	74号住居址	広口壺	口縁部小片	-	-	(14.0)	-	不良	明黄楢10YR6/6	ハラミガキ	ナデ	-
生活体験館	第3図	21	892	799	74号住居址	広口壺	口縁部	-	-	(15.4)	-	普	にぶい黄楢10YR6/4	-	-	-
生活体験館	第4図	1	894	798	74号住居址	広口壺	口縁部	-	-	12.6	-	普	楢7.5YR6/6、 榻灰10YR4/1	ナデ	ナデ	口縁部接合痕
生活体験館	第4図	2	890	677	74号住居址	壺	口縁部1/4	-	-	(16.2)	-	不良	にぶい黄楢10YR7/4	ハラミガキ	ナデ	口縁部内髷
生活体験館	第4図	3	893	814	74号住居址	壺	-	-	6.3	-	-	普	にぶい黄楢7.5YR6/4	口縁部接合痕にハケメ	-	-
生活体験館	第4図	4	896	680	74号住居址	壺	頸部小片	-	-	-	-	普	楢7.5YR6/6	直線文 竹管文	ナデ	-
生活体験館	第4図	5	879	685	74号住居址	壺	底部3/4	-	-	(5.8)	-	良	にぶい黄楢10YR5/4	ハケメ	-	-
生活体験館	第4図	6	883	667	74号住居址	鉢	底部	-	-	1.9	-	普	楢7.5Y7/6	ナデ	ナデ	-
生活体験館	第4図	7	884	675	74号住居址	壺	底部2/3	-	-	(4.3)	-	不良	楢5YR6/6	ナデ	ナデ	-
生活体験館	第4図	8	898	807	74号住居址	S字甕	口縁部小片	尾崎V-1	-	(12)	-	普	にぶい黄楢10YR5/3	口縁部ナデ脚部ハケメ	ナデ	S字甕C類
生活体験館	第4図	9	887	808	74号住居址	S字甕	口縁部小片	尾崎V-1	-	(15.5)	-	普	にぶい黄楢10YR7/4	口縁部ナデ脚部ハケメ	ナデ	S字甕C類
生活体験館	第4図	10	888	672	74号住居址	S字甕	口縁部小片	尾崎V-1	-	(12)	-	不良	にぶい黄楢10YR6/4	口縁部ナデ脚部ハケメ	ナデ	S字甕C類
生活体験館	第4図	11	897	670	74号住居址	S字甕	口縁部小片	尾崎V-1	-	(17.2)	-	普	にぶい黄楢10YR5/3	口縁部ナデ脚部ハケメ	ナデ	S字甕C類
生活体験館	第4図	12	917	809	74号住居址	S字甕	口縁部	尾崎V-1	2.4	-	-	普	にぶい黄楢10YR7/3	口縁部ナデ脚部ハケメ	ナデ	S字甕C類
生活体験館	第4図	13	886	669	74号住居址	S字甕	口縁部小片	尾崎V-1	-	-	-	不良	にぶい黄楢10YR7/4	ナデ	ナデ	S字甕C類
生活体験館	第4図	14	895	679	74号住居址	S字甕	口縁部小片	尾崎V-1	-	(15)	-	普	にぶい黄楢10YR5/4	口縁部ナデ脚部ハケメ	ナデ	S字甕D類
生活体験館	第4図	15	885	674	74号住居址	S字甕	口縁部小片	尾崎V-1	-	(12.1)	-	普	にぶい黄楢10YR6/4	口縁部ナデ脚部ハケメ	ナデ	S字甕D類
生活体験館	第4図	16	889	665	74号住居址	台付甕	脚部	-	-	-	5.5	普	にぶい黄楢10YR5/4	ハケメナデ	ナデ	-
生活体験館	第4図	17	882	666	74号住居址	把手	2/3	-	-	-	-	普	楢7.5Y7/6	ナデ	ナデ	-
生活体験館	第4図	18	900	731	75号住居址	深鉢	頸部1/4	尾崎Ⅲ	6.3	-	-	粗	にぶい黄楢10YR5/4	横位羽状条痕	口縁内面剥点文(半粒粗)	条痕文系
生活体験館	第4図	19	906	782	76号住居址	高杯	脚部上半	尾崎V	4.5	-	-	普	明黄楢10YR7/6	-	-	-
生活体験館	第4図	20	905	777	76号住居址	壺	口縁部小片	-	-	(16.4)	-	密	にぶい黄楢10YR5/3	ハケメ	ハケメ	-
生活体験館	第4図	21	915	794	76号住居址	壺	底部	-	-	-	3.1	普	にぶい楢10YR7/4	ナデ	ナデ	-
生活体験館	第4図	22	904	791	76号住居址	壺	底部1/2	-	-	-	(6.1)	普	にぶい黄楢10YR6/4	ナデ	ナデ	-
生活体験館	第4図	23	901	774	76号住居址	壺	口縁部1/5	-	-	(16)	-	粗	にぶい黄楢10YR5/4	ナデ	ナデ	-
生活体験館	第4図	24	907	790	76号住居址	壺	頸部1/6	-	2.4	-	-	普	楢7.5YR6/6	-	-	-
生活体験館	第4図	25	903	789	76号住居址	S字甕	口縁部小片	尾崎V-1	-	(12)	-	不良	楢7.5YR6/6	口縁部ナデ脚部ハケメ	ナデ	S字甕D類

出土地区	実測図	登録資料番号	遺構名	器種	残存度	時期	法量(cm)			胎度	焼成	色	成形調整等		備考
							器高	口径	胴径				底径	外面	
生活体験館	第4図	26	796	76号住居址	S字甕	口縁部1/4	尾崎V-1	-	(16)	-	普	に黄褐色10YR6/4	口縁部ナデ 胴部ハケメ	ナデ	S字甕C類
生活体験館	第4図	27	908	77号住居址	S字甕	口縁部小片	尾崎V-1	2.6	-	-	普	明黄褐色10YR7/6	口縁部ナデ 胴部ハケメ	ナデ	S字甕C類
生活体験館	第5図	1	910	77号住居址	高杯	胴端部欠損	-	8.7	-	-	普	に黄褐色10YR5/4	ヘラミガキ 四方透孔	-	有段高杯 脚部内彎
生活体験館	第5図	2	911	77号住居址	広口壺	口縁部小片	-	(14.8)	-	-	普	明黄褐色10YR7/6	-	-	-
生活体験館	第5図	3	912	77号住居址	壺	頸~肩部小片	-	4.4	-	-	不良	に黄褐色10YR7/3	直線文 斜行刺突文	-	-
生活体験館	第5図	4	913	77号住居址	壺	肩部小片	-	2.7	-	-	普	明褐色5YR5/6	直線文 竹管文	ナデ	-
生活体験館	第5図	5	914	77号住居址	甕	口縁部1/6	尾崎IV	-	(19.6)	-	普	橙5YR6/8、黄灰2.5Y4/1	縦位条痕	ナデ	条痕文系
生活体験館	第5図	6	916	78号住居址	S字甕	頸部小片	尾崎V-1	2.7	-	-	不良	に黄褐色10YR7/3	口縁部ナデ 胴部ハケメ	ナデ	-
生活体験館	第5図	7	918	79号住居址	器台	基部下半~脚部	尾崎IV?	11	-	-	普	に黄褐色10YR7/4	ヘラミガキ 三方透孔	ナデ	有段高杯 ハの字状
生活体験館	第5図	8	923	79号住居址	壺	底部	-	4.4	-	-	不良	に黄褐色10YR7/4	-	-	-
生活体験館	第5図	9	926	79号住居址	ハラス壺	口縁部1/6	-	(14.8)	-	-	普	橙7.5YR7/6	口縁部腹凹線文 ナデ	ナデ	-
生活体験館	第5図	10	922	757号住居址	壺	頸部1/4	-	3.9	-	-	普	橙5YR6/8	ナデ	ナデ	-
生活体験館	第5図	11	919	79号住居址	-	胴~底部	-	1.1	-	-	普	明赤褐色5YR5/6	ナデ	ナデ	-
生活体験館	第5図	12	925	79号住居址	壺	胴下半~底部	-	-	-	6.7	普	明赤褐色5YR5/8	ヘラミガキ	胴部ナデ 底部ハケメ	-
生活体験館	第5図	13	921	79号住居址	壺	底部1/3	-	-	(6)	-	普	橙7.5YR6/6	-	ナデ 底部ハケメ	-
生活体験館	第5図	14	924	788号住居址	S字甕	頸~肩部1/6	尾崎V-1	3	-	-	不良	に黄褐色10YR6/4	口縁部ナデ 胴部ハケメ	ナデ	S字甕C類
生活体験館	第5図	15	920	79号住居址	台付甕	脚部	-	2.7	-	-	普	に黄褐色10YR7/3	ハケメ	ナデ	-
生活体験館	第5図	16	937	851号住居址	高杯	杯部上半1/6	尾崎V-1	-	(19.2)	-	普	橙5YR6/8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	屈折外反
生活体験館	第5図	17	929	845号住居址	高杯	杯部1/3	尾崎V-1	-	(19.6)	-	不良	淡黄褐色10YR8/4	波状文 ヘラミガキ	-	屈折外反
生活体験館	第5図	18	931	847号住居址	高杯	脚部	尾崎IV	-	-	12	普	に黄褐色10YR7/3	ハケメ 四方透孔	ナデ	長脚
生活体験館	第5図	19	450	833号住居址	-	脚部	尾崎IV	-	-	12.6	普	明赤褐色5YR5/8	ヘラミガキ	ナデ	柱状の中空洞 裾部は大き開く
生活体験館	第6図	1	930	834号住居址	壺	頸~肩部1/4	-	10.9	-	-	普	に黄褐色10YR6/4	胴部直線文、羽状深文ナデ	-	頸部が垂直に立ち上がる
生活体験館	第6図	2	927	848号住居址	甕	口縁部1/5	尾崎IV	-	(21.7)	-	普	灰黄褐色10YR6/2	縦位条痕	口縁内面列点文(単位4-5) ナデ	条痕文系
生活体験館	第6図	3	935	846号住居址	甕	口縁部1/6	尾崎IV	-	(19.4)	-	普	灰黄褐色10YR5/2	縦位条痕	ナデ	条痕文系
生活体験館	第6図	4	932	850号住居址	甕	口縁部1/6	尾崎IV	-	(19.4)	-	普	明赤褐色5YR5/6	縦位条痕	口縁内面列点文 ナデ	条痕文系
生活体験館	第6図	5	928	842号住居址	甕	底部1/3	尾崎IV	-	-	(5.8)	普	明赤褐色5YR5/6	縦位条痕	ナデ	条痕文系
生活体験館	第6図	6	936	844号住居址	甕	底部1/4	尾崎IV	-	-	(5.4)	普	橙5YR6/6	縦位条痕 底部布目痕	ナデ	条痕文系
生活体験館	第6図	7	933-934 853-843	80号住居址	甕	胴下半1/4~底部1/3	尾崎IV	6	-	(5)	普	明赤褐色5YR5/6	縦位条痕 底部木葉痕	ナデ	条痕文系
生活体験館	第6図	8	938	823号住居址	高杯	脚部下半1/5	-	-	-	(13.2)	普	に黄褐色10YR6/4~黒褐色2.5Y3/1	ヘラミガキ 透孔	ナデ	やや内彎
生活体験館	第6図	9	939	824号住居址	広口壺	口縁部1/4	-	-	(5.8)	-	不良	浅黄2.5Y7/4	ヘラミガキ	ナデ	-
生活体験館	第6図	10	941	839号住居址	器台	脚部上半	尾崎IV	6.3	-	-	不良	に黄褐色10YR6/4	ヘラミガキ 三方透孔	ヘラミガキ ナデ	脚部は基部からただちに外反

出土地区	実測図	登録管 料番号	登録簿 冊番号	遺構名	器種	残存度	時期	法量 (cm)		胎度	焼成	色	調	成形・調整等		備考
								器高	口径					外径	内面	
生活体験館	第6図	11	940	827 88号住居址	高杯	脚部上半	尾崎IV	6.1	-	密	普	明褐7.5YR5/6	ハラムミガキ 三方透孔	シボリ	脚部はハの字状に広がる	
生活体験館	第6図	12	942	829 89号住居址	高杯	杯部下半	-	3.3	-	普	普	橙5YR6/8	ナデ	ナデ	椀形	
トレンチ	第6図	13	943	831 90号住居址	甕	口縁部1/6	-	5.5	-	普	普	にぶい黄橙10YR5/3	ナデ	ナデ	-	
南駐車場	第6図	14	947	864 92号住居址	ハレス壺	口縁部1/8	-	(18.6)	-	不良	不良	明黄緑10YR6/6	-	-	-	
南駐車場	第6図	15	946	866 92号住居址	ハレス壺	口縁部1/8	-	(18.2)	-	不良	不良	にぶい黄橙10YR7/4	-	-	口縁端部下端がやや垂下	
南駐車場	第6図	16	944	858 92号住居址	台付甕	脚部	-	-	8.4	密	普	にぶい黄橙10YR6/4	ハケメ	ハケメナデ	-	
南駐車場	第6図	17	1030	965 92号住居址	S字甕	口縁部小片	尾崎V-1	2.5	-	普	普	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部ナデ 胴部ハケメ	ナデ	S字甕C類 790号土壺として取り上げ	
南駐車場	第6図	18	1028	964 92号住居址	高杯	脚部上半	尾崎V	4.9	-	普	普	橙7.5YR7/6	ナデ 三方透孔	ナデ	790号土壺として取り上げ	
南駐車場	第6図	19	954	898 97号住居址	鉢	口縁~胴部小片	尾崎IV	(14.8)	-	普	普	橙7.5YR6/8	口縁部刻み目 横線文 別点文 条痕 煤付蓋	ナデ	条痕文系 受口状口縁	
南駐車場	第7図	1	959	101号住居址	壺	底部2/3	-	-	6.2	密	普	にぶい黄橙10YR7/4~ 黄灰2.5Y6/1	ナデ	-	-	
南駐車場	第7図	2	957	101号住居址	S字甕	口縁部1/3	尾崎V-1	(14.8)	-	密	普	浅黄2.5Y7/3	口縁部ナデ 胴部ハケメ	ナデ	S字甕C類	
南駐車場	第7図	3	958	101号住居址	台付甕	脚部	-	-	6.6	普	普	橙7.5YR6/8	ハケメ	ナデ	-	
南駐車場	第7図	4	452	918 102号住居址	器台	杯部1/2 胴部中空形	尾崎IV	12	(19.9)	普	不良	浅黄橙10YR8/4	ハラムミガキ 三方透孔	-	脚部は基部から緩やかに外反	
南駐車場	第7図	5	451	919 102号住居址	器台	脚部	尾崎IV	-	14.4	普	不良	浅黄橙10YR8/4	ハラムミガキ 三方透孔	-	円柱部をもつ 胴部内唇 器壁厚い	
南駐車場	第7図	6	964	928 102号住居址	-	脚部下半1/4	-	-	(13.6)	普	普	明赤褐5YR5/6	ハラムミガキ 透孔	ナデ	-	
南駐車場	第7図	7	963	102号住居址	高杯	脚部上半	尾崎V	6.3	-	密	普	橙7.5Y6/6	ハラムミガキ 三方透孔	ナデ	脚部はハの字状に広がる	
南駐車場	第7図	8	453	923 102号住居址	ハレス壺	口縁~胴部	-	15.6	-	普	普	橙5Y7/6	狭い縦線口縁部に竹管文 ハラムミガキ	ナデ	口縁内面は緩やかに下がる	
南駐車場	第7図	9	454	920 102号住居址	ハレス壺	口縁2/3~頸部	-	19.8	-	普	不良	にぶい黄~橙 5YR7/4~6	口頸部に貼付突起帯二条 縦線口縁部は狭く窪み	-	口縁内面は緩やかに下がる 下半は直線的に屈折(口縁状)	
南駐車場	第7図	10	966	926 102号住居址	壺	口縁1/2 肩部1/6	-	(13.4)	-	普	普	橙7.5Y6/8	肩部より上をハケメ 以下ナデ	口縁部ハケメ 胴部板ナデ	口縁部やや垂下	
南駐車場	第7図	11	961	927 102号住居址	ハレス壺	口縁部1/6	-	(15.4)	-	密	不良	にぶい黄橙10YR7/4	-	-	-	
南駐車場	第7図	12	965	929 102号住居址	壺	底部	-	-	7	密	普	にぶい黄橙10YR7/4	ハケメ後ナデ	ナデ	-	
南駐車場	第7図	13	960	924 102号住居址	甕	胴部下半1/2~底部	-	-	6	密	普	明赤褐2.5YR5/6	ナデ	ナデ	平底	
南駐車場	第7図	14	962	913 102号住居址	台付甕	脚部	-	-	6	密	不良	にぶい黄橙10YR7/4	ハケメ	ナデ	-	
トレンチ	第7図	15	967	905 103号住居址	壺	肩部小片	-	3.3	-	密	普	明黄褐10YR6/6	横線文 羽状縁部刺突文	ナデ	-	
神社	第7図	16	976	411 性格不明遺構5	高杯	口縁部1/4	-	(19)	-	密	不良	浅黄橙10YR8/4~ 黒褐2.5Y3/1	ハラムミガキ ナデ	ナデ	屈折外反?	
南駐車場	第8図	1	998	215号土壺	高杯	杯2/3~胴部上半	尾崎V-1	(8.8)	(11.6)	密	不良	にぶい黄橙10YR7/4	三方透孔	-	フイングラス形	
南駐車場	第8図	2	1002	262号土壺	高杯	脚部2/3	尾崎V	-	(11)	密	普	淡黄2.5Y8/3	ハラムミガキ 四方透孔	ナデ	脚部はハの字状に広がる	
生活体験館	第8図	3	1011	748号土壺	高杯	脚部2/3	尾崎V	5.2	-	密	普	橙7.5Y6/8	ハラムミガキ 三方透孔	ナデ	脚部はハの字状に広がる	
生活体験館	第8図	4	1014	748号土壺	甕	口~胴部小片	-	5.9	-	普	普	橙7.5Y6/6	ナデ	ナデ	二次被熱あり 混入の可能性	

出土地区	実測図	登録資料番号	登録資料番号	遺構名	器種	残存度	時期	法量(cm)		胎度	焼成	色	成形・調整等		備考
								器高	口径				口径	胴径	
生活体験館	第8図	5	1013	748号土壙	広口壺	口縁部小片	-	(11.2)	-	密	普	橙5Y6/6	ナデ	ナデ	-
生活体験館	第8図	6	1012	748号土壙	柳形型壺	口縁部小片	尾崎V-1	(18.8)	-	密	普	橙7.5Y6/6	口縁部羽状突文 頸部ハケメ	羽状突文	二重口縁
生活体験館	第8図	7	1016	748号土壙	S字甕	頸部小片	尾崎V-1	2.8	-	普	普	にみ黄橙10YR6/4	口縁部ナデ 胴部ハケメ	ナデ	S字甕C類
生活体験館	第8図	8	1015	748号土壙	S字甕	頸部1/5	尾崎V-1	2.9	-	普	普	明黄褐10YR6/6	口縁部ナデ 胴部ハケメ	ナデ	S字甕C類
生活体験館	第8図	9	1017	757号土壙	深鉢	口縁部小片	尾崎III	3.3	-	普	普	褐7.5YR4/6	縁位条痕 口縁部羽状突文(一単位)	ナデ	条痕文系
生活体験館	第8図	10	1021	767号土壙	S字甕	口縁部小片	尾崎V-1	3	-	普	普	明黄褐10YR6/6	口縁部ナデ 胴部ハケメ	ナデ	S字甕C類
生活体験館	第8図	11	1022	767号土壙	台付甕	脚部	-	-	-	普	普	橙5YR6/6	ナデ	ナデ	底部中央に穿孔ミニチュア?
南駐車場	第8図	12	1037	804号土壙	S字甕	口縁部小片	尾崎V-1	(15)	-	普	普	明褐7.5YR5/6	口縁部ナデ 胴部ハケメ	ナデ	S字甕C類
生活体験館	第8図	13	1722	Ⅲ-E-26南東	壺	頸部1/4	-	4.1	-	粗	普	橙7.5YR6/6	-	-	頸部に貼付突帯一条
生活体験館	第8図	14	1724	Ⅲ-E-15南半	壺	口縁部1/6	-	(10.8)	-	普	普	明褐7.5YR5/6	ナデ	ナデ	-
生活体験館	第8図	15	1723	Ⅲ-E-15南半	器台	脚部上半	尾崎IV	5.5	-	普	普	黄橙10YR6/4	ナデ透孔(二所以上)	ナデ	-
南駐車場	第8図	16	1719	Ⅱ-F-60-23	器台	脚部上半	尾崎IV	-	-	密	普	明黄褐10YR7/6	ヘラミガキ 三方透孔	ヘラミガキ ナデ	脚部は基部からだちに外反
南駐車場	第8図	17	1715	Ⅱ-E-59-24	小型丸底壺	口縁~頸部次損	尾崎V-2	-	9.3	3.4	普	明黄褐10YR6/6	ナデ	板ナデ	-
南駐車場	第8図	18	1714	Ⅱ-F-50-22	小型丸底壺	口縁~頸部次損	尾崎V-2	-	7.2	4.1	普	にみ黄橙10YR6/4	ナデ	ナデ	胴部中央が左右に張る
南駐車場	第8図	19	1716	Ⅱ-F-69-23/24	器台	脚部上半1/2	尾崎IV	4.9	-	密	不良	淡赤橙2.5YR7/4	ナデ 三方透孔?	ナデ	脚部が基部からだちに外反 52号住居址として取り上げ

()内数値は、推定値。

各遺物の時期区分は、『尾崎遺跡発掘調査報告書』2002 美濃加茂市教育委員会 による。おもむね弥生時代中期:尾崎III期、弥生時代後期~古墳時代前期:尾崎IV期、古墳時代前期:尾崎V期としている。

本稿の遺物の編年観などについては、下記の文献を主に参考としている。

『土器・甕が語る 美濃の独自性—弥生から古墳へ—』1998
第6回考古学フォーラム岐阜大会実行委員会編

『弥生土器の様式と編年 東海編』2002 加納俊介・石黒立人編

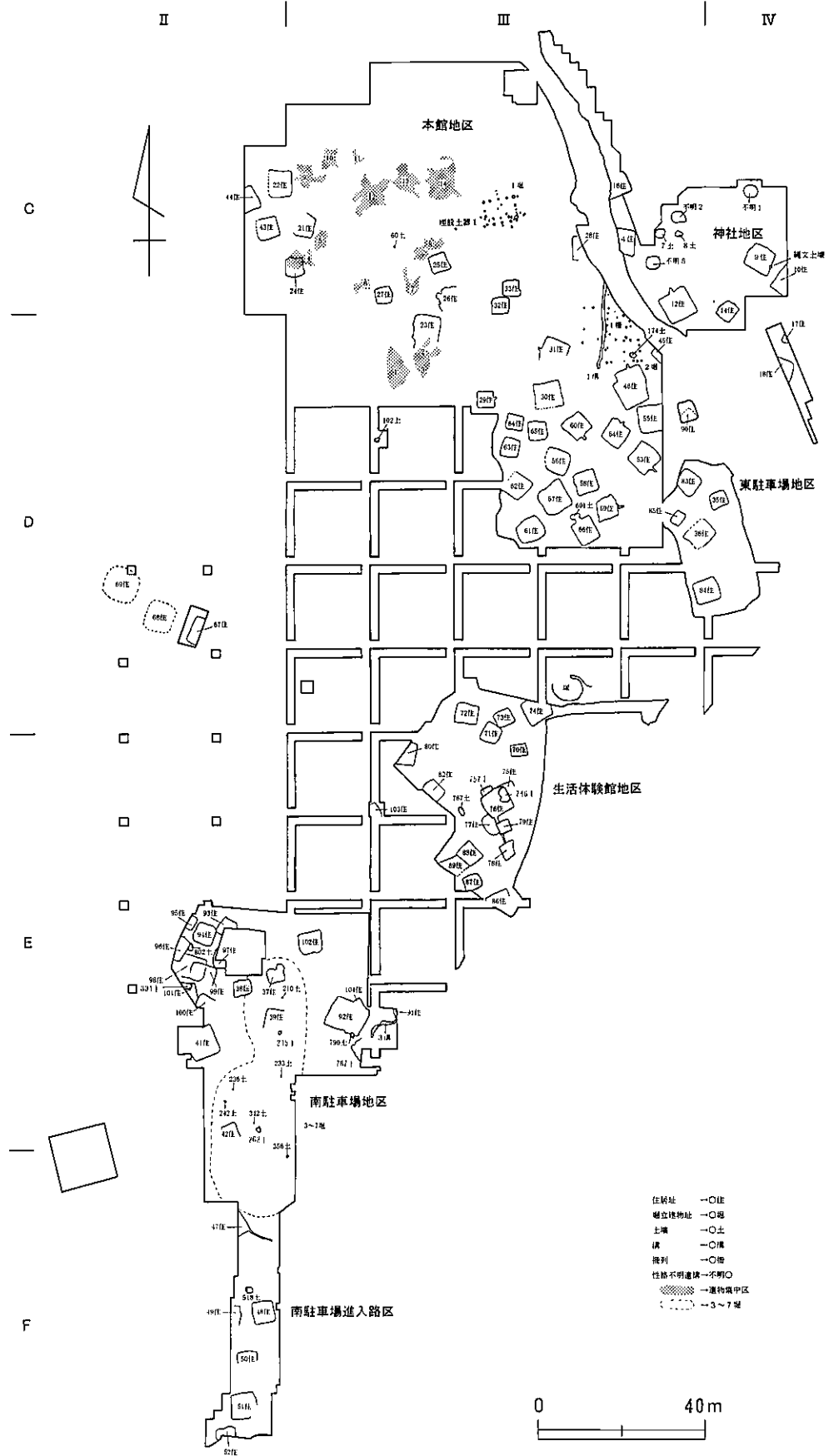
高木宏和「美濃周辺地域における山中式期の実相」
『伊勢湾岸における弥生時代後期を巡る諸問題 山中式の成立と解体』
2004 第11回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会編

恩田知美「美濃地方における弥生時代後期から古墳時代初期の土器様相」
『美濃の考古学 第7号』2004 美濃の考古学刊行会

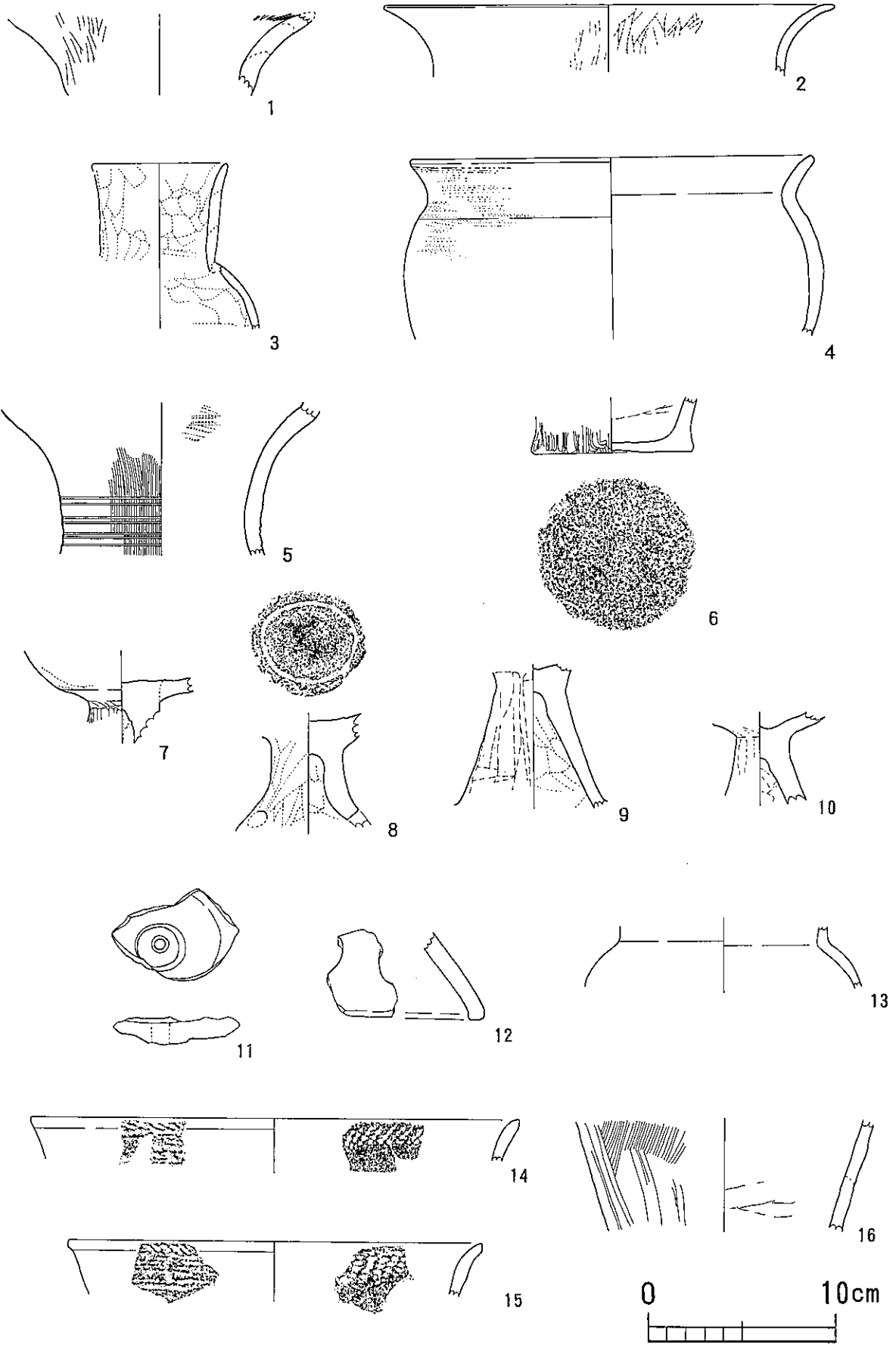
『尾崎遺跡』1993 (財)岐阜県文化財保護センター

『砂行遺跡』2000 財団法人 岐阜県文化財保護センター

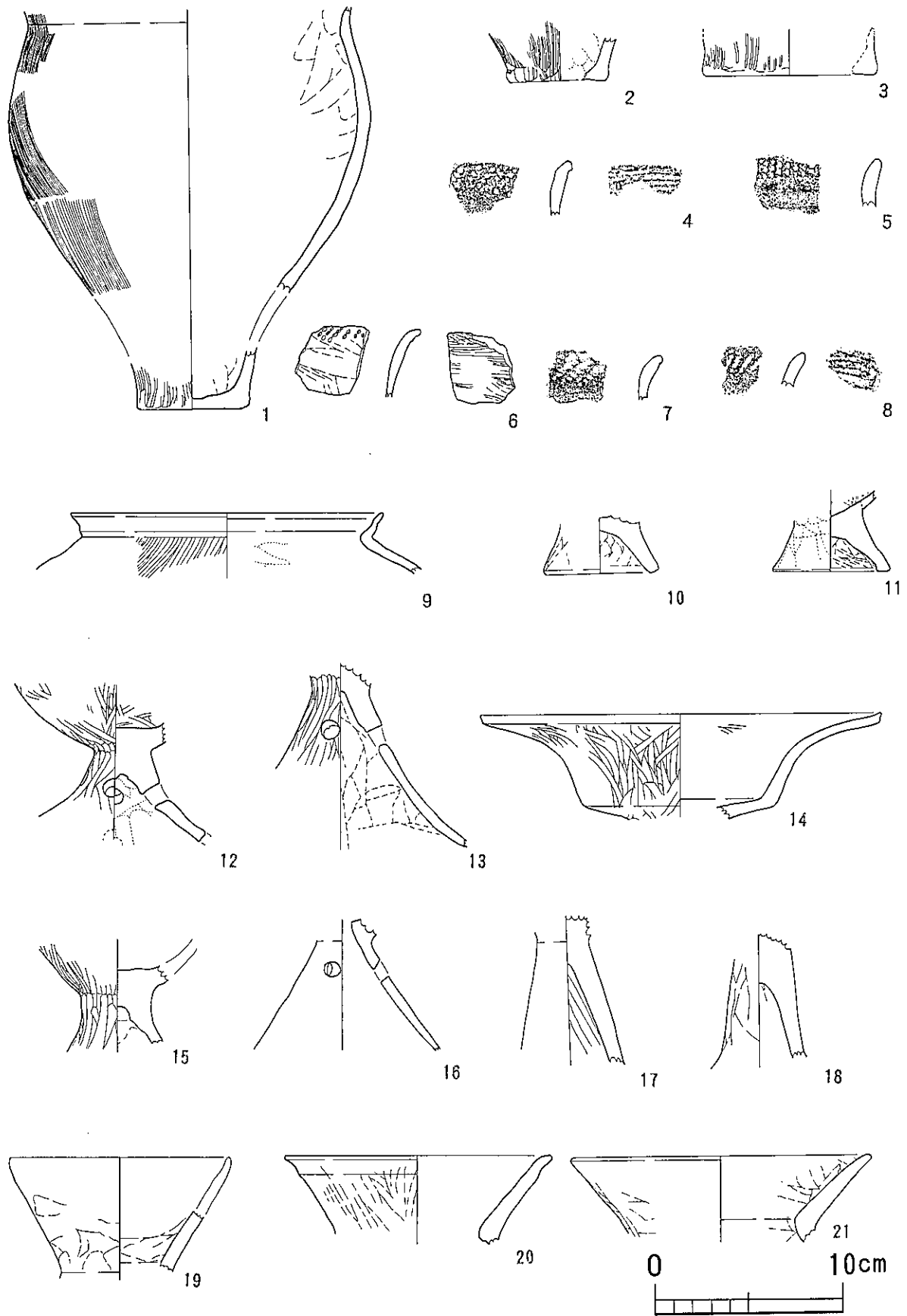
『尾崎遺跡発掘調査報告書』2002 美濃加茂市教育委員会



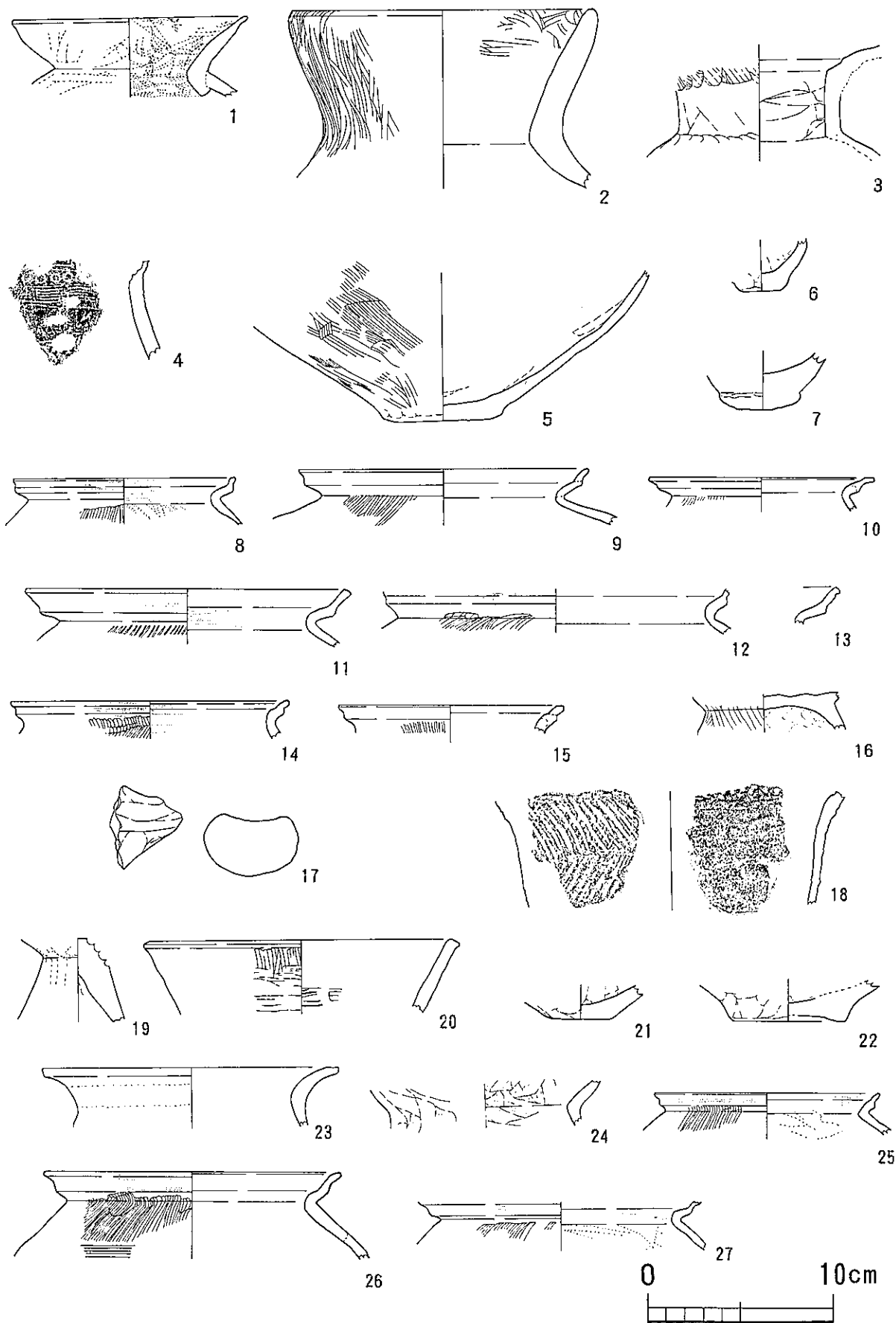
第1図 尾崎遺跡遺構全体図



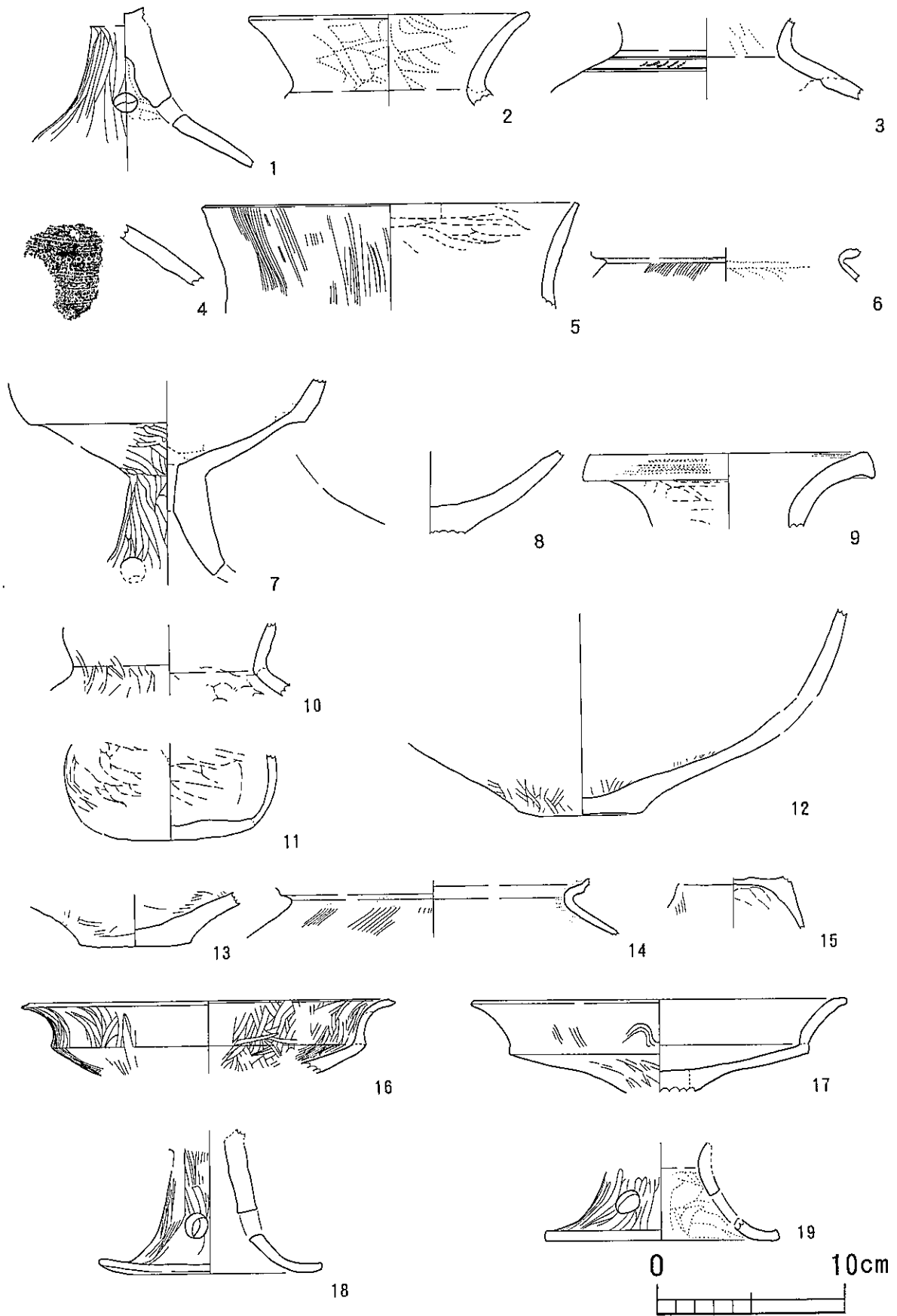
第2图 38号住居址 (1·2) 50号住居址 (3) 70号住居址 (4)
71号住居址 (5·6) 72号住居址 (7~16) 出土遺物



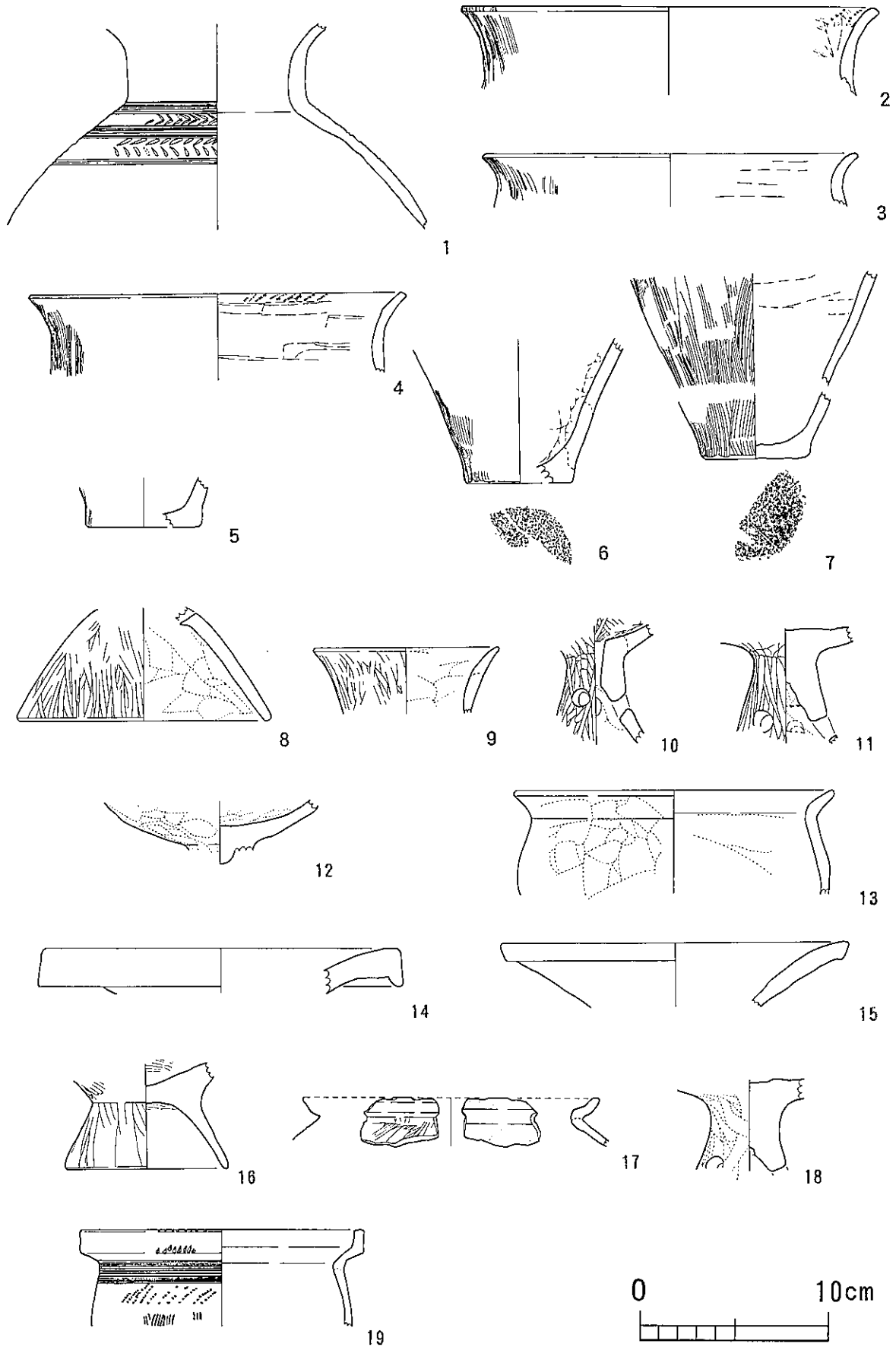
第3图 72号住居址（1~11） 74号住居址（12~21）出土遺物



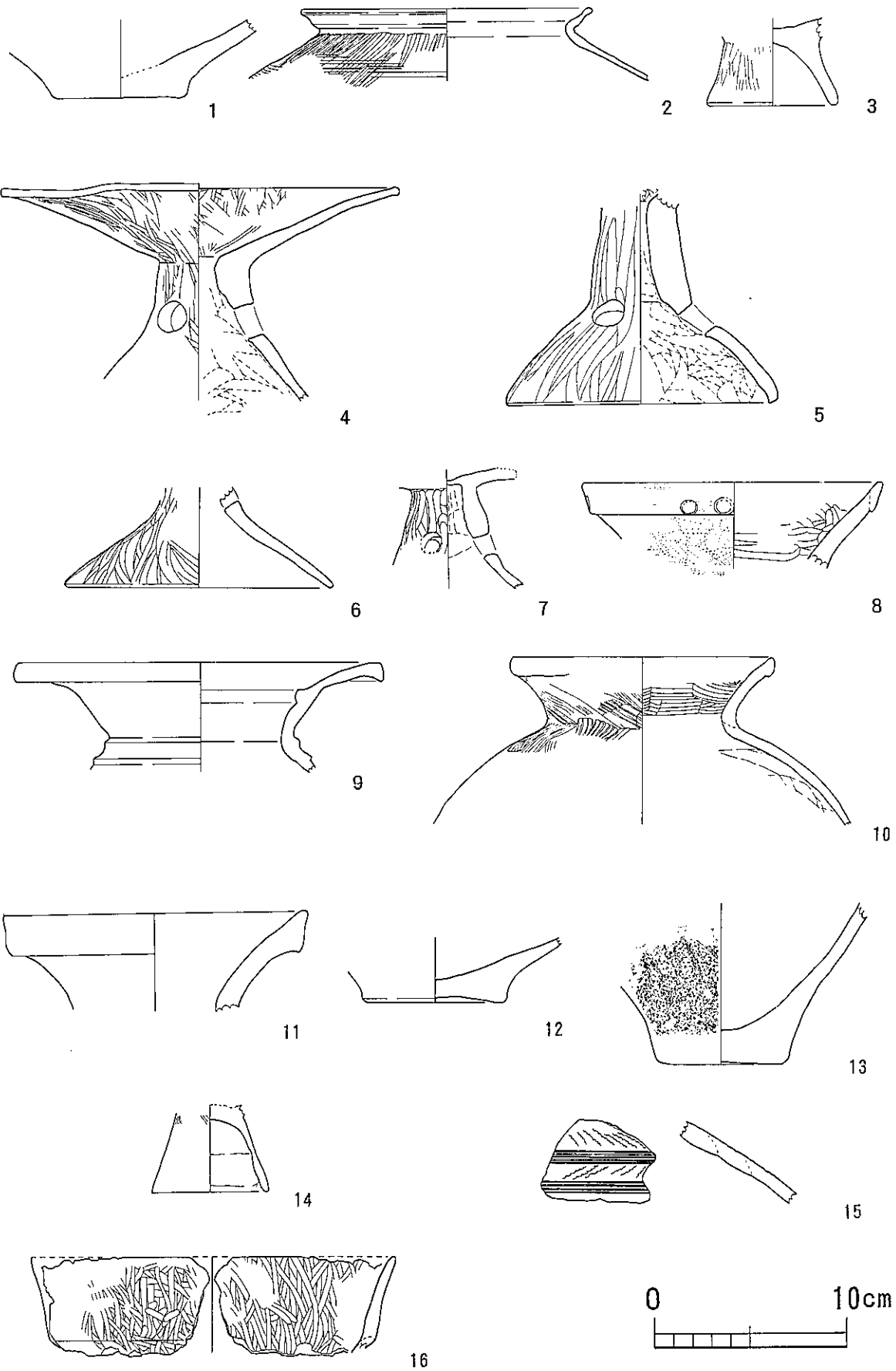
第4図 74号住居址 (1~17) 75号住居址 (18)
76号住居址 (19~27) 出土遺物



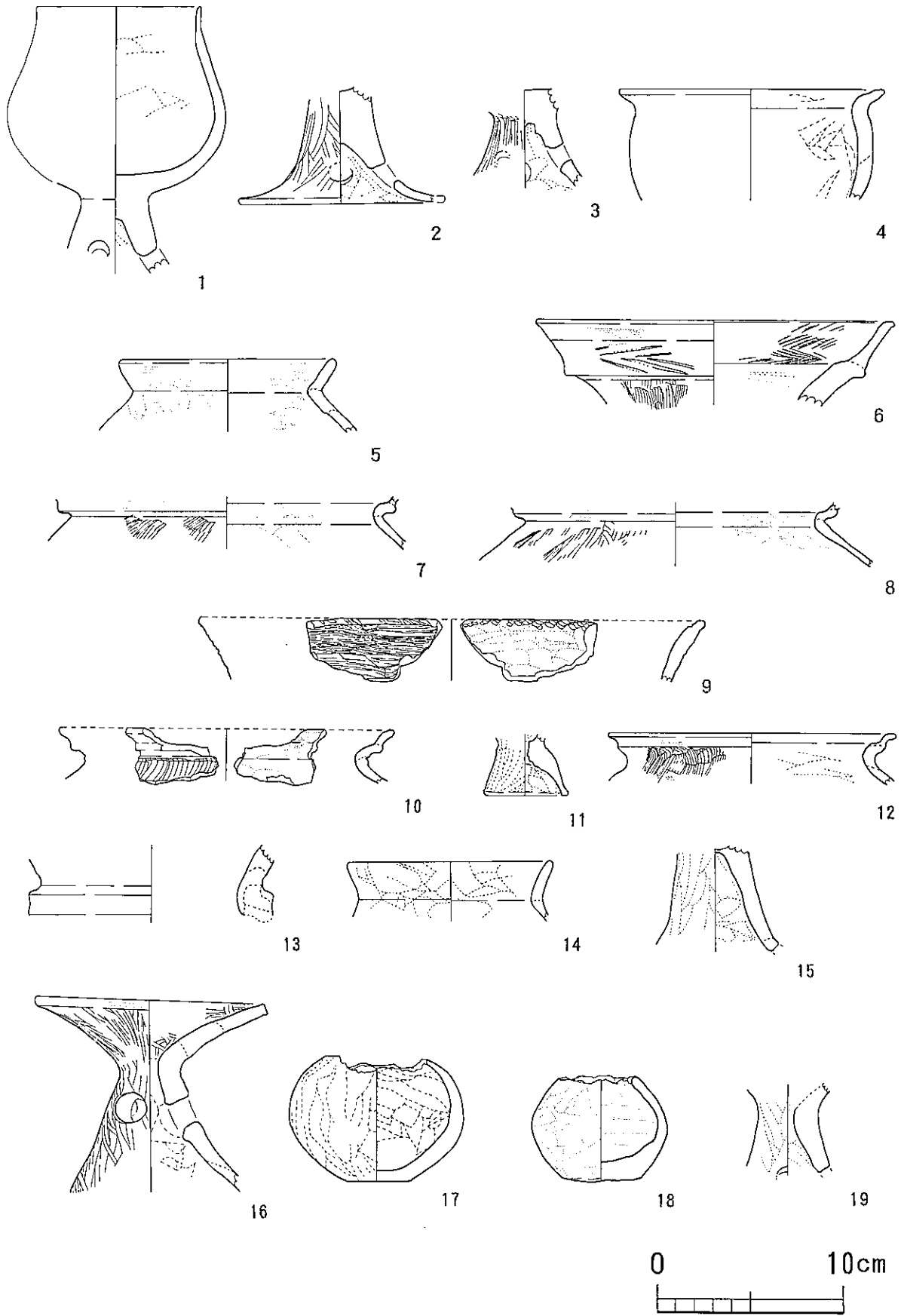
第5图 77号住居址 (1~5) 78号住居址 (6) 79号住居址 (7~15)
80号住居址 (16~19) 出土遺物



第6图 80号住居址 (1~7) 87号住居址 (8·9) 88号住居址 (10·11) 89号住居址 (12)
90号住居址 (13) 92号住居址 (14~18) 97号住居址 (19) 出土遺物



第7図 101号住居址(1~3) 102号住居址(4~14) 103号住居址(15)
 性格不明遺構5(16) 出土遺物



第8图 215号土坑 (1) 262号土坑 (2) 748号土坑 (3~8) 757号土坑 (9)
 767号土坑 (10) 787号土坑 (11) 804号土坑 (12) 包含层 (13~19) 出土遗物

博物館実習生から見た美濃加茂市民ミュージアムの現状と今後

－経緯とねらい－

1. はじめに

美濃加茂市民ミュージアム（以下「市民ミュージアム」とする）は、自然、歴史、民俗、考古、美術の分野からなる地域的な総合博物館として、「自然との共存」「学校教育との連携」「市民参画」「地域づくり」の4点を基本理念に据えた活動を展開している。

さて当館では、開館した2000年以来、毎年夏季に五日間・10名程度の博物館実習を実施してきたが、ここで、今年度行われた博物館実習の概要を述べると共に、後半では、館が求めた実習課題に対する回答として、実習生による報告を行う。

2. 市民ミュージアムにおける博物館実習

博物館において、資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業について専門的事項を司る職員が学芸員であるが、学芸員養成課程をもつ各大学の要請により、実習が行われている。

平成17年度は、8/16（火）～8/20（土）の五日間について、岐阜聖徳学園大学（5名）、東海女子大学（2名）、岐阜大学（1名）、愛知淑徳大学（2名）、愛知学院大学（1名）、名古屋学芸大学（1名）の12名に対して行った。

その際、申請する実習生は、専門分野や研究内容、博物館学における関心等が多岐に渡っているのが通例である。そうした実習生には大変申し訳ないが、当館では事情により、分野等によるグループ毎の対応は行っておらず、期間における一括した合同実習となっている。

そこでは表1のとおり、少ない時間ながらも館の多様な面について、現場、博物館資料であるモノ、そこに携わるスタッフやボランティアをはじめとするヒトの姿に対して可能な限り接することができるようにと、開館以来手探りを

続けた実習計画が進められてきた。

しかしながら、先述したとおり多様な実習生を一括で扱うことは、本来、博物館活動の根幹を成すべき「資料の取扱」等といった、特定分野の専門性を重視した時間を費やすことが、逆に実習生へ不均衡を生んでしまいかねない弊害がある。そのため、博物館の諸活動や館を取り巻く状況の中で、できるだけ実習生全員が共通の課題として取り組むことができるような内容が意識されてきた。

3. 平成17年度のグループ実習課題

近年の博物館に関わる議論の一つに「評価」の問題が挙げられるが、その結果については、館の設置者の行財政改革等による事業の見直し、市民による情報公開の要望等に対応するための資料とされる。

そのような状況の下、館における多角的な調査を進めることで、自館の状態を把握したり、館の方向性や重点分野等について中・長期目標を設定し、それを達成するための計画を策定して活動を展開しようとする動きが出ている。

当館が設置されている美濃加茂市では、事業評価にISO9001：2000年版が導入されており、各部署において重点目標や成果指標、目標数値等が設定され、達成状況等を把握する手段として利用されている。

このような「博物館評価」のうち、特に第三者（実習生）によって行われる評価活動は、館にとって大変有益であり、今後の事業展開を考える上で貴重な資料となる。さらに、館全体を総合的に検討・分析する必要もあるため、実習生に対する共通課題とするにはふさわしいと考えられた。そこで12名にA～Dの4グループに分かれてもらい、“市民ミュージアム評価”を求めることとなったのである。

しかしながら、限られた期間の活動になるた

め、実習生の求めに応じて必要な資料を提供・閲覧できるようにしたり、スタッフやボランティアが質問等に応じることでサポートを行った。そして最終日には、各グループ毎に発表を行い、それぞれが討議を行う形で実習を終了した。

各グループのテーマは、「歴史と自然に関わる博物館経営」(Aグループ)、「生活体験館の活用状況」(Bグループ)、「学校における文化の森活用」(Cグループ)、「文化の森の施設」(Dグループ)であった。

それらは館の設置者でもなく、館自体が行うものでもない、「第三者」による博物館評価として、開館後五年を経た我々(館に携わる全ての

人々)への、一つの投げかけになるものと考えている。

最後になりましたが、本報告をまとめるにあたって、実習終了後にもかかわらず、それぞれの卒業課題等と併行しながら、今回の原稿を作成してくださった、太田久子氏(岐阜聖徳学園大学)、亀谷彰史氏(愛知学院大学)、豊田真由美氏(東海女子大学)に、心よりお礼申し上げます。

(藤村 俊 ふじむら しゅん

美濃加茂市民ミュージアム学芸員)

日程	時限	実習内容	活動場所	形態	備考
8/16 (火)	1	オリエンテーション	研修室	講義	
	2	館内見学	館内、外	見学	
	3	学芸員と博物館の仕事	研修室	講義	
	4	展示と展覧会の進め方	研修室	講義	最終日発表会のための指導含
8/17 (水)	1	博物館とボランティア	生活体験館	講義	生活体験ボランティアとの話
	2	博物館と学校の関わり	研修室	講義	学校活用のあり方
	3・4	屋外彫刻の整備	前平公園	実習	アートボランティアとの協同
8/18 (木)	1・2	収蔵庫の環境と管理	収蔵庫1・2	実習	
	3・4	博物館資料の管理	収蔵庫2	実習	養蚕関連図書資料の整理と台帳作成
8/19 (金)	1・2	博物館資料の取扱いと整理	収蔵庫ほか	実習	歴史資料の取扱
	3	考古資料の整理	別棟収蔵庫	実習	
	4	博物館のもつ情報	情報学習室	講義	デジタルアーカイブ、著作権
8/20 (土)	1・2	民具資料の整理と燻蒸作業	別棟収蔵庫ほか	実習	IPMへの取組み
	3・4	博物館評価資料作成及び発表会、実習レポートの作成	研修室		

表1 市民ミュージアム博物館実習内容(平成17年度)



博物館資料の管理(8/18・3-4限)



博物館とボランティア(8/17・1限)

－生活体験館の活用状況と評価－

1.現状評価

生活体験館では美濃加茂市民ミュージアムのコンセプトである、市民参加を中心に考える、地域に根ざした活動などを基に様々な活動が行われています。私たちのグループは生活体験館の活動がコンセプトと合致し、適切に機能しているかを評価しました。

学芸員の方への聞き取り、イベントに関する市民アンケート、実習を通して私たちが体験したことなどをもとに評価を行いました。「実習生」は、我々三名（太田・豊田・亀谷）が、これらのことを総合的な視点から評価したもので、「学芸員・ボランティア」はどの程度たずさわっているか、という視点からの評価になっています。項目はミュージアムのコンセプト、生活体験館がイベント、講座を中心に活用されていること、運営にはボランティアの存在が欠かせないことなどから4領域にしぼりました。

生活体験館は市民参加という点で概ね機能しているといえます。また地域性という点でも生

活体験館自体がその役割を果たしているといえ、この二つはボランティアの方の力に寄るところが大きいと考えられます。イベント、講座に関してもリピーターの割合やアンケート結果などから成功しているといえます。ただイベントや講座以外の利用者はあまりいないということも現状としてあります。

生活体験館の活用は多くのボランティアの方に支えられています。生活体験館は地域性という点で役割を果たしていると前述しましたが、たしかに生活体験館が美濃加茂地区で盛んであった養蚕をテーマに建てられた施設という点で地域に根ざしているといえます。しかし博物館というのはただそこにあるだけでは機能しないものです。つまりそこには「伝える」という役割を持ったヒトの存在が必要なのです。伝えることができ初めて生きた施設となるのです。

そこで生活体験館が生きた施設であるかについてですが、我々は「大変良い」と評価しました。それは現状では、「伝える」という役割がボランティアや学芸員の方によって果たされていると判断したためです。

表「生活体験館に関する評価」(◎・・・大変良い、○・・・良い、△・・・改善点あり)

	実習生	学芸員・ボランティアの関わり方	市民アンケート
市民参加			
ボランティア参加の条件	◎	◎	—
ボランティアと学芸員の関係	◎	◎	—
地域住民の参加しやすさ	○	◎	—
イベント広報の状況	○	○	◎
地域に根ざした活動			
イベントや講座における地域性	◎	◎	◎
イベントや講座以外の利用者	△	△	—
イベント、講座			
館のコンセプトとの合致	◎	◎	—
リピーターの割合	◎	◎	◎
初めての人の割合	○	○	—
ボランティア			
ボランティアの方の企画参加	◎	◎	—
ボランティアの依存度	△	△	—
ボランティアの方自身の満足度	◎	◎	◎
生きた施設	◎	○	○

2. 生活体験館の将来にむけて

(1) 生活体験館とボランティア

美濃加茂市民ミュージアムには生活体験館があり、特徴のある展示をしています。民俗分野に特化した館で、学芸員によると「生きた展示」を念頭に展示レイアウトがされているそうです。確かに「生きた展示」は実行されていると思いました。生活体験館は養蚕農家の様子を再現した館で、館全体が展示そのものになっており、全てが見学可能になっています。



生活体験館

館全体が見学可能なため、畳の擦り切れや柱の傷などの傷みが見られ、資料保存という観点から見れば必ずしも望ましい展示状態ではありませんが、展示するだけでは得ることのできない「体験」をして帰ってほしいという意図を感じました。また、説明パネルや解説シートの類が一切ありません。その代わりに、美濃加茂市民ミュージアムのボランティアの方々が説明員として来館者の質問に答えたり解説したりしています。説明パネルが置かれていたり、説明シートが用意されているだけの状態よりも来館者が質問した事に対してボランティアの方がダイレクトに答えてくれるので、来館者にとって得るものは大きいと感じました。しかし、このような展示形態はボランティアの方が生活体験館に居てこそ成立するものであって、ボランティアの方が不在がちになる平日はせっかくの資料や施設を活かしきれてない感じを受けました。我々も生活体験館の天井に障子窓があるのを見

て、ボランティアの方に質問して初めて蚕部屋の温湿度調節用の障子であることが分かりました。この障子窓は養蚕農家特有の設備で、養蚕の様子を知ってもらうために本来ならもっとアピールしてもいいものなのではないかと思いました。

またこの障子窓について、歴史に興味のある我々だから疑問に思ったのではないかという思いも若干あったので、一般の来館者はどう思うのか、疑問にすら思わないのではないかと気になりました。生活体験館の理想的な利用法と現実が少し乖離している気がします。ボランティア不在の時の展示を改善すれば、来館者はもっと得るものが大きいと思います。

(2) 生活体験館の展望

次に我々のグループは美濃加茂市民ミュージアム、特に生活体験館についての将来の展望について考えてみました。生活体験館は美濃加茂地区で盛んであった養蚕をテーマにして建てられた施設ですが、その他にも昭和30年代の暮らしを知ってもらおうと学芸員の方とボランティアの方々が企画された講座であったり、この地域の伝統的な食文化を学ぶことのできる教室もあります。これらはボランティアの方々に依存している割合が大変大きく、学芸員の「ボランティアの方々の、講座を開催するにあたってのサポート的スタッフではなく、共に講座を実施するパートナーとして考えています。」という言葉通りの印象を受けました。



ボランティアの方々と受講者

しかし、ボランティアの方々の年齢は70歳代の方が多く、失礼にあたると思います。15年後もボランティアとして頑張ってくれる方は少なくなってしまうことは確実です。そうすると、現在開講している講座も減ることになるでしょうし、何より当時の生活を実際に知っている方がいなくなってしまうという人的損失が生活体験館の存在価値を低下させてしまうのではないかと危惧もあります。



生活体験館での講座の様子

この事については最終日の発表のメインテーマであったので、1日の実習が終了した後に多数の学芸員の方のお話を聞かせていただきました。美濃加茂市民ミュージアムとしても考えてはいるが、具体的な策は出てきていないとの事でした。とりあえずは切迫した問題ではないだけに議論になることも少ないとの事でしたが、我々がテーマとして取り上げた良い機会ということで一緒に議論をしていただきました。議論の中で、解決策の一つとしては、ボランティアの方々の中で若いボランティアの方に伝承していくという方向性は見えました。ただ、実際に生活してきた方と話を聞いただけの方との考え方や捉え方の違いなどの問題があるという課題があることが指摘されました。市民にも人気がある講座が多いので、閉講したくないという館側の思いもあるだけに、討議に参加できた意義は大きいものでした。

3. 終わりに

今回、美濃加茂市民ミュージアムで行われた博物館実習で、私達実習生の視点から博物館の評価をしました。評価をするにあたり、何をテーマにするかという事から評価の基準に至るまで自分達で考え、ひとつのものを作り上げてきました。そのため、実習期間中は、博物館での講義や実習をただ受けるだけではなく、ひとつの目標を持って過ごすことができました。そして、一般の人でもなく、博物館の専門家でもない、ちょうどその中間に位置する私達実習生の目から見た、今までに無い博物館の評価ができたのではないかと考えています。

また、この研究をすることで、今まで知らなかった課題や運営の裏側を知りました。その課題とは、将来に向けての課題ですが、現時点ではどのような方向性を持つのが確定できません。そのために、今すぐにでも行動を起こすのが望ましいのですが、選択肢が多々あるため、第一歩を踏み出せずにいるのが現状です。

今現在、開講されている講座については、ボランティア内部での伝承であったり、記録映像に残すなどの方法により、将来にわたって伝えていく事は可能です。また、生活体験館の説明員としてのボランティアの姿も、ある一定のレベルでの伝承は可能ですし、形態も維持できると思われれます。しかし、来館者のイレギュラーな質問や、当時の生活を営んでいないと解らないような些細なことに答えられない等のことが危惧されます。

この課題は生活体験館を今の形態のまま存続させていくか、時代の変化とともに変化させていかなければならないのかという分岐点としても考えられる課題なので、そこに立ち会えた我々にとっても学芸員という職を考える上で大きな意義のあることでした。

私達は美濃加茂市民ミュージアムで博物館実習を受けさせていただきました。実習を通して学芸員として何が求められるのか、どんな目を持って博物館の将来を見ていかななくてはならな

いかを学ばせていただきました。実習中には美濃加茂市民ミュージアムの館長様をはじめとする職員の方々、ボランティアの方々には忙しい中、我々のために時間を割いていただきありがとうございました。貴重なお話や実務等を見せていただき、また実習体験させてもらい博物館研究の実態を垣間見ることができました。普通では見ることの出来ない博物館の様子を知ることができました。博物館経営に関しても実際の博物館の経営を知ることにより大学で学んだ知識がより鮮明にイメージとして捉えられるようになりました。

大学においては博物館学芸員課程の諸先生に博物館に関する初歩的な事柄から資料取り扱いや保存管理について学ばせていただきました。ありがとうございました。また、収蔵庫に入る際のマナーであるとか博物館での礼儀についても教えていただきましたので、博物館実習の時に戸惑うことも少なく、実のある実習を行なうことができたと思います。

(太田久子 おおたひさこ 岐阜聖徳学園大学・豊田真由美 とよだまゆみ 東海女子大学・亀谷彰史 かめがいがきふみ 愛知学院大学)

<出典>

【「のんびりすずしくまゆの家の夏体験」報告書】

平成17年8月12日

【「季節を染める講座」について】平成17年7月30日

【「まゆから糸をとる 蚕とまゆ展関連講座」報告書】

平成17年7月9日

番号	宿場	旧国名	高札場の位置	取扱者	分間延絵図でみられる宿内の町場	町場	備考
42	妻籠宿	信濃国	宿東入口	尾州	下町、仲町、上町	○	宿の横を流れる藍川は上流が上町方面にある。
43	馬籠宿	信濃国	宿東入口	尾州	上町、仲町、下町	×	
44	落合宿	美濃国	宿東入口	尾州	上町、仲町、下町	×	
45	中津川宿	美濃国	宿東入口字茶屋坂	尾州	淀川町、新町、字四ツ目川、本町、横町、下町	×	
46	大井宿	美濃国	宿東入口	尾州	上宿、横町、本町、立町、茶屋町	—	
47	大湫宿	美濃国	西町観音堂前	尾州	東町、西町	—	
48	細久手宿	美濃国	宿東入口	尾州	上町、下町	×	
49	御嵩宿	美濃国	宿中	尾州	上町、字谷山川、仲町、下町	×	
50	伏見宿	美濃国	宿東入口	尾州	字比元(衣)村境、字宿東、東町、仲町、西町	—	
51	太田宿	美濃国	宿内下町	尾州	上町、仲町、下町	×	新町は記載なし。
52	鶯沼宿	美濃国	東町入口北側	尾州	東町、字金山川、字大安寺川、西町	—	
53	加納宿	美濃国	宿内字七軒町左側	尾州	八幡町、荒町、字柳原、柳町、新町、南広江町、七軒町、本町一丁目、本町二丁目、本町三丁目、本町四丁目、本町五丁目、本町六丁目、本町七丁目、本町八丁目、本町九丁目	×	
54	河渡宿	美濃国	沓里塚前	御代官役所	東町、仲町、字石橋	—	
55	美江寺宿	美濃国	字東大門前	御代官役所	七軒町、字東入口、仲町、字宿中、下町、字南出口	×	
56	赤坂宿	美濃国	字東町	領主	東町、子安町、羽根町	—	
57	垂井宿	美濃国	宿中程西側	御預所	東町、仲町、西町	—	
58	関ヶ原宿	美濃国	宿入口	地頭	東町、公門町、仲町、西町	—	
59	今須宿	美濃国	宿中程	御預所	字西ヶ谷、字中狭川橋、仲町、西町	—	
60	柏原宿	近江国	字市場町	領主	東町、宿村町、市場町、今川町、西町	—	
61	醒井宿	近江国	字大橋脇	領主	新町、字六反田、仲町、字大橋、子醒井町	—	
62	番場宿	近江国	字中町	領主	下町、仲町、字井溝、上町	○	
63	鳥居本宿	近江国	宿内問屋場前	領主役場		—	町名無
64	高宮宿	近江国	宿内問屋場脇	領主	字高橋、字鳥居川、字新町川	—	
65	愛知川宿	近江国	宿中程	領主役場	北町、南町	—	
66	武佐宿	近江国	右側宿出口	領主	地下町、字地下、仲町、西町、字大路川、長光寺町	○	
67	守山宿	近江国	宿中程	領主役場	宗門口、字三ツ、本町	—	
68	草津宿	近江国	宿内追分	領主	東横町、西横町、一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、字山王川、五丁目、六丁目、字志津川、宮町、字聖異川、北ノ町、新町、南田町、字田町、松原町、稲荷町	×	
69	大津宿	近江国	上京町	御代官	平野町、字常川、字筋違、境川町、鍛冶屋町、葭原町、後在家町、下小唐崎町、中京町、上京町、下西八丁、上西八丁、中下関町、清水町、上関寺町、下片原町	—	

凡例

- * 「高札場の位置」は『近世交通史料集4・5』による高札場の位置を示した。
- * 「取扱者」は『近世交通史料集4・5』による取扱者を示した。
- * 「町名」は『東海道・中山道分間延絵図』でみられる町名・字名を記した。江戸を起点として京都方面の順に列記した。
- * 『東海道・中山道分間延絵図』において、町場が京都方面に向って上町、上宿、一丁目がある場合は○、違う場合は×、町名が違う場合や不明な場合は—とした。

『近世交通資料集 4・5』『東海道・中山道分間延絵図』でみられる宿の様子

番号	宿場	旧国名	高札場の位置	取扱者	分間延絵図でみられる宿内の町場	町場	備考
1	板橋宿	武蔵国	宿内板橋	御代官	字平尾下町、中宿、上宿	○	
2	蕨宿	武蔵国	字中町右側	御代官	中町、字水深、法花田町	—	
3	浦和宿	武蔵国	宿内字中町問屋場本陣脇	御代官	下町、中町、上町	○	
4	大宮宿	武蔵国	宿内字中町	御代官	吉敷町、新宿下町、新宿中町、大門町	○	
5	上尾宿	武蔵国	宿内字中宿	御代官	字中ノ橋、字上ノ橋	—	町名無
6	桶川宿	武蔵国	宿中程	御代官	字下ノ橋、下町、字安左衛門脇、下中町友七前、字伝六脇	○	
7	鴻巣宿	武蔵国	宿内字中宿	御代官	下宿、三九郎前、中宿、上宿、間慶堂前、嘉兵衛前	○	
8	熊谷宿	武蔵国	字上町往還中	領主	新宿、中町、上町	○	
9	深谷宿	武蔵国	字下町	御代官	稲荷町、字行人橋、下町、仲町、横町、立町、新田町	○	
10	本庄宿	武蔵国	字本町	御代官	台町、字久保、本町、中町、上町、新田町	○	
11	新町宿	上野国	笛木新町・落合新町両境	御代官	笛木新町、落合新町、字温井川	—	
12	倉賀野宿	上野国	字上町	領主	下町、仲町、上町	○	
13	高崎宿	上野国	字本町	領主	新喜町、南町、新田町、新町、伝馬町、連雀町、田町伝馬町、九蔵町、伝馬町本町、赤坂町	—	
14	板鼻宿	上野国	字三丁目	御代官	字間慶堂、十丁目、九丁目、八丁目、七丁目、六丁目、五丁目、四丁目、三丁目、二丁目、一丁目、新町	○	
15	安中宿	上野国	宿中程	領主	字茶屋町、字新町	○	
16	松井田宿	上野国	宿入口字上町木戸際	領主	下町、仲町、字北横町、字南横町、字紺屋町、上町	○	
17	坂本宿	上野国	上町端シ北之方	領主	下町、仲町、上町	○	
18	軽井沢宿	信濃国	宿中	御代官	上宿、中宿、下宿	×	
19	沓掛宿	信濃国	問屋場前	御代官役所	上宿、仲宿	×	
20	追分宿	信濃国	宿中	御代官	字東村、字神田坂、仲町、字柳橋、字西村、字西ノ橋	—	
21	小田井宿	信濃国	字中町	領主	上町、字金之午中町、下町	×	
22	岩村田宿	信濃国	宿中程	領主	字住吉、新町、仲宿、下宿、字鍵ノ手、字薦橋	×	
23	塩名田宿	信濃国	宿中程	領主	下宿、中宿、河原宿	○	
24	八幡宿	信濃国	宿中程	領主	下宿、中宿、上宿	○	
25	望月宿	信濃国	本陣前	領主	上宿、字新町、本町、中宿、下宿	×	
26	芦田宿	信濃国	中宿問屋場前	領主	字下宿、中宿、上宿	○	
27	長久保宿	信濃国	問屋場・本陣之間	御代官役所	下町、仲町、横町	○	
28	和田宿	信濃国	宿入口	御代官役所	下町、上町	○	
29	下諏訪宿	信濃国	加宿友之町境	領主	湯田町、横町、字中川橋、木ノ下町、立町、八幡町、友之町	—	
30	塩尻宿	信濃国	宿内問屋場前	御代官役所	新町、字十王堂前、上町、仲町、下町	×	
31	洗馬宿	信濃国	宿入口東之方	御代官役所	下町、仲町、上町	○	
32	本山宿	信濃国	宿入口南之方	御代官役所	下町、字北入口、仲町、上町	○	
33	贄川宿	信濃国	宿西側町中	尾州	下町、仲町、上町	○	高札には「成瀬華人正、竹腰兵部少輔」の名前がみえる
34	奈良井宿	信濃国	宿西入口右側	尾州	下町、字横水、仲町、上町、字鍵ノ手	○	
35	敷原宿	信濃国	宿端南之方	尾州	荒町、字口神、上町、字クツ沢、中町、字上横水、仲ノ町、字下横水、下町、字下出口	×	
36	宮ノ越宿	信濃国	宿南入口	尾州	上町、仲町、下町	×	
37	福島宿	信濃国	宿入口西之方	尾州	上町、仲町、下町、横宿町、上之段町、字八沢川、八沢町	×	
38	上松宿	信濃国	宿端東之入口	尾州	上町、本町、仲町、下町	×	
39	須原宿	信濃国	宿東之方入口	尾州	上町、本町、仲町、下町、茶屋町、門前町	×	
40	野尻宿	信濃国	宿入口	尾州	上町、仲町、下町、字井沢、荒田町	×	
41	三留野宿	信濃国	宿東之方宿端	尾州	新町、仲町、下町	×	

番号	種別	名称	ふりがな	天明	弘化	延絵図	明治	現在	徇行記	大概帳	備考
59	公共物	船御高札	ふねごこうさつ	○	×	○	×	×	○	○	分間延絵図、天明村絵図では上町に記載あり。
60	公共物	鳩小屋	はとごや	×	×	○	×	×	×	×	分間延絵図では下町に記載あり。
61	公共物	石橋	いしばし	×	×	○	×	×	×	○	分間延絵図では下町に記載あり。
62	公共物	板橋	いたばし	×	×	×	×	×	×	○	大概帳では2箇所とある。沖ノ橋・若宮橋のことか。
63	公共物	沖ノ橋	おきのはし	○	×	×	○	×	×	×	大概帳の板橋の一つか。
64	公共物	土橋	どばし	×	×	×	×	×	○	○	
65	公共物	若宮橋	わかみやばし	○	×	×	○	○	×	×	大概帳の板橋の一つか。
66	公共物	用水	ようすい	×	○	×	×	×	×	×	防火用水
67	社寺	神木	かみのき	×	○	×	×	△	×	×	若宮八幡宮の境内にある「神ノ木大明神之碑(文化11年(1814))」が移転。かつては市役所の国道41号を挟んだ南側の喫茶店前付近にあった。
68	社寺	加茂社人	かもしゃじん	○	×	×	×	×	×	×	徇行記「祠官和田氏」のことか。
69	社寺	加茂明神	かもみょうじん	○	×	×	○	○	○	×	県主神社
70	社寺	観音堂	かんのんどう	○	×	×	×	○	○	×	祐泉寺境内・滝場観音堂
71	社寺	観音堂	かんのんどう	○	○	×	○	○	×	×	井ノ上の集落にある。
72	社寺	観音堂(新町)	かんのんどう	×	×	○	×	×	×	×	分間延絵図に記載。
73	社寺	庚申堂	こうしんどう	×	○	○	△	○	×	×	
74	社寺	虚空蔵堂	こくうぞうどう	○	×	○	○	○	×	×	
75	社寺	子守社(小宮)	こまもりじんじゃ	○	×	×	○	○	○	×	
76	社寺	西福寺	さいふくじ	○	○	○	△	○	×	○	
77	社寺	祥光寺	しょうこうじ	○	○	×	△	○	○	○	
78	社寺	太寧寺	たいねいじ	○	○	×	○	○	○	○	
79	社寺	大明神祠	だいましょうじんし	×	×	×	×	×	○	×	
80	社寺	太郎宮	たろうのみや	○	×	○	○	○	○	×	
81	社寺	天王	てんのう	×	×	○	×	×	×	×	新町
82	社寺	天王社	てんのうしゃ	○	×	×	○	○	○	×	現在：八坂神社
83	社寺	若宮八幡社	はちまんしゃ	○	○	×	○	○	○	×	
84	社寺	松尾社	まつおしゃ	○	○	×	×	○	×	×	北2
85	社寺	万尺寺	まんしゃくじ	○	○	×	△	○	○	○	
86	社寺	弥勒堂	みろくどう	○	×	×	×	○	×	×	祥光寺・十王堂
87	社寺	弥勒堂(下町)	みろくどう	×	○	×	×	×	×	×	
88	社寺	祐泉寺	ゆうせんじ	○	○	○	△	○	○	○	
89	総称	太田宿町	おおたじゅくまち	○	△	○	△	○	○	○	
90	道路	関道	せきみち	○	○	○	○	○	○	×	
91	道路	中山道	なかせんどう	○	○	○	○	○	○	○	

凡例

- *表題に「天明」「弘化」「延絵図」「明治」「現在」「徇行記」「大概帳」とあるのは、それぞれ「天明期村絵図」「弘化期村絵図」「中山道分間延絵図」「明治期村絵図」「現行地名」「濃州徇行記」「中山道宿村大概帳」である。
- *名称は、できるだけ史料に掲載されているとおり表記した。一部、同じ場所で名称が違うものは統一した。
- *字名は、「天明期村絵図」「弘化期村絵図」「中山道分間延絵図」「明治期村絵図」「濃州徇行記」「中山道宿村大概帳」の史料に掲載してあるものを示した。
- *字名で、上記史料に掲載されていないものは省略した。
- *字「善利目」は、徇行記の中で「中町に附たる」「下町に附たる」と2カ所掲載してあったため、それぞれ掲載した。
- *字名は「濃州徇行記」をもとに、五十音ではなくわかる範囲で地域分けをした。
- *字名で備考に「市史掲載」とあるのは、『美濃加茂市史民俗編』付録「美濃加茂市内各地区小字地図」P7の「太田」の項による。現在では、この地図の字名がない場所もある。
- *表中の記号の「○」は掲載などがあるもの。「×」は掲載などがないもの。「△」は場所を推定可能なものや、移転したもの。「伝承」は伝承地名として残っているもの。
- *この表中の地名などについて、佐光篤氏の協力を得て作成した。

各村絵図・文献にみられる地名・社寺等の掲載一覧

番号	種別	名称	ふりがな	天明	弘化	延絵図	明治	現在	徇行記	大槻	備考
1	字名	上町	かんまち	×	○	×	×	○	○	×	
2	字名	御宿	おやど	×	○	×	×	伝承	○	×	徇行記「上町に附たる」現：桜新町
3	字名	船頭町	せんどうまち	×	×	×	×	×	○	×	徇行記「上町に附たる」
4	字名	中横町	なかよこちょう	×	×	×	×	伝承	○	×	船頭町、中・下横町はかつての船頭屋敷か。横町の名は伝承地名として残る。
5	字名	下横町	しもよこちょう	×	×	×	×	伝承	○	×	
6	字名	曾我	そが	○	○	×	×	○	○	×	徇行記「上町に附たる」
7	字名	中町	なかまち	×	○	×	×	○	○	×	
8	字名	今竹	いまたけ	○	○	×	×	○	○	×	徇行記「中町に附たる」
9	字名	曾利目	そりめ	○	○	×	×	○	○	×	徇行記「中町に附たる」
10	字名	下町	しもまち	×	○	×	×	○	○	×	
11	字名	コトワ	ことわ	×	×	×	×	×	○	×	徇行記「下町に附たる」光徳か？
12	字名	曾利目	そりめ	×	×	×	×	○	○	×	徇行記「下町に附たる」
13	字名	大門	だいもん	×	×	×	×	伝承	○	×	徇行記「下町に附たる」西福寺の南側
14	字名	平塚	ひらつか	×	×	×	×	○	○	×	徇行記「下町に附たる」
15	字名	新町	しんまち	×	○	×	×	○	×	×	
16	字名	井ノ上	いのうえ	○	○	×	×	○	○	×	徇行記「宿裏枝郷」
17	字名	上地	うえち	×	×	×	×	○	○	×	徇行記「宿裏枝郷」北町1中東
18	字名	新屋敷	しんやしき	○	○	×	×	○	○	×	徇行記「宿裏枝郷」北町2
19	字名	新市	しんはば	○	×	×	×	×	○	×	徇行記「『陽新市』中町へ付く』国道248号線の陸橋上の集落。
20	字名	波ノ上(土房)	なみのうえ	○	○	×	×	伝承	○	×	徇行記「宿裏枝郷」波の上は大堀の総称。
21	字名	西市	にしはば	×	○	×	×	伝承	×	×	西町全体を指す
22	字名	巾	はば	×	×	×	×	○	○	×	徇行記「宿裏枝郷」
23	字名	東方	ひがしかた	×	×	×	×	×	○	×	徇行記「宿裏枝郷」
24	字名	東巾	ひがしはば	×	○	×	×	伝承	×	×	
25	字名	万場(口奥)	まんば	○	○	×	×	伝承	○	×	徇行記「宿裏枝郷」古見殿の場所。
26	字名	井口	いぐち	×	×	×	×	○	○	×	
27	字名	上地浦	うえちうら	×	×	×	×	×	○	×	
28	字名	大縄手	おおなわて	×	×	×	×	○	○	×	
29	字名	欠ノ下	がけのした	×	×	×	×	×	○	×	
30	字名	北カブト	きたかぶと	×	×	×	×	×	○	×	矢田池の下付近。
31	字名	サケソ	さけそ	×	×	×	×	×	○	×	サギス(鷺巢のことか)
32	字名	新堤池	しんづつみいけ	×	×	×	×	×	○	×	
33	字名	新田	しんでん	×	○	×	×	○	×	×	
34	字名	竹腰	たけこし	×	×	×	×	○	○	×	
35	字名	田中	たなか	×	×	×	×	○	○	×	
36	字名	竹院の居処	ちくいんのいきよ	×	×	×	×	×	○	×	徇行記「九戸ほど」の部落。
37	字名	茶屋浦(後)	ちやうら	×	×	×	×	○	○	×	
38	字名	天王後	てんのうあと	×	×	×	×	○	○	×	
39	字名	トドメキ	とどめき	×	×	×	×	○	○	×	
40	字名	ハセコ	はせこ	×	×	×	×	○	○	×	
41	字名	巾前	はばまえ	×	×	×	×	○	○	×	
42	字名	矢田	やた	×	×	×	×	○	○	×	
43	字名	若宮後	わかみやうしろ	×	×	×	×	○	○	×	
44	池	大縄手池	おおなわていけ	○	×	×	×	×	×	×	一の井(ゆ)を指すか？現在は不明。
45	池	加賀ノ池	かがのいけ	○	×	×	○	○	○	×	
46	池	太郎洞池	たろうぼらいけ	○	×	×	○	○	○	×	
47	池	御手洗池	みたらいいけ	○	×	×	○	○	○	×	
48	池	矢田池	やたいけ	○	×	×	○	○	○	×	
49	河川	木曾川	きそがわ	○	×	○	○	○	○	×	
50	河川	加茂川	かものがわ	○	×	○	○	○	○	○	若宮橋から東の河川の形態は、昭和30年代に行われた河川改修以前の形態を示しており、当時の河川の状況を知ることができる。
51	河川	鶴飼道川	うかいどうがわ	×	×	×	○	○	○	×	徇行記「下古井の方より出る万場の北の溝也」
52	公共物	代官所	だいかんしょ	×	×	○	×	×	○	×	徇行記「天明二年寅四月濃州郡奉行井田忠右衛門、太田御代官被 仰付」
53	公共物	御番所	おんばんしょ	○	○	×	×	×	○	×	徇行記「太田御番所錦織奉行支配」
54	公共物	本陣	ほんじん	×	△	○	△	×	○	○	市指定有形文化財「旧太田宿本陣門」
55	公共物	脇本陣	わきほんじん	×	△	○	△	○	○	○	重文「旧太田脇本陣林家住宅」
56	公共物	問屋場	といやば	×	×	○	×	△	×	○	現在磯谷家のみが現存する。他2家はない。
57	公共物	郷蔵	ごうぐら	○	○	×	×	△	×	○	字名として「蔵ノ内」が残っている。
58	公共物	高札	こうさつ	○	○	○	×	×	○	○	天明朝・分間絵図(寛政期)と弘化期では位置が移動している。

美濃国加茂郡太田村が掲載されている主な史料

分類	番号	名称	年代	所蔵先	備考
○街道や支配地域全体を示したものの	1	中山道分間延絵図	寛政年間	東京国立博物館蔵	重要文化財
	2	木曾路・中山道・東海道絵図		国立国会図書館蔵	『江戸時代図誌第11巻中山道(二)』昭和51年、赤井達郎著 筑摩書房 図版190所収。絵巻。太田宿の折れ曲がった道の様子が正確に描かれている。
	3	木曾川川並絵図	享保年間	徳川林政史研究所蔵	『岐阜県史史料編6』昭和44年 岐阜県付録所収
	4	木曾川川並絵図	江戸時代後期写	犬山市教育委員会蔵	『中山道太田宿』5頁所収 平成17年 美濃加茂市民ミュージアム
	5	木曾川通絵図		徳川黎明会蔵	『江戸時代図誌第11巻中山道(二)』図版195所収
	6	(尾張藩) 美濃国太田支配絵図	江戸時代後期	名古屋市博物館	『村絵図と日本図』図2 平成12年 美濃加茂市民ミュージアム
○国・郡絵図	7	正保国絵図	正保元年(1644)		『美濃加茂市史通史編』497頁
	8	元禄国絵図	元禄10年(1697)		『美濃国加茂郡誌』口絵 大正10年 岐阜県加茂郡役所
	9	宝暦国絵図			『美濃国加茂郡誌』口絵 大正10年 岐阜県加茂郡役所
	10	天保国絵図	天保5年(1834)	美濃加茂市教育委員会蔵	
	11	国郡全図	天保8年刊(1837)	美濃加茂市教育委員会蔵	青生東谿著 東壁堂
	12	美濃一国絵図	江戸時代	岐阜市歴史博物館蔵	『館藏品図録古地図Ⅰ』平成元年 岐阜市歴史博物館
	13	美濃国村々領主別図	文政5年(1822)	岐阜市歴史博物館蔵	『館藏品図録古地図Ⅰ』平成元年 岐阜市歴史博物館
	14	美濃国郡全図	嘉永7年(1854)6月写	岐阜市歴史博物館蔵	『館藏品図録古地図Ⅰ』平成元年 岐阜市歴史博物館
	15	美濃国郡全図	江戸時代後期写	美濃加茂市教育委員会蔵	元禄11年(1698)の美濃国郷帳の記載あり。郡ごとに色分けしてある。
○村絵図	17	加茂郡太田村絵図	天明2年(1782)	美濃加茂市教育委員会蔵	
	18	加茂郡太田村家並絵図	弘化2年(1845)	中山道ミ二博物館蔵	
	19	加茂郡太田村絵図	明治初期	美濃加茂市教育委員会蔵	
○その他 (道中記・紀行文・史書など)	20	吾妻鏡	鎌倉後期		
	21	信州下向記	天文2年(1533)	醍醐寺三宝院蔵	山城国醍醐寺の巖助僧正が伊那郡文永寺に下ったときの紀行文。
	22	岐蘇路記	正徳3年(1713)	美濃加茂市教育委員会蔵	貝原益軒著
	23	岐蘇路安見絵図	宝暦6年(1756)	美濃加茂市教育委員会蔵	土田村から渡河
	24	東海木曾両道中懐宝図鑑	天明6年(1786)	美濃加茂市教育委員会蔵	
	25	中仙道道中記	幕末	美濃加茂市教育委員会蔵	
	26	五街道中細見記	安政5年(1858)	美濃加茂市教育委員会蔵	
	27	大日本道中細見記	幕末	美濃加茂市教育委員会蔵	

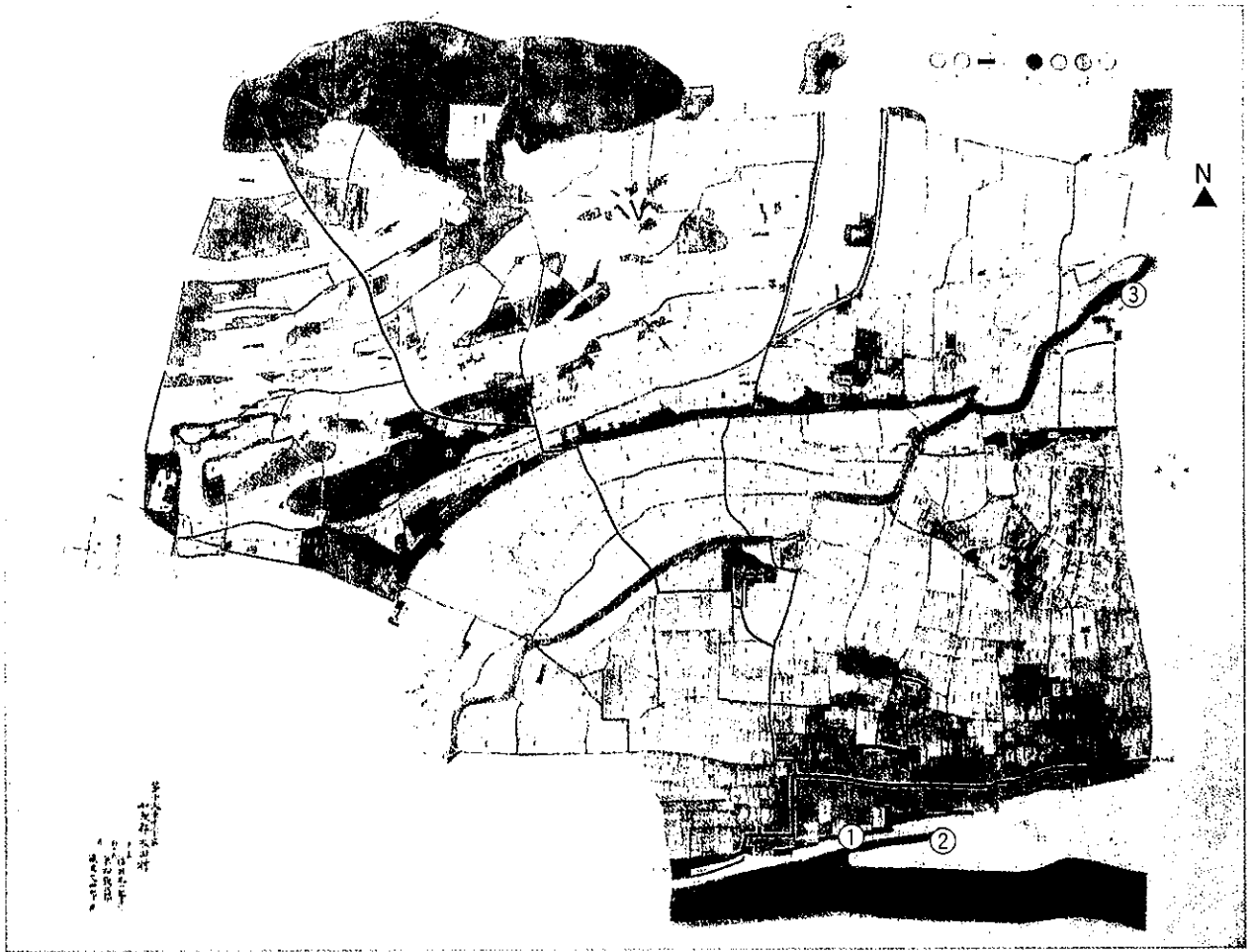


图3 明治初期 加茂郡太田村絵図 h203.0×w260.0

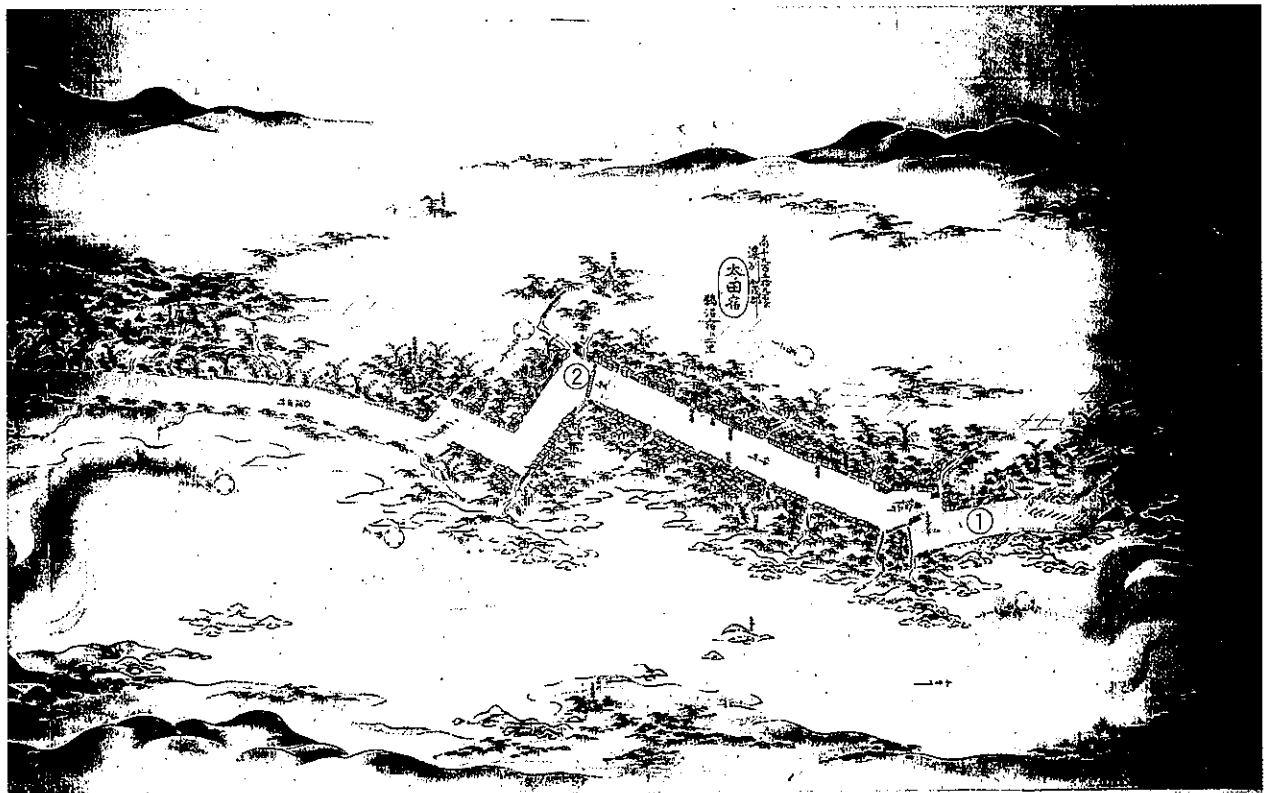


图4 重要文化財「中山道分間延絵図 太田宿」東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives Source:<http://TnmArchives.jp/>

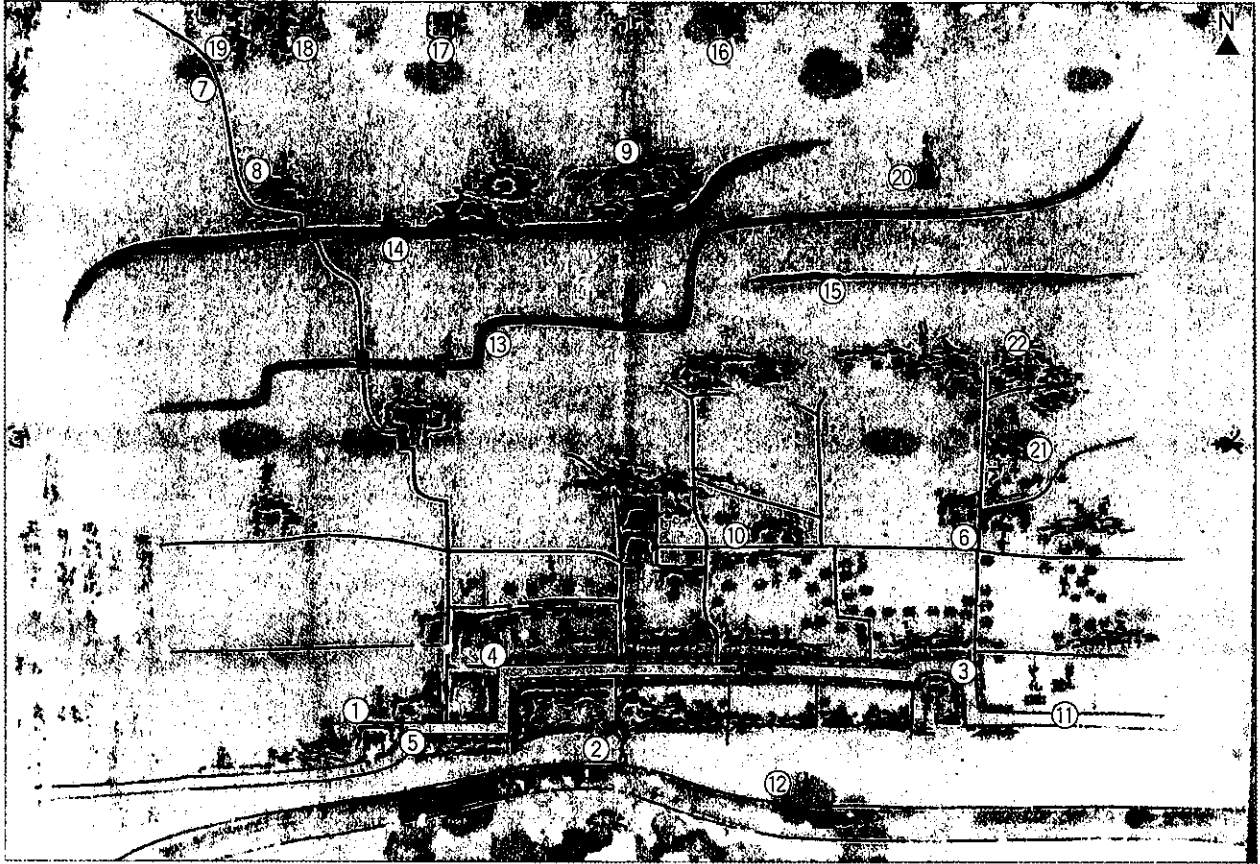


図1 天明2年(1782)加茂郡太田村絵図 h71.0×w101.5



図2 弘化2年(1845)加茂郡太田村家並絵図
h120.0×w81.4
中山道ミニ博物館蔵

七、おわりに

天明期村絵図と他の絵図や文献とを比較しながら太田村の景観復原を行った。この絵図だけでは過去の失われた景観復原は難しいが、現在残されている江戸時代的美濃国加茂郡太田村の面影を引き出すことができたのではない。絵図は、制作された時代を復原するためにも重要な史料の一つであり、失われた景観から過去の人々の生活・文化を知ることができる。今回紹介した天明期村絵図は、既存の史料を関連付けることができ、この地域の成り立ちが確認できたことは意義深いことである。

最後になりましたが、ご寄贈頂いた旧所蔵者、調査・資料提供にご協力頂いた飯田徳則氏、太田三郎氏、岸茂氏、佐光篤氏、龍山大耕氏、林復明氏、林由是氏、平岡一男氏、平松友宏氏、福住春光氏、福田友衛氏、福田幸周氏、可児市教育委員会、可児市史編纂室、カモ地域史研究会、中山道ミニ博物館、美濃加茂市立太田小学校のほか関係者の方々に心よりお礼申し上げます。

(むらせ ひでひこ 美濃加茂市民ミュージアム学芸員)

註

- (1) 高島博『中山道太田宿に生きた人々の系譜』(一九八四年)、三三頁
- (2) 『美濃加茂市史』通史編(美濃加茂市、一九八〇年)、三三三頁
- (3) 『美濃加茂市史』史料編(美濃加茂市、一九七七年)、七〇一頁
- (4) 『濃州巡行記 濃陽誌略』(大衆書房、一九九〇年)、二二八頁
- (5) 註(1) 同書、一六四頁
- (6) 鈴木忠男『宿場町における高札と「札の辻」に関する覚書』(関西大学大学院『千里山文学論集』、一九九九年)、一七九頁
- (7) 註(1) 同書、一五二頁
- (8) (9) 『可児町史』通史編(可児市、一九八〇年)、三三四頁
- (10) 註(3) 同書、四頁

- (11) 註(4) 同書、二二九頁、「段上の田面は元野起の地とみへて土地あしく旱燥の地なり」と説明している。

- (12) 註(4) 同書、二二九頁、「大縄手より井口まで田二町五反五畝一歩、これは加茂川と新堤池の水かかりにて下古井境也」のことか。

- (13) 註(3) 同書、一〇頁

- (14) 『旧中山道太田宿調査報告書Ⅱ(町並)』(美濃加茂市教育委員会、一九九三年)、七頁

- (15) 註(1) 同書、一六一頁

- (16) 註(14) 同書、八頁

- (17) 『重要文化財 旧太田脇本陣林家住宅ほか四棟保存修理工事報告書』附発掘調査報告書(財団法人 文化財建造物保存技術協会、二〇〇五年)、三頁

- (18) 『重要文化財 旧太田脇本陣林家住宅修理工事報告書』(財団法人 文化財建造物保存技術協会、一九八五年)、写真 第二五 古図一 享和四年(一八〇四、第二二六 古図三 文政二年(一八二九)

- (19) 註(2) 同書、一八三頁、古代の元万尺寺については、比定されていない。

- (20) 註(14) 同書、七頁

- (21) 註(14) 同書、一三頁

からは古代瓦が発見されている。他には慶長一五年（一六一〇）の「太田渡船頭屋敷安堵状」により少なくとも中世後期から近世前期にかけて太田に船頭衆の集落が存在していることがわかる。

別表3の宿内の町場の形成として、中山道の京都側と江戸側のどちらかを起点にしているかをみてみると江戸に近い宿場町は京都側に上町・上宿・一丁目などが置かれている。しかし、前記の高札場と同じく、尾張藩の影響があると思われる宿場町では、木曾川もしくは川の上流を起点に町場が形成されている場合が多い。京都に近くなると町名が東西を用いるか、別の名称が多くなる。これは中山道が制定される以前から発達した宿場が多く存在することからだろうか。

太田宿の形態として敷地割りや屋敷が京都の商業地域の形態を示している¹⁵⁾。また、『旧中山道太田宿調査報告書Ⅱ（町並）』では「上・中・下町の計画性と、後発の新町の自然発生的な形成過程によると考えられ、前者の計画性は宿場町建設時に遡るものといえるだろう」というように近世のある時期に宿場の整備計画がなされ、それに沿ったものがつくられたと考えられる。町屋の一例として、近世の面影を残す建物に重要文化財「旧太田脇本陣林家住宅」がある。また、脇本陣隠居家は素木造の格子窓を持つ平屋建つし二階造りで、外観は格子戸を施し、通し土間の片袖、三連数寄屋風のつくりとなっており、京風町屋の構造を持ちあわせている。

太田宿の大きな出来事の一つに宿場内の火災が挙げられる。天明期の福田家文書によると何度も火災について報告されている。その他に享保元年（一七一六）に起こった大火は宿内を悉く焼失させ、祐泉寺の滝場観音堂のところで鎮火したと伝えられている¹⁶⁾。なお、祐泉寺から虚空蔵堂までは中山道の幅員が三間と広く取られている¹⁶⁾。これは参勤交代などの往来ばかりでなく、防火を意識した街づくりであろうか。また、『重要文化財 旧太田脇本陣林家住宅隠居家ほか四棟保存修理事業』の発掘調査では大火があったと思わ

れるほどの焼土、炭化物などは発見されなかった¹⁷⁾。ただし、この調査は極小範囲の発掘のため、これから多くの事例を収集する必要がある。なお、隠居家の建っている場所の下部層に旧宅の痕跡らしい堅い層位が確認された。林家が所有する享和四年（一八〇四）と文政一二年（一八二九）の家相図¹⁸⁾を比較すると現在の隠居家より以前の建築物が描かれており、このころの構造物の痕跡であろう。

これらのことから、太田宿の形成について、近世前期における町場の存在と中山道の位置を考えてみたい。

江戸前期、太田宿が整備される以前はこの祐泉寺から万尺寺¹⁹⁾までの間に核となる町場が存在し、ここを起点として新しい太田宿が成立したのではない。万尺寺を中心として万場（図1-20）という集落があり、その北側には新屋敷（図1-21）という地区がある。これは万場もしくは旧町場に対して新しくできた集落の呼称であろう。太田宿が整備される時、旧町場の一部は上町に引き継がれ、中・下町が新たに付け加えられたのではない。上町は中・下町に比べ、「御宿、船頭町、中・下横町」など宿泊場所や町場を示すような名称が存在する。

この祐泉寺から万尺寺までの町場を起点として、新しい中山道が整備されていったのではない。新しい中山道では区画整理がされ、直線的な脇道もつくられ、京風の町並をつくらうとしたのかもしれない²⁰⁾。では、整備される前の中山道はどうであろうか。これも天明期村絵図に手がかりとなる部分がある。この絵図の街道の東西は共に木曾川沿いをおっている。旧街道はこの東西を結んだところを位置するのではない²¹⁾。明治初期村絵図をみてみると東西に細長い地積が続いている。ただし、これは字巾と同じで河岸段丘を意味するものかもしれない。近世に入り、町場を整備する段階でパイプスの役目をする新しい往還道である中山道と上町・中町・下町を構成する太田宿がつくられたのであろう。

に伏見宿が新設されるとやがて土田宿は衰退し、渡船場は上流へと移動していったのであろう。

天明期村絵図、弘化期村絵図では、渡船場は描かれていない。少なくとも天明期以前から渡船場は太田村にはなく、木曾川上流の下古井村へ移動していたことになる。村外の上流に移動しても渡船は太田村の管理となっていた。なお、渡し場については、別の機会に紹介したい。

○河岸段丘

天明期村絵図には、河岸段丘(図1-14⑭⑮)が二箇所描かれている。弘化期村絵図には、特に描かれていない。二つの絵図では制作目的が違っているので段丘の情報を描く必要性によって区別されたのである。

太田宿がある美濃加茂市南部は、第四期更新世以降の古木曾川、古飛騨川の堆積、浸食によってできた河岸段丘が幾重にも連なる台地である。段丘は細かく分けると七段に分類されている¹⁰⁾。天明期村絵図には、低位段丘の内で段丘崖(丁R高山本線の坂祝駅から美濃太田駅にかけて線路部分)が描かれている。この段丘上に描かれている子守社、天王社(現・八坂神社)は現在も同じ位置に鎮座している。また、加茂川から東に位置する段丘は、JR美濃太田駅北の段丘で、ほぼ丁R高山本線にあたる。天明期村絵図では、村の地形を説明する必要があり、段丘を表現したのであろう。

○耕作地

天明期村絵図、弘化期村絵図とも耕作地の表記はない。両絵図とも郷帳などと合わせて年貢を取り立てるための性格の絵図ではないことがわかる。明治初期村絵図では耕作地の地目が書かれているため、その様子がわかる。

○溜池

天明期村絵図で描かれている太郎洞池(図1-16⑯)、矢田池(図1-17⑰)、御手洗池(図1-18⑱)、加賀池(図1-19⑲)は現存している。しかし、大縄手池は不明である。これらの溜池は水田耕作には必要な溜池であり、段丘上を耕作

する人々にとっては特に重要な施設であった。

太田村の北外れにある加茂川の東側から美濃加茂市西町にかけて広がる段丘の上の地域の通称は巾上と呼ばれている。ここは、水の便が悪く水田として利用するのが難しい土地であった¹¹⁾。このため、第一八代太田宿本陣当主の福田太郎八が幕末に溜池を整備した。文久二年(一八六二)に加賀池、御手洗池を整備し、元治元年(一八六四)から太郎洞池の工事をはじめ、慶応二年(一八六六)に完成させた。また、明治二年(一八六九)には現在の美濃市牧谷から西町へ一八戸の農家を入植させ、この地域の開発に尽力した。明治一三年(一八八〇)には、太郎八の業績と遺徳を偲び、西町の住民らによって太郎八神社が建立されている。

大縄手池(図1-20⑳)は明治初期村絵図に記載されておらず不明である。考えられるのは、加茂川につくられた一の井¹²⁾(図3-3㉓)から灌漑で溜められた場所のことを指すのかもしれない。

○藪

天明期村絵図、弘化期村絵図とも藪や樹木が繁茂する地区は樹木を描いており、耕作地や住居地ではないことを著している。天明期村絵図は、彩色しており、緑が鮮やかに描かれている。弘化期村絵図は、樹木の形が描かれており、また、藪と表記されて、意識して描かれていることがわかる。

六. 景観の復原について

天明期村絵図、弘化期村絵図やその他の文献などから復原できることを考えてみたい。

中山道が成立する前後で太田村として確認できるものは、永正二年(一五〇五)の太田郷賀茂神社の社領から納める年貢米について申し付けた大仙寺(加茂郡八百津町)文書にある枯川庵(祐泉寺の前身)がある¹³⁾。また、万尺寺は寺伝によると正治年間に創建とされ、通称元万尺寺といわれている地域

○船頭屋敷

船頭屋敷が文献に現れるのは慶長一五年（一六一〇）の「太田渡船頭屋敷安堵状」からである。大久保長安が行った石見検地の際、太田の渡しの船頭衆八人に対して屋敷を安堵するというものであった。この安堵状により、これ以前から太田の渡しの船頭が存在していたことがわかる。また、『濃州徇行記』『近世交通史料集5 中山道宿村大概帳』などにもその書状が取り上げられている。

『濃州徇行記』では、船頭町は上町に属しているとされるが、現存していない。また、中横町、下横町も上町に属しているとするが、現在では中横町・下横町という区分はなく、横町とだけ呼ばれている。弘化期村絵図（図2⑦）では区画として整っている。ここは、街道に平行して三連の住居地がある。東西一列ごとに町場が区別され、それぞれに町名が付けられたとすると、ここが『濃州徇行記』による船頭町、中横町、下横町にあたると思われる。ここは、市立太田公民館のあるあたりで、この集落は過去帳から川仕事の関係に従事する人の割合が多い。この地区はかつて市立図書館がつくられたり、昭和五八年（一九八三）の「九・二八災害」にあたりして転居したために、現在は北側の家並がわずかに残るのみである。この場所を天明期村絵図と比較すると船頭衆の屋敷らしい場所はみられないが、集落があることは確認できる。

また、『濃州徇行記』では、「一 船頭八人、居屋敷高三石九斗九升六合、此坪数七百六十八坪」とあり、この坪数は約二五三八・八四㎡となる。この面積は、上記の船頭町、中横町、下横町と考えられる地区を合わせたものにおおよそ匹敵する。

弘化期村絵図の町割区画と『濃州徇行記』の面積からするとこのあたりが、「太田渡船頭屋敷安堵状」にある船頭屋敷と考えられる。船頭屋敷の町場は江戸中期から後期にかけて、船頭町、中横町、下横町へと細分化されていた

のであろう。

○河川

天明期村絵図では木曾川、加茂川が描かれているが、弘化期村絵図では省略されている。さらに、天明期村絵図（図1⑫）では木曾川が鍵の手状に蛇行している様子がわかる。また、祐泉寺下の河川敷が広く取られている点も意識的に表現している。この場所は現在、字名が字木曾川となっている。字木曾川は河川の氾濫によって水害の影響を頻繁に受ける場所である。明治初期村絵図でも、河川の蛇行は同じように描かれおり、祐泉寺下にある馬乗（図3②）と呼ばれる入り江状の場所も描かれている。

天明期村絵図で太田村の中央を流れるのが加茂川で、木曾川の支流である。段丘の上から蛇行しながら流れていることがわかる。注目する点は加茂川（図1⑬）が若宮橋東側上流部分で、クランク状となっている部分である。ここは昭和三〇年代に行われた河川改修で流路が変更され、JR高山本線の架橋下から美濃加茂市中央体育館にかけて直進と右カーブになる現在の地形となった。当時の河川は娯楽施設北側の道や国道四一号線のバイパスとなった。かつて河川があったところには、「エベスサマ（恵比寿様）」という伝承地名や「鵜飼道川」が合流する井（ゆ）（河川から水を取るための堰）があった。地形として消えてしまったが、この絵図では当時の景観をよく描いていることがわかる。

○太田の渡し

太田の渡しは、中山道の三大難所としても知られ、「木曾のかけはし、太田の渡し、碓氷峠がなくばよい」と詠われるほどであった。

渡し場については、不明な点が多い。中山道の開設当時は、太田宿と土田宿は合宿であった。寛永一七年（一六四〇）、岡田将監は土田・太田村に対し、周辺の村々へ助郷を申し付けた。このころは土田と太田の間に渡船場があり、この間を船で結んでいたであろう。その後、元禄七年（一六九四）

天明治終年ころに施工されたようである^⑤。聞き取り調査によるとかつてこの石垣のある榊形はほぼ直角に折れ曲がっており、見通しが悪く、交通の妨げとなる場所であった。このため、昭和初期に石垣の角を取り、道幅を広げた。万尺寺西側の道(図1-⑥)を南へ向かうとこの石垣にぶつかる。中山道とこの道が交差する石垣から東部分は昭和五八年の水害により周辺整備が行われ、平成元年に完成したもので、石積みの違いでわかる。かつて東部分の増築した石垣はなく、万尺寺からの道はほぼ直行し、木曾川へ下りる道(図1-③)があった。

○脇道

脇道は、弘化期村絵図と比べてもほぼ同一である。宿場の北部は一部省略された部分や描かれなかった部分がある。明治初期村絵図では、地番が正確に割り付けられており、両絵図で描かれなかった脇道を確認することができる。さらに、現在の道を重なり合わせれば、近世の道を探ることができる。これにより、中山道以外で近世におけるこの地域の文化圏・経済圏を探るきっかけになる。

天明期村絵図では、関街道(図1-⑦)が特に強調されている。関・美濃方面への人と物の交流が増え、関街道が主要ルートとして発達したのであろう。正徳三年(一七二三)の『岐穂路記』(貝原益軒著)には関の鍛冶、美濃の和紙などの特産品について記されている。ここでは字巾の段丘上に新巾(図1-⑧)という集落が形成されており、新巾は子安観音の東の集落(図1-⑨)に對しての呼称と推測する。

○社寺

別表2 No66、No87のとおり、天明期村絵図に描かれている社寺を中心にその所在を確認した。それぞれの絵図・文献についても比較の対象とした。各種史料の関係から描かれていないものもあるが、天明年間からの社寺の変化は少なく、信仰の対象として現在もまつられていることがわかる。明治初期

村絵図をみると明治初年に政府の神道国教政策に基づいて行われた廃仏毀釈の影響からか、神社の表記はみられるが、寺院は宅地のみが記述されている。

○郷倉

郷倉は、江戸時代に設置された公的な倉庫である。年貢米・囲初などの一時的な保管庫であった。太田村にも一箇所あり、天明期村絵図(図1-⑩)・弘化期村絵図(図2-⑤)にもそれぞれ描かれている。村にとって重要な施設であることがわかる。郷倉があった場所は蔵ノ内という字名が残り、この地区に郷倉があった名残と思われる。明治初期村絵図には、郷蔵と思われる場所は宅地として表記されている。

○高札場

高札場は、その町・村において辻、橋詰、出入口などの人々が集まる場所に立てられた^⑥。太田宿にも高札場があり、その場所が描かれている。太田宿の場合、天明期と寛政期では変化がみられる。天明期村絵図(図1-⑪)では高札場と船高札が宿の東の外れに並んで描かれている。分間延絵図(図4-①)をみると船高札は天明期村絵図と同様の位置にあり、高札場は下町の西福寺前(図4-②)に立てられている。弘化期村絵図(図2-⑥)になると、高札場のみとなる。新町の発展と共に往還道である中山道の位置も変化し、船高札の場所も移転した。寛政期の『濃州徇行記』によれば、「高札六枚、毒薬、親子、火付、切支丹、荷物貫目、駄賃なり、外に船高札一枚あり」と記されている。

これらのことから天明期村絵図の「御高札」は天明期から寛政期の間に上町から下町に移動した。これは、天明二年(一七八二)に尾張藩太田代官所が設置されたことに関係があるのだろうか。『近世交通史料集5 中山道宿村大概帳』において「宿高札」は「墨人之儀ハ尾州より取扱来」とある。また、高札場と船高札場の二箇所は尾州藩の普請だともしている。別表3に示したとおり「尾州」の取扱は賢川宿から鵜沼宿までとなっている。

ある。それぞれの絵図とも近世の太田村の概況を示している。また、寛政期に作成された中山道分間延絵図(図4 以下「分間延絵図」と省略・東京国立博物館蔵)なども参考とした。

天明期村絵図は地形を表現することに重点が置かれ、弘化期村絵図は居住者に重点が置かれている。明治初期村絵図では、地番と区割が記されている。分間延絵図は、中山道の全容と宿や村の概要を伝えている。これらの比較できる資料を基に宿の形成や村の変化を以下のとおり読み解いてみたい。なお、今回使用した資料を基に別表2を作成し、以下の補足とする。

○町並

天明期村絵図は、町並の姿に重点が置かれている。ここから上・中・下町に住居が間断なく続いていることがわかる。弘化期村絵図では、住宅地図のように氏名や職業など居住者について書かれている。天明期村絵図では新町はみられず、弘化期村絵図では新町(図2-1①)が形成されており、町の発展の状況がわかる。また、寛政年間にまとめられた『濃州徇行記』には、「宿内に家百十二戸、宿外に家二百七十七戸あり、宿内の町を上町、中町、下町と云、是は木曾川に沿い東西長六町十四間」とあり、新町については記されていない。また、分間延絵図も同様に新町は描かれていない。このことから新町は寛政期以降から弘化期以前の半世紀の間にできた町であることがいえる。家の戸数であるが、天明期村絵図の中山道沿いに描かれている家数は一〇七軒である。弘化期村絵図では新町を含めない家数が二三二軒ある。なお、道筋の変化については、往還道(中山道)で後述する。

○太田番所

木曾代官山村氏が行った木曾山の管理と運材を尾張藩の直轄地とし、上松・錦織・牧野に材木奉行を派遣して統制した。寛文五年(一六六五)、尾張藩の目付佐藤半太夫が材木役所を見分した覚書には太田番所の手代と足輕

の記述がみられる³⁾。番所の位置は天明期村絵図(図1-2②)、弘化期村絵図(図2-1②)、明治初期村絵図(図3-1①)に記述や地割がみられる。それぞれの絵図によると現在建設が進められている太田宿中山道会館の西詰めがその敷地の一面あたりとなる。

○本陣・脇本陣

天明・弘化期村絵図の両絵図とも本陣・脇本陣の表示はない。弘化期村絵図では、氏名が記載されているので位置関係を確認することができる。明治初期村絵図でも地割から場所を比定することができる。

○往還道(中山道)

江戸時代までは天皇の在京する京都が国の中心として位置づけられていた。このため、中山道太田宿の次の上りの宿は鶴沼宿、下りの宿は伏見宿となる⁴⁾。しかし、国政の中心は江戸幕府であり、人や物資も江戸を中心に動いていた。このため、安藤広重の「木曾街道六十九次」、『岐蘇路案内絵図』、各種道中記などは江戸が起点となり、京都が終点となるものが多い。

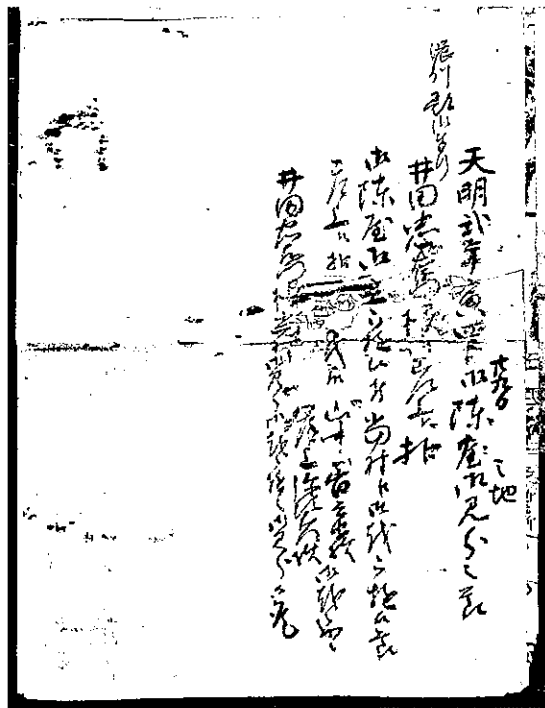
天明期村絵図を東側からみていくと中山道が現在よりも川沿いに位置し、祐泉寺に突きあたってから東側を北上し、祐泉寺(図1-1③)を迂回するよう大きく廻りながら宿場へと入る。中町・下町は現在とはほぼ変わらない状況である。西福寺(図1-1④)の前で直角に折れ南進し、さらに直進してからまた直角に折れ西進する。虚空蔵堂前(図1-1⑤)から木曾川へ河岸段丘を下っていく様子がわかる。虚空蔵堂から西側の中山道は昭和五八年(一九八三)の水害の復興により堤防ができたため、現在は確認することはできない。

太田宿の往還道(中山道)は近世の形態をよくとどめているが、祐泉寺北側(図1-1③)の外周部分は変移がみられる。天明期村絵図で祐泉寺の北側は、弧を描くように丸く描かれている。弘化期村絵図では往還道(中山道)が祐泉寺の北端と本陣側の町並の南端がほぼ直線上で結ぶことができる(図2-1③④)。現在、この北の外周は石垣が積まれている。この石垣は本堂が改築され

用水、池、主要寺社など景観全般を描いたものと、必要な部分だけを描いたものがある。美濃国加茂郡太田村が掲載されている主な絵図などについて別表1に示した。

三、尾張藩の支配について

絵図は、支配者側から領地の情報を収集するために提出させたものが多くある。天明期村絵図の裏面には、次のとおり記されている。



天明期太田村絵図端裏書

天明二年寅四月廿九日御陣屋之地御見分之節

濃州郡御奉行井田忠右衛門様江差上候控

御陣屋御立被遊候付当村江御越被遊候節

差上候控

手代衆

山中善兵衛様

御越被成候御

岸上弥次右衛門様

井田忠右衛門様

当村御見分御越被遊候見分御座候

このことから、この絵図は天明二年（一七八二）に、当時の濃州郡奉行であった井田忠右衛門が尾張藩の御陣屋（太田代官所）の用地を調査したときの控えとしてつくられたことがわかる。この絵図は村控えとして、村役の家に保管されているべき史料である。なお、尾張藩は図1①の加茂社人と書かれているあたりに陣屋を建設し、木曾川一帯を統治した。この場所は、現在の太田小学校校庭付近である。また、初代太田代官は前記の濃州郡奉行であった井田忠右衛門が任命されている。

尾張藩は、天明期になると藩政改革として領内の要所地を一括支配する所付代官を配置した。天明元年（一七八一）、佐屋（愛知県愛西市）・北方（愛知県一宮市）・水野（愛知県瀬戸市）の三箇所の陣屋（代官所）が先行して設置された。天明二年（一七八二）には、鳴海（名古屋市）・小牧（愛知県小牧市）・鵜多須（愛知県愛西市）・太田（岐阜県美濃加茂市）・円城寺（岐阜県羽島郡笠松町）の五箇所に、天明三年（一七八三）には、神守（愛知県津島市）・横須賀（愛知県東海市）・清須（愛知県清須市）・上有知（岐阜県美濃市）に陣屋が設置され、代官が任地へ赴いて直接業務にあたった。円城寺・神守の陣屋はその後まもなく廃止された。なお、天明期以前の尾張藩の支配は、名古屋・熱田・犬山・岐阜の市街地を町奉行が行い、その他の農村を国奉行が行った。国奉行に所属するものとして、蔵入地（藩の直轄地）を支配する代官と給知（藩士の知行地）を支配する郡奉行が置かれた。また、天明期以前の代官・郡奉行は名古屋で政務を行い、手代衆が現地を視察した。

四、天明期村絵図から復原される景観と他の絵図・文献との比較

江戸時代の太田村を描いた絵図には、天明期村絵図の他に中山道ミニ博物館が所蔵する弘化二年（一八四五）加茂郡太田村家並絵図（図2）以下「弘化期村絵図」と省略）がある。また、近世後期の地形をよく残しているものに明治初期の加茂郡太田村絵図（図3）以下「明治初期村絵図」と省略）が

史料紹介

「天明二年(一七八二)加茂郡太田村絵図に関する一考察」

村 瀬 英 彦

はじめに

天明二年(一七八二)に描かれた美濃国加茂郡太田村絵図(図1以下「天明期村絵図」と省略)が平成一七年(二〇〇五)に美濃加茂市へ寄贈された。美濃加茂市太田本町に在住の某家からのものである。江戸中期の太田村の様子を示すもので、この絵図は美濃加茂市にとって大変貴重な財産となった。今回、天明期村絵図から読み解ける当時の太田村の様子を復原しながら述べてみたい。

一. 経緯

某家が所蔵していた天明期村絵図の所在はこれまで不明であった。『中山道太田宿に生きた人々の系譜』で紹介されているが、所在について記載されておらず、また、著者も鬼籍に入り、調査できなかつた。しかし、元美濃加茂市民ミュージアム学芸員林英雄氏の指摘により、美濃加茂市立太田小学校の正面玄関から入った通路にこの絵図と思われる模写があることから調査を進めた。同校に許可を得て、模写した絵図を調査した結果、平成元年(一九八九)につくられたもので、制作者は元太田小学校長の平岡一男氏であることがわかつた。早速、平岡氏に伺つたところ、この村絵図のコピーを所蔵し、その内容を模写したとのことであつた。この絵図のコピーは美濃加茂市史編さん室長をつとめた故神保朔郎から譲られたものであつたが、所蔵者については依然不明のままであつた。その後、平岡氏が所蔵するコピーが美濃加茂市民ミュージアムにもあり、所有者らしいメモが残されていることがわかつた。そこで、地元で文芸活動を行っている福田友衛氏にこのメモを元に調査

を依頼した結果、その所在を確認することができた。

旧蔵者からその由緒を伺うと、昭和五八年(一九八三)九月に起こつた水害「九・二八災害」の後、被害家屋の整理のときに偶然発見したとのことであつた。それまで絵図のことは知られなかつた。発見後、神保に調査を依頼した。入手経路は未詳で、おそらく先々代の祖父のとき入手したのではないかとのことであつた。この祖父は天明期村絵図のほか、諸絵図、明治時代の書籍(教科書など)を所持していた。某家の祖父は現在の美濃加茂市山之上町の出身で、この祖父の時代に太田へ移住している。この絵図の内容(後述)からして作成当初から所蔵していた可能性は低いと思われる。

二. 江戸時代の絵図について

江戸時代には、場所を示すものとして多くの絵図が制作された。絵図には、世界や日本全体を描いたもの、国、郡、村を単位としたものなどさまざまなものがある。ここでは、地理的機能を示すものを中心に考える。この時代の地図は平面を立体的に示したり、目的のものを誇張して描いたりしてわかりやすく表現している。その中には、道、川、山、田畑、家、高礼場、橋、社寺などさまざまな情報が記述されている。

国絵図は一国ごとの絵図である。天正一九年(一五九二)豊臣秀吉が全国の国絵図と郷帳の作成・提出を命じたのが最初で、慶長九年(一六〇四)には、徳川家康が慶長国絵図・郷帳の作成・提出を命じた。その後、正保国絵図(正保元年・一六四四)、元禄国絵図(元禄一〇年・一六九七)、天保国絵図(天保五年・一八三四)などがつくられた。正保国絵図の作成から彩色、縮尺は一里六寸、国境、郡境を示し、主要交通路は朱色、村高、楯田の中に村名が記載されるようになった。

村絵図は村ごとにつくられた絵図である。絵図には彩色のものが多くある。村明細帳に添えるためなどの目的で作成された。田畑、屋敷、道、橋、河川、

写真1 観音像



写真2 大日如来像

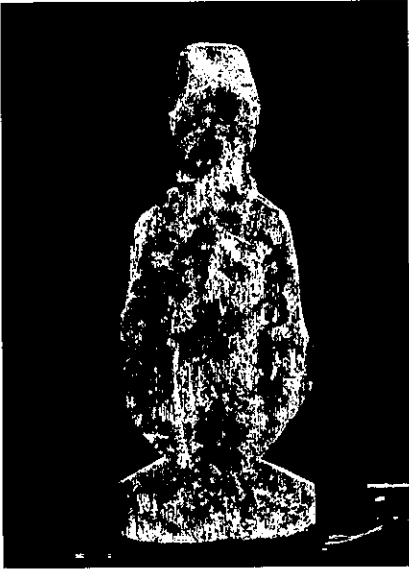


写真3 地藏菩薩像



写真4 韋駄天像

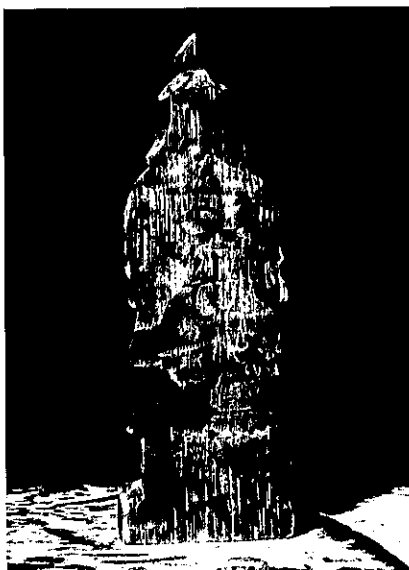


写真5 善財童子像

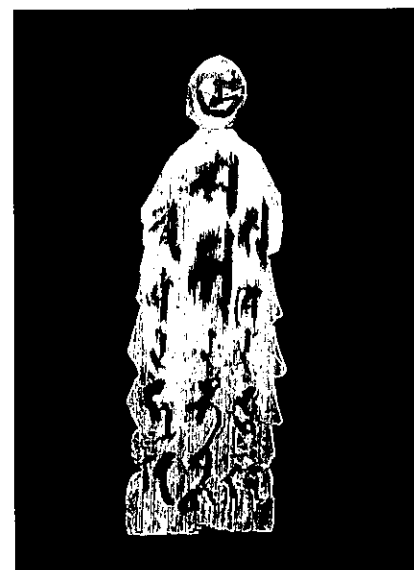


写真6 善女龍王像



いただき、また、全体指導など多大なお力添えを賜りましたこと感謝いたします。

さらに、池田勇次氏（郡上円空会）、佐光篤氏、林茂樹氏、額綱具幸氏、各町教育委員会をはじめとする方々にご指導、ご協力を賜りました。記してお礼申し上げます。

(1) 密教で仏・菩薩の象徴として書き表す梵字のこと。

参考文献

川辺町史編さん室『川辺町史』通史編 一九九六年
 後藤英夫・長谷川公茂『岐阜県の円空仏』一九八八年 岐阜郷土出版社
 佐光篤「加茂地域にのこる円空の如意輪観音について」『美濃加茂市文化財調査集録』第二集 一九九六年
 白川町教育委員会・白川町文化財保護審議会『白川町の文化財』二〇〇二年

白川町誌編纂委員会『白川町誌』一九六八年
 富加町史編集委員会『富加町史』下巻 通史編 一九八〇年
 長谷川公茂『円空仏』一九八二年 保育社
 七宗町教育委員会・七宗町史編集委員会『七宗町史』通史編 一九九三年
 美濃加茂市民ミュージアム『みのかもの円空仏（改訂版）』二〇〇六年
 （すぎむら あやこ 美濃加茂市民ミュージアム学芸員）

【加茂地域の円空仏分布図】

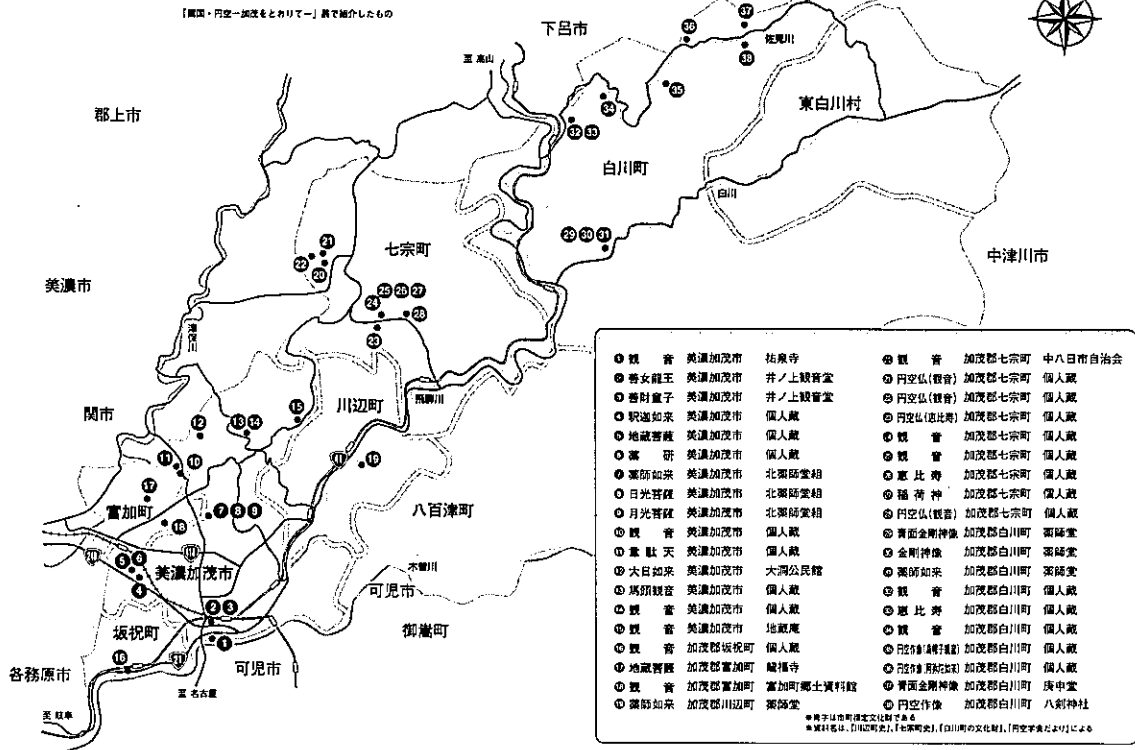


図1 加茂地域の円空仏分布図（「みのかもの円空仏 改定版」2006より）

蔵で多くあり、円空がお札においていったものといわれている(分布図②③)。

また、かつてこの小穴区では、円空仏を十数軒の家々が持ち回りで管理し、円空仏をお祀りしながら念仏を唱える念仏講がおこなわれていた。

さらに、七宗町杉洞には、円空が修行したという伝承をもつ杉洞洞窟がある。この洞窟は、神淵から関市上之保へ抜ける道と下呂市金山町与市野からの道が合流するところに位置する。このような地理条件から、円空はここに滞在しながら多くの仏像を造像し、また峠を越えて下呂市与市野や祖師野、関市上之保の鳥屋市で活動したと考えられている。ただし、この杉洞あたりから現在のところ円空仏は確認されていない。なお、この洞窟には江戸時代の念仏行者・播隆上人(一七八六―一八四〇)の名号碑があり、播隆上人もここに滞在し修行したとされる。

白川町の円空仏

加茂郡白川町の円空仏は和泉地区、油井地区、佐見地区などに十数体確認されている。仏像の大きさは三〇cmを超える、加茂地域のなかでも比較的大きな像が多い。それらの多くには、背面に梵字が墨書されている。また、ほとんどが元禄年間作と推定され、元禄四(一六九二)年ごろ、円空が下呂方面に向かう途中、制作したものと考えられている。

和泉地区の薬師堂には、後年合祀された青面金剛神像、金剛神像、薬師如来像の三体(分布図②⑨⑩)が祀られている。

佐見地区上佐見の円空作像(八剣神社蔵 四七・〇cm 分布図③④)の背面には、大日三種真言の梵字(大日心身真言、大日法身真言、大日報身真言)のほか、「観世音小松原大明神」の墨書がある。この円空作像の箱書きによると、もとは上寺前にある稲荷神社境内の小松原大明神の祠に祀られていたが、明治四(一八七二)年、成田村から幕府直領である寺前村・大野村(現大寺)

へ奉迎されたとある。

同じ上佐見には青面金剛神像(庚申堂蔵 一五・五cm 分布図③⑤)がある。背面には大日三種真言が墨書されている。この仏像も明治初年の廃仏毀釈の難を逃れるため、この地へ移されたものと伝えられる。

毎年春頃、この地域ではこれらの円空仏を本尊とした行事がおこなわれている。

白川町は明治初年、苗木藩によって徹底した廃仏毀釈政策がおこなわれ、多くの円空仏も廃仏の運命にあつたといわれる。円空仏を祀る家によると、屋根裏に隠したり、神棚のうしろに隠し扉をつくり、その奥に隠して守ったりして、廃仏の難を逃れたと伝えられる。

三 まとめ

今回、加茂地域の円空仏の所在地や像容についてまとめることができた。昭和三〇年代以降、全国的な円空仏調査が始まり、加茂地域からも多くの円空仏が発見されてきた。しかしまだ新発見の可能性を秘めている地域もあり、今後も所在調査を続けていく必要があると考える。また、円空仏がつくられて以降、さまざまな理由により加茂地域から移動してしまったものもあるといわれており、それらの把握もおこなっていきたい。

さらに、現地での聞き取り調査をおこない、円空仏は所蔵者宅や地域の方々に祀られ、いまなお信仰の対象となっており、川辺町や白川町の例にもあるように地域の信仰や年中行事と深い関わりをもっていることを強く感じた。このような習俗調査ともつなげていくことも、今後の展望としたい。

最後になりましたが、今回の円空仏調査にご協力をいただきました所蔵者・管理者の皆様には厚くお礼申し上げます。

そして、長谷川公茂氏(円空学会理事長)には、円空仏の写真を提供して

「アハラシヤナウ（大日心身真言）」

「ウ」「オン（帰命）」「ア（胎藏界大日如来）」「アビラウンケン（大日報身真言）」

「アバンランカンケン（大日法身真言）」

⑤善財童子像（井ノ上観音堂蔵 分布図③）写真5

この善財童子像と次の善女龍王像は、もとは十二面観音像の脇侍であった。これらは長い間秘仏として井ノ上観音堂の厨子の中に奥深く安置されていたため、背面の梵字は鮮明である。

「アビラウンケン（大日報身真言）」

「ウ（最勝の）」「サ（聖観音）」「アハラシヤナウ（大日心身真言）」

「アバンランカンケン（大日法身真言）」

⑥善女龍王像（井ノ上観音堂蔵 分布図②）写真6

「アハラシヤナウ（大日心身真言）」

「ウ」「キャ（十一面観音）」「キリーク（無量寿阿弥陀）」「サ（聖観音）」

「カーンマン」「ベイシラマンダヤ」「ウン（護法神）」「シリー（吉祥天）」

「アビラウンケン（大日報身真言）」

そのほか、墨書はみられないが、祐泉寺蔵の観音像（分布図①）には三本の斜刻線、個人蔵の観音像（分布図⑭）には一本の斜刻線、地藏庵蔵の観音像（分布図⑮）には五本の斜刻線がそれぞれ背面に刻まれている。

坂祝町の円空仏

加茂郡坂祝町には観音像（個人蔵 九・〇 cm 分布図⑯）が確認されている。延宝年間作とされ、背面には三本の斜刻線が刻まれている。

富加町の円空仏

地藏菩薩像（龍福寺蔵 四一・四 cm 分布図⑰）は、背面に胎藏界大日如来や真言などの墨書がある。美濃加茂市の地藏菩薩像（個人蔵）と酷似しており、延宝年間作と推測される。もとは夕田地区の照明寺にあったが、明治初年の廃寺にともない他所へ移され、現在は龍福寺に納められている。この像の錫杖をもつ右手は、その袖口から先の部分が後補と思われる。

そのほか、かつては白山神社に祀られていた貞享年間作の観音像（富加町郷土資料館蔵 五一・五 cm 分布図⑱）のほか数体がある。

川辺町の円空仏

加茂郡川辺町の薬師如来像（薬師堂蔵 三四・〇 cm 分布図⑲）は、下吉田の薬師堂の本尊として祀られている。この薬師堂は、裏手の竹林をへだてて飛騨川の舟運で栄えた下麻生湊跡を見おろすところに建っている。薬師如来像は元禄年間作とされ、背面に梵字が墨書されている。

この薬師堂では毎月、地元の方により念仏講がおこなわれている。

七宗町の円空仏

加茂郡七宗町の円空仏は、神測地区に多く確認されている。

神測地区の八日市には寛文後期作で背面に胎藏界、虚空蔵界の大日如来などの梵字が書かれた観音像（個人蔵 九・六 cm 分布図⑳）がある。また同じ八日市や奥田には延宝年間作とされる千体仏によく似た観音像がある（中八日市自治会蔵 一一・〇 cm 分布図㉑、個人蔵 一四・〇 cm 分布図㉒）。

神測の小穴区には「円空屋敷」とよばれる土地がある。このあたりには、円空がこの地に立ち寄り、庵をつくってしばらくの間滞留していた。円空がここにいたあいだ、近くの人たちが食事などのお世話をしていた、という伝承が伝わっている。ここには延宝年間作とされる一〇 cm前後の円空仏が個人

研究ノート 加茂地域の円空仏について

杉浦綾子

一 はじめに

江戸時代の僧侶・円空は、寛永九（一六三二）年、美濃国で生まれ、十二万體造像を祈願し、全国を遊行しながら多くの仏像を制作した。元禄八（一六九五）年、関市池尻の弥勒寺前の長良川河畔で没するまで、遊行を止めることはなかったと伝えられている。現在、全国で約五〇〇〇体の円空仏が確認されており、その大半は出生地である美濃を中心に、飛騨・尾張に分布する。

本文は、加茂地域に所在する円空仏の所在調査をし、まとめたものである。なお、加茂地域とは、美濃加茂市と加茂郡（坂祝町、富加町、川辺町、七宗町、八百津町、白川町、東日川村）のことをいう。

二 加茂地域の円空仏

加茂地域は、飛騨街道をはじめ、各方面からの主要な街道が交錯し、武儀や郡上方面とも交流があった地域であり、かつて円空が全国を遊行する際、何度も行き来し、滞留した場所だった。そのため、ここには初期のものから晩年のものまで、あらゆる時期の円空仏が各地に所在し、それぞれの像容は実に多様で個性あふれるものばかりである。

加茂地域の円空仏は、美濃加茂市・坂祝町・富加町・川辺町・七宗町・白川町に五十数体所在するといわれている。それらの円空仏は古くからの街道に沿うようにある。

円空仏の大きさは、三〇cmを超えるものは少なく、ほとんどが一五cm前後の比較的小さな像が多い。

美濃加茂市の円空仏

美濃加茂市には現在、円空仏が一四体と、円空作といわれる薬研が確認されている。像の大きさとしては、三〇cm未満のものがほとんどである。それぞれの像の特徴、伝来については、「みのかもの円空仏 改訂版」（二〇〇六）に譲ることとし、ここでは背面について述べておきたい。

円空仏の背面には梵字が書かれており、その内容から円空の思想や信仰、円空仏の造像年を推測することができるとされる。美濃加茂市の円空仏のうち、六体の背面にその仏を象徴する種子が梵字で墨書されている。

①観音像（個人蔵 分布図⑩）写真1

背面には梵字のほか、三本の斜刻線が刻まれている。

「カーンマン（不動明王）」

「ウ（最勝の）」「サ（聖観音）」「ア（胎蔵界大日如来）」

「ベイシラマンダヤ（毘沙門天）」

②大日如来像（個人蔵 分布図⑫）写真2

この像は、観音像とみることもできるが、頭部の宝冠の形や背面の「ア」の梵字から大日如来像と像名がつけられた。墨書は不鮮明で、一部判読不能である。

「カーンマン（不動明王）」

「ウ（最勝の）」「ア（胎蔵界大日如来）」「□（判読不能）」「ウン（護法神）」

「ベイシラマンダヤ（毘沙門天）」

③地藏菩薩像（個人蔵 分布図⑤）写真3

墨書は薄いため判読不能である。

④章駄天像（個人蔵 分布図⑪）写真4

同断

林市左衛門

氏子惣代

勘左衛門

井田忠右衛門様

林新左衛門

右八巳極月迄願書扣

右之通相違無御座候

違却之筋無之

右書上候通相違無御座候

相違無御座候、依之記

花色
一夜着

壱ツ

但、紋丸ニ右花

もつき
一かや

壱ツ

但、へり地白小紋

一白かたひら

壱ツ

一綿入とき

表ちくさ

裏ちや

一たか袋

壱ツ

一鍋

式ツ

一わり

五升程

一白米

五升程

一きひ

壱斗五升程

一銭六百文

メ

右ハ当寺扣弥勒堂之儀、堂守も思悪敷無御座候ニ付、当寺弟子之内ニて留
主居指置候処、先月廿三日夜裏口戸押明忍入、右之品々盗取申候、依之御
達申上候、右之通寺社御奉行所江被 仰達被下候ハ、忝可奉存候、以上

太田村禪宗

巳十月

祐泉寺

井田忠右衛門殿

右祐泉寺御達被申上候通相違無御座候、寺社御奉行所江御達被成下候様奉
願上候、以上

右村庄屋

林新右衛門

同断

林市左衛門

乍恐御達申上候御事

当村祐泉寺扣弥勒堂被盜物之儀、一昨七日寺社御奉行所江祐泉寺方御達被
申候処、先々差置被帰候様被 仰付候、勿論村方よりも組頭新左衛門差添
罷出申候、仍之御達申上候、以上

巳

太田村庄屋

十月九日

林市左衛門

井田忠右衛門様

ひかへ

乍恐奉願上候御事

村扣

一太郎宮 壱社

三尺四面

但シ杉皮葺

社内

東西廿三間

社内

南北廿間

村扣

一小宮 壱社

式尺四面

但シ杉皮葺

社内

東西拾八間

社内

南北廿八間

右ハ及大破申候ニ付、如元葺替仕度奉願上候、尤他国・他領之寄進奉加不
仕、勿論村中納得仕、何方ニも少も故障無御座候間、右願之通相叶申候様
寺社御奉行所江被 仰上被下置候ハ、難有仕合ニ可奉存候、以上

巳

太田村庄屋

極月

林新右衛門

同断
新左衛門

同断
市郎右衛門

同所惣年寄
福田次郎右衛門

井田忠右衛門様

乍恐御達申上候御事

一今般桐木御用ニ付、差渡卷尺壹寸五分三寸迄致吟味、御達申上候様被 仰付
ニ相立候
木ニ相成候
 奉畏候、則村中吟味仕候処、皆々小木ニ而御用
 依之御達申上候、以上

依之御達申上候、以上

八月
井田忠右衛門様

林市左衛門

九月十一日二戻り申候

巳

同
林市左衛門

組頭
勘左衛門

八月
同
平兵衛

同
新左衛門

同
市郎右衛門

惣年寄
福田次郎右衛門

井田忠右衛門様

乍恐以書付御達申上候御事

一寢鳩式十羽程
右之通當時鳩部屋ニ附居申候、相違無御座候、以上

太田村
右村庄屋
林市左衛門

巳九月
御鳥見方
御役人中様

乍恐奉願上候御事

一当村扣太郎宮及破損申候得共、困窮之村方御座候故、修覆難仕候ニ付、当
 村野跡ニ而他国者不相交、御領分之者計相集、両買勧進相撲興行為仕、芝
 居地代金を以修覆仕度奉存候、勧進本之儀ハ、当所十吉と申者諸事引請取
 扱申候間、右相撲晴天五日之間御免被遊被下置候様仕度奉存候、願之通り
 被 仰付被下置候ハ、難有可奉存候、以上

太田村庄屋
林 新右衛門

右相撲願ひ難相濟ニ付、書願相戻申候、以上

(乱丁㊦)

扣

御達申上候御事

三本

雜もち道具

内

拾八本 長 七尺^方
六尺五寸迄 柱

四本 長 式間^方
九尺迄 土台

八本 長 式間^方
九尺五寸迄 けた

式拾束 但シ巻束ニ付三尺廻り 諸木束物

ノ三百五拾四数

右之通当村勘三郎と申者古酒道具買請、不破郡樽井村金四郎と申者江壳渡申候、右太田村より塩田村迄川下被仰付被下置候様奉願上候、以上

巳八月

太田村古木屋

林八

井田忠右衛門様

右林八奉願上候通相違無御座候、願之通早速川下被 仰付被下置候様奉願上候、以上

庄屋兩人判

乍恐奉願上候御事

先達而御咎メ被 仰付候者共、至而貧窮之族ニ而、漸人足日用取等致渡世送り申候者共ニ而、甚夕難渋及渴命申候由、追々相歎キ申候、并組合之者拙茂農業怠り旁殊之外迷惑仕候間、何卒早速御捨免成被下置候様御願ひ申上置候様、申参候
追々相頼参申候、何とそ以御慈悲を、右之者共早速御差免シ被 仰付被下置候様、重々奉願上候、以上

太田村庄屋

林 新右衛門

同断

林 市左衛門

(乱丁a)

乍恐御達申上候御事

一竹百本 但七寸八寸廻り 下麻生村

一同百本 但シ六寸廻り 太田村

一同式拾本 但シ八寸廻り 伏見村

一同式拾本 但シ八寸九寸廻り 御嵩村

一同五拾本 但シ八寸九寸尺廻り 中村

ノ式百九拾本

右ハ先達而奉願上候献上竹廻筏仕候、御請取被遊被下置候様奉願上候、以上

巳

右村々庄屋惣代

九月

太田村庄屋

林市左衛門(印)

同断

林新右衛門

井田忠右衛門様

同所組頭

勘左衛門

同断

平兵衛

一当所八幡宮神事、例年之通り十四日湯立神樂、十五日寄セ相撲先規之通り相勤申候、依之御達シ申上候、以上

巳 太田村庄屋
林市左衛門

八月 井田忠右衛門様

乍恐奉願上候御事

一御搗米四拾壹石也 加茂郡 太田村
右八当十一日未明津出シ仕、十五日御蔵入仕度奉存候、右日限米出し參候様被 仰付被下置様奉願上候、以上

巳 太田村庄屋
林市左衛門

八月 井田忠右衛門様

壳古酒道具覚

拾貳 長 六尺方 桧雜桶
五尺五寸迄 但ふたとも

拾ヲ 長 三尺九寸 桧雜桶
但しふた共

九ツ 長 二尺方 右同断
貳尺六寸迄

十ヲ 長 二尺方 右同断
貳尺七寸迄

六ツ 長 三尺八寸方 右同断
壹尺六寸迄

三十三 長 壹尺三寸方 雜半切桶
壹尺貳寸迄

九ツ 雜ため桶
貳ツ 雜水桶
八ツ 雜小桶

四ツ 雜たき樽
壹ツ 長七尺 雜なかし
巾四尺 但し台共

壹ツ 長四尺 桧ながし
巾壹尺七寸

五本 桧大ひしやく
雜うす棒

三本 但石とも
雜釜台

壹ツ 雜釜台
百八拾五枚 桧雜もろふた
千石とおし

壹ツ 但ぬかうけ箱共
長八尺

壹ツ 桧雜酒船
巾三尺貳寸 但台小道具
ふたかさ共

壹本 長三間半 雜ノ棒
長貳間 雜大じ柱
但し貫共

壹本 長貳間 雜大じ柱

但し貫共

一九寸竹 金巻両二 四十本位

同断

一尺竹 両二 廿二本位

右ハ八月切り竹相場、右之通り相違無御座候、尤八月ニ至り竹相場高下之儀難計奉存候間、其節之相場ニテ御買上被下置候様仕度奉願上候、以上

庄屋

林新右衛門

巳六月

同

林市左衛門

井田忠右衛門様

乍恐御達シ申上候御事

木綿黒

一綿入羽織り表 沓ッ

ち、ぶ

一同 裏 沓ッ

一黒つむき羽織り表 沓ッ

かいき

一同 裏 沓ッ

一紺木綿夜着 裏表

御納戸茶

一綿入ふとり表 沓ッ

同ち、ふ

一同 裏 沓ッ

木綿

一嶋小夜着 裏表

形助模様付

一小春綿入沓ッ 裏表

一木綿わた入 裏式ッ

水色もめん

一しゆばん 沓ッ

一木綿嶋 半反

一か、み 三枚

メ拾九品

右ハ昨二日夜当村医師今井子方浦物置窓より忍入、右之品々盗取申候由、依之御達シ申上候、以上

太田村庄屋

林新右衛門

同断

林市左衛門

巳八月

井田忠右衛門様

乍恐奉願上候御事

一御蔵米四拾沓石也

右ハ御囲初搗米廻船仕候、御蔵入被 仰付被下置候様奉願上候、以上

巳

右村庄屋

林市左衛門(印)

八月 井田忠右衛門様

乍恐御達申上候御事

共罷出相勤候事茂少く、多分人馬役金問屋場江差出、正人馬勤不致場所も有之趣相聞不埒之至、問屋并役人共も役金取立候上者、是以人馬繼為滯可申様無之、人馬差支之節者宿役人ハ別而問屋場ニ相詰可取計処、問屋場を明候儀も問々有之条相聞、平日迎も問屋・年寄ハ勿論、其外小役人迄も勤方甚未熟之趣相聞、畢竟宿役人共勤方等閑事発、無易之儀茂仕来ニ泥ミ宿入用多相掛、人馬繼立ニ差支之儀出来候宿方も有之段、別而不埒ニ相聞候、依之敷敷可遂吟味候得共、年来之仕癖不宜救之事と相聞候間、宥免を以、先今般其沙汰ニ不及、当時困窮之段も無相違相聞ニ付、先達而人馬賃錢割増申付置候宿々之外、沓掛宿より守山宿迄、美濃路とも当巳年々七ヶ年之間、賃錢式割増被仰付候間、沓割之内五分ハ宿方江請取、五分ハ宿助郷出人馬江割合、沓割者刎錢いたし除置、其月之分ハ翌月五日迄之内、御料・私領共最寄御代官并御預り役所之内江差出候様可致候、今般増錢之儀ハ、永久宿々相統として被仰付旨、是迄之仕来不宜儀者急度相改可申候、尤宿々取メ吟味布施弥次郎・鈴木門三郎被差遣候ニ付、其旨相心得猶宿々ニ有体を申立、正路ニ可受吟味候

但、此度増錢ニ付高札、御料ハ御代官、私領ハ領主方来ル七月朔日一流懸渡申渡候間、増錢ハ同日方請取之可申候

右申渡趣、得其意別紙請証文差遣候間、銘々宿役人并一宿人馬役之もの惣代印形致し、右証文江ハ助郷村々惣代是又致印形、宿送を以隣宿江継送、追而伊予役所江可差出者也

巳六月五日 伊予御印

遠江御印 中山道板橋宿方
守山宿迄 問屋
但、美濃路共 宿々 年寄り

天明五年乙巳六月廿一日相改、去ル辰之年中宿方入用書上之扣へ

合 一金百拾八兩七匁五分

合 一金三兩壹分壹匁七分九厘

合 一錢拾匁三百四拾八文

右之通問屋場方公義へ差出候書付、次郎右衛門殿御見七奉存候、写置申候

巳六月廿一日写之

大石公義高

合 元高千九百二十九石貳斗三升也

右ハ兼松為作殿方書付參候由にて、是も次郎右衛門殿御ミセ被下奉存候、

留置申候

巳六月廿一日

覚

□^原八月切り

一三寸竹 百文二付 拾本位

同断

一四寸竹 百文二付 七本位

同断

一五寸竹 同 五本位

同断

一六寸竹 同 三本半位

同断

一七寸竹 同 貳本半位

同断

一八寸竹 同二付 壹本半位

同断

井田忠右衛門様

乍恐御達申上候御事

一萱家老軒 長五間

梁三間

灰部屋 老間四面

太田村浦町

高持百姓 八郎左衛門

右ハ今九日昼九ツ半比出火仕候処、村中早速駈付消留申候、右出火之様子吟味仕候処、今朝灰を取灰部屋へ入置申候処、右灰ニ火残り居候哉、夫方出火本家・灰部屋共焼失仕候、類焼無御座全手過ニ相違無御座候、依之御達申上候、以上

右村庄屋

林新右衛門(印)

同断

巳 四月九日

林市左衛門(印)

組頭

市郎右衛門(印)

井田忠右衛門様

覚

一地主三拾六メニ付

買

代四拾匁

一回三拾六メニ付

売り

代四拾式匁五三匁迄

右之通当時麦相場如斯ニ御座候、依之御達申上候、以上

庄屋

巳五月廿四日

兩人

井田忠右衛門様

乍恐奉願上候御事

今般郷鳩御用ニ付、種鳩残シ残鳩差上候様被 仰付奉畏候、然ル処当村鳩部屋ニ附申候鳩拾壹・式羽居申候得共、只今巢を引時節ニ候間、右鳩取り候而ハ種鳩無御座候間、此度御用鳩御免成被下候様、乍恐奉願上候、以上

巳

太田村庄屋

五月

林新右衛門

同断

林市左衛門

御鳥見方

御役所

乍恐御達申上候御事

今般苗植付、余分圃置候様被仰付奉畏候、村中吟味仕候処、当年ハ一休置苗少ク余分之圃苗一切無御座候、依之御達申上候、以上

庄屋

巳五月

兩人

井田忠右衛門様

巳六月二割増公義舐写

近年宿々困窮申立、手当之儀相願候宿方茂有之候得共不容易儀ニ付、可取上様も無之処、去々卯年より米穀高直ニ及難儀条相聞処、別而浅間山焼ニ而砂降、并出水等ニ而最寄り之宿々者猶以及困窮ニ付、見届等も申付、格別之儀を以、板橋宿より鴻巣宿迄七ヶ宿ハ人馬賃銭式割増、熊谷宿より軽井沢宿迄ハ三割増賃申付、且坂本・軽井沢宿者年々百五拾俵ツ、御救米も被成下、和田峠茶屋ハ御扶持茂被下、於 公義右体御心江附前々々被成置候処、都而近来者困窮申立、人馬繼立相滞候儀も相聞、宿々ニ而人馬役之もの

候様子とハ不奉存候、依之申上候、以上

太田村庄屋

巳正月

林市左衛門

同断

林新右衛門

井田忠右衛門様

乍恐奉願上候御事

今般矢田池并用水通切欠浚等自普請被 仰付難有奉存候、然ル処用水・悪水通九百間之場所漸々出来仕候、就夫ニ見分仕勘考仕候得ハ、右用水・悪水筋上ミ両所にて三百拾七間之所、其候ニ難差置奉存候ニ付、尚又此節矢田池浚以前、直ニ取掛り自普請御冥加ニ仕度奉存候、依之奉願上候、以上

庄屋

林 新右衛門

同断

林 市左衛門

惣年寄

福田治郎右衛門

井田忠右衛門様

覚

一御城米八石 山之上村

一御城米七石五斗 上古井村

一御城米貳石 下古井村

一御城米拾石五斗 太田村

一御城米拾貳石五斗 土田村

一御城米壹石五斗 石原村

一御城米三石五斗 菅刈村

一御城米貳石五斗 古瀬村

一御城米壹石五斗 谷廻間村

ノ四拾九石五斗

右之通船積仕候間、御蔵入被 仰付被下候様奉願上候、以上

太田村庄屋

林市左衛門

山之上村庄屋

喜右衛門

上古井村庄屋

丹 治

巳

下古井村庄屋

弥兵衛

四月

五ヶ村惣代

土田村庄屋

嘉 吉

井田忠右衛門様

乍恐御達申上候御事

今般御作事方御用、丈夫成者拾人程御抱被遊候、望之者年齢書出候様被 仰付奉畏候、則村中吟味仕候処、望ミ之者老人茂無御座候、依之御達し申上候、以上

巳

五月

庄屋

兩人判

二、天明五年巳年願書扣

(表紙)

「 天明五年

巳年願書扣

林市左衛門

正・四・五・八・九・十 市

二・三・六・七・十一・十二 新

乍恐奉願上候御事

先達而被仰付候当所不時御普請所、昨十一日迄二不残出来仕候間、御見分
成被下御請取被下候様奉願上候、依之御達し申上候、以上

太田村庄屋

巳

林新右衛門

正月

同断

林市左衛門

井田忠右衛門様

乍恐奉願上候御事

一人足六千九百拾六人式分

内千五百廿七人六分引

残而五千三百九拾四人六分

右ハ去々寅年砂除人足代先達而御願申上候処、今般以御勘考当金ニ被下置
候様御願被下候趣、被仰聞難有奉存候、依之右之人數相減し差上申候間、
何卒右之通りニ而当金ニ被 仰付被下置候ハ、難有可奉存候、以上

巳正月

林新右衛門

井田忠右衛門様

林市左衛門

乍恐御達申上候御事

当村矢田雨池并用水溝為冥加自普請ニ仕度旨、先達而奉願上候処、願之通被
為仰付被下置候ニ付、当月八日右溝筋ヲ取掛り切広メ追々出来仕候、然所
右水末ハ御料酒倉村へ落込申候得共、只今迄も落込申候水ニ御座候得ハ、
今般溝通少々広メ申候進、只今迄も余慶之水ニ相成申候儀ニ而も無御座候ニ
付、右酒倉村痛ニ相成申候義ハ無御座候様ニ奉存、取掛り最早漸々ニ溝通出
来仕候処、酒倉村役人中被相越私共へ被申聞候ハ、右溝広ク相成候而者水
勢強ク酒倉村へ落込申候而、村方格別之痛ニ相成申候間、相止くれ候様ニ御
座候得共、御見分之上被為仰付被下置候御普請所之義ニ御座候得ハ、私共
返答も得不仕御窺奉申上候、殊ニ此節取くづし置申候場所之儀ハ、田面中
ニ御座候得ハ、大雨ニても仕候而ハ、大分之砂入ニ可相成と迷惑千万ニ奉存
候、御勘考之上出来仕候様被為仰付被下置候様、奉願上候、以上

太田村庄屋

巳正月

林新右衛門

同断

林市左衛門

井田忠右衛門様

乍恐以書付申上候御事

今般当村自普請ニ付、酒倉村ハ難洪之儀御願被申出候ニ付、右村田所差障
之儀御座候哉之趣御尋被遊候、此段他所ノ儀ニ御座候得者、委儀者不奉存候
得共、全体是迄も矢田用水筋者酒倉村江落込来候処、今般切欠広ケ候付、
右難洪之儀申上立有之候様奉存候、併私共大概見聞茂仕候処、差而痛ニも相成

御番所

乍恐奉願上候御事

先達而も奉願上候通り、当村不時御普請所之儀、冬分出来不仕候ニ付、日延奉願上候、来正月三日ヲ取掛り十日迄ニ急度出来為仕御注進可申上候間、何卒日延御差免し被下置候様重々奉願上候、以上

辰

十二月

太田村庄屋

林市左衛門

同断

林新右衛門

井田忠右衛門様

拝借仕金永之事

去卯年元金

一金百六拾八兩壹分

永百五拾四文貳分六厘也

当辰之利金之内十分一之分、金壹貳分・永百八拾四文五厘也

合金百七拾兩・永八拾八文三分〔^{四厘也}〕

本田三町六反歩

高五拾四石八斗四升九合壹勺

此質物書入

右ハ当宿困窮仕、安永三年年ヲ去丑年迄中年七ヶ年人馬賃錢割増被 仰付、

右之内勿錢溜り初年ヲ亥ノ六月迄年壹割半利、亥七月よりハ壹割之利錢ニ

御貸渡シ利倍仕処、去卯拝借高并当辰年利金永之内、十分一之分金永元金

江差加、書面之通り御貸渡被下置、村方江借付私共江手形取置申候、来巳十

一月廿日迄三元利急度上納可仕所、如件

天明四

辰十二月

太田村問屋

利兵衛

同断

弥三右衛門

庄屋

林市左衛門

同断

林新右衛門

問屋

福田七郎右衛門

本陣

福田次郎右衛門

井田忠右衛門様

巳正月十四日弥三右衛門持參、古手形手前へ預り

(裏表紙)

〔賀茂郡

太田宿〕

辰

十一月

庄屋

兩人

井田忠右衛門様

井田忠右衛門様

乍恐奉願上候御事

乍恐奉願上候御事

一当宿困窮ニ付、四年以前丑年御手当奉願上候処、去々寅年午年迄五ヶ年

之内、御金四拾兩ツ、御救御手当被為 仰付被下置、難有頂戴仕来候、然

処此節御年貢差加へニ仕度、何卒急々被下置候様ニ御願申上與候様、一派

申聞候ニ付、奉願上候、尤去卯年暮之儀ハ七分通り被下置、三分通りハ当

春被下置、難有奉頂戴候、当年之儀ハ去年以来不覚年柄ニ付、悉ク相弱り

罷有候得ハ、乍恐被為 聞召分被下置候、四拾兩之御金不殘□□被下置候

様奉願上候、御年貢御上納之儀ハ私共種々工入仕、先々御旨済仕候得とも、

村方取立方未タ一向不埒ニ御座候而、迷惑至極ニ奉存候、右御金被下置

候得ハ、取立方差加へニ仕度奉存候、乍恐此段御勘考被成下、急々願之通

り被 仰付被下置候ハ、千万難有可奉存候、以上

太田村庄屋

林 新右衛門

同断

林 市左衛門

組頭

勘左衛門

組頭

新左衛門

惣年寄り

福田次郎右衛門

一当村不時御普請所之儀、来十八日迄ニ出来為致候様被 仰付奉畏候、追々
取掛り罷有候得共、御年貢取賄天災旁ニ差支、右日限ニ出来不仕候、乍恐
暫ク御差延被下置候様奉願上候、尤無油断急々出来為致御注進可仕候間、
何卒暫ク日延被仰付被下置候様奉願上候、以上

太田村庄屋

林新右衛門(印)

辰

同断

林市左衛門(印)

井田忠右衛門様

乍恐御達申上候御事

若宮 長四間

一橋老ケ所 巾五尺五寸

仲ノはし 長四間式尺

一同老ケ所 巾六尺

右者先達而御願申上候処、右木揃御見分被成下難有仕合ニ奉存候、然処不殘
出来仕候付、御注進申上候、以上

太田村庄屋

林 市左衛門

同村組頭

市郎右衛門

辰十二月

太田

辰

十一月

井田忠右衛門様

庄屋

兩人

乍恐御達申上候御事

今般尾沢村と申村名書出候様被 仰付奉畏候、吟味仕候処、近郷ニ右之村
名承り及び不申候、依之御達申上候、以上

辰

太田村庄屋

乍恐以書付御達申上候御事

十一月

賀茂郡

同断

太田村

林市左衛門

一寝鳩拾一・式羽程

右之通当村鳩部屋ニ附居申候処、相違無御座候、以上

井田忠右衛門様

依之御達申上候、以上

辰

十一月

右村庄屋

一上田九反式畝四歩

砂厚成し

林市左衛門

一中田三畝廿五歩

五寸

御鳥見方

メ九反八畝拾九歩

御役所

坪三人半

人足八百六拾三人老分

覚

賀茂郡

一上田老町式反七畝九歩

砂厚ならし

太田村

一中田式反拾三歩

壹尺式寸

一御城米六拾石

一下田七畝廿四歩

辰

メ壹町五反五畝拾六歩

十一月廿五日

坪二五人

林市左衛門

此本坪九百三拾三坪式歩

林新右衛門

此人足四千六百六拾六分人

井田忠右衛門様

人分合
五千五百式十九人老分

右八当辰年砂入除人足如斯相掛申候、依之御達申上候、以上

矢田

一雨池

長六十間
巾廿間
深三尺

市郎右衛門
惣年寄り
福田次郎右衛門

同所

一用水通り

長九百間
巾高三尺
右切欠跡共

覚

賀茂郡

川巾六尺

一御膳米五石

太田村

深式尺浚

一御城米五拾七石

一餅米五斗

一大豆三石五斗

一六拾六石也

右ハ御定式ニ付、当秋御見分成被下置候場所御座候、用水通り之儀ハ年々砂高二相成、大雨之節々田所江切込難渡仕候、然処今般用水通り巾切広并雨池砂上等村中申合、為冥加自普請ニ仕度奉存候、願之通被 仰付被下置候ハ、乍恐何卒来早春ニ取懸り出来為致度奉願上候、尤冬分之内ハ御年責等旁御用多ニも御座候間、此段御勘考成被下、願之通り被 仰付被下置候ハ、難有可奉存候、以上

辰

十一月

林新右衛門
林市左衛門

太田村庄屋

井田忠右衛門様

林 新右衛門

同断

覚

名古屋遣候送り

林 市左衛門

賀茂郡

同所組頭

一御城米六拾式石也

太田村

勘左衛門

内五石御膳米

十一月

同

一餅米五斗

平兵衛

一大豆五石也

同

内卷石五斗

深田村分

新左衛門

一六拾七石五斗

同

右之通廻船仕候、御蔵入被 仰付被下置候様奉願上候、以上

惑至極奉存候、何卒御役所様方太田御番所へ御引合被下相濟候様奉願上候、以上

辰

太田村

八月

五平

井田忠右衛門様

右五平御願申上候通相違無御座候、願之通被仰付被下置候様奉願上候、以上

右村庄屋

林市左衛門

覚

一御藏米三拾石也

右ハ当辰年御物成之内御当テ米、右之石数当月廿日限りニ急度御藏入可仕候、依之御請書差上申候、以上

辰

太田村庄屋

九月

林新右衛門

同断

林市左衛門

井田忠右衛門様

乍恐奉願上候御事

一千鰯百五拾俵也

右ハ当村貧民共御拜借仕度段奉願上候、尤人数百五拾人有之候、老人前老俵ツ、御拜借仕度由、何卒右願之通り被 仰付被下置候ハ、千万難有可奉存候、以上

太田村庄屋

辰

林新右衛門

九月

同断

林市左衛門

井田忠右衛門様

乍恐御達申上候御事

今般八拾九歳以上年齢之者、名前書出シ候様被 仰付奉畏候、村中悉ク吟味仕候処、右年齢之者老人も無御座候、依之御達申上候、以上

辰

十一月

林新右衛門

林市左衛門

井田忠右衛門様

乍恐御達申上候御事

今般木村源藏と申者有之候ハ、名前書出候様被 仰付奉畏候、村中吟味仕候処、右名前之者無御座候、往来之内ニも右体之者罷通り候儀無御座候、勿論先触等一切参り不申候、依之御達し申上候、以上

太田村庄屋

辰

林新右衛門

十一月

同断

林市左衛門

井田忠右衛門様

乍恐奉願上候御事

代八百拾六文

一家内五人

此銀拾匁壹分四り五毛

代壹貫貳拾匁文

一家内四人

此銀八匁壹分壹り八毛

代八百拾六文

一家内貳人

此銀四匁五り六毛

代四百八文

一家内貳人

此銀四匁五り六毛

代四百八文

一家内四人

此銀八匁壹分

代八百拾六文八毛

一家内五人

此銀拾匁壹分四り五毛

代壹貫貳拾匁文

一家内六人

此銀拾貳匁壹分六り八毛

代壹貫貳百貳拾四文

一家内五人

此銀拾匁壹分四り五毛

代壹貫貳拾匁文

直助(印)

勘介(印)

又右衛門(印)

中

長三郎(印)

文助(印)

長次郎(印)

伴藏(印)

小十(印)

孫次郎へ渡ス

一家内四人

此銀八匁壹分壹り貳毛

代八百拾六文

一家内三人

此銀六匁八り四毛

代六百拾貳文

一家内五人

此銀拾匁壹分四り五毛

代壹貫貳拾匁文

外貳拾三文渡過

メ拾六貫百貳拾八文

御上方被下置候

御金貳兩貳分貳朱ト貳匁七分

辰八月十四日

錢替六貫四拾文ツ、

右ハ以御慈非を被仰付被下置候、御手当金右之通り割渡遣申候、依之御

達申上候、以上

庄屋

辰八月

兩人

井田忠右衛門様

組頭

乍恐奉願上候御事

一表九石

右者可児郡中切村奥右衛門方札買請申候而引取申候上、太田御番所江御達申上候処、未御差免之被仰渡無御座候ニ付御儀之由ニ而御免無御座候而、迷

乍恐奉願上候御事

今般米穀都而積出し御差免二付、先達而御達申上置候、雜穀質之儀請出度申
參候節ハ、御願ひ申上候ニ及ひ不申候哉、勿論只今迄ハ請出シにも参り不
申候得共、追々少々ツ、受出シ度申參候間、乍恐御伺ひ奉申上候、只今カ
預り申候雜穀類之儀も、御達し申上候ニ及ひ不申候哉、乍恐委細被 仰聞
被下置候様奉願上候、以上
右之通り願相済申候

辰八月

庄屋

兩人

井田忠右衛門様

(内表紙)

「天明四年

御手当金

困窮之者割渡帳

辰八月十四日 太田村」

覚

菅人ニ付式匁式り八毛ツ、

一家内三人

此銀六匁八り四毛

代六百拾式文

一家内六人

此銀拾式匁壹分六り八毛

代壹貫式百式拾四文

一家内二人

伊介(印)

与七(印)

岩助(印)

此銀六匁八り四毛

代六百拾式文

一家内五人

此銀拾匁壹分四り五毛

代壹貫式拾□文

一家内式人

此銀四匁五り六毛

代四百八文

一家内菅人

此銀式匁式り八毛

代式百四文

一家内式人

此銀四匁五り六毛

代四百八文

一家内五人

此銀拾匁壹分四り五毛

代壹貫式拾□文

一家内菅人

此銀式匁式り八毛

代式百四文

一家内式人

此銀四匁五り六毛

代四百八文

一家内四人

此銀八匁壹分八毛

壹り二毛

六助(印)

与十(印)

松之助(印)

直渡

上

金助(印)

金治(印)

小太(印)

直渡

早介(印)

藤助(印)

乍恐御達申上候御事

去卯二月頃当宿商屋之内ニ而、衣類諸色四品被盜取候由吟味仕

被仰付候ニ付、商屋不残

以来盜賊ニ出合候

一小紋古夜着

一古蒲団

右ハ卯十一月廿日夜当

進申上置候

木綿

一單物

男木綿

一帯

一綿入羽織り

一錢六百元

右ハ卯十一月廿五日当村源九方ニ而被盜取候、尤其節御注進申上置候

一風呂釜

一すき輪

一いかき

右ハ当村善六方ニ而、卯四月廿四日ニ被盜取候、尤其節御注進申上置候

木綿花色小紋裏も花色

一古ふとん

萌黄

一五六蚊屋

縁のひのき

右ハ当辰四月十六日夜、当宿太右衛門後家所ニ止宿仕候旅人盜取逃去り申

候、尤其節御注進申上置候

右之外盜賊ニ出合候者無御座候、依之御達し申上候、以上

辰

八月

加茂郡太田村庄屋

林新右衛門(印)

同断

林市左衛門(印)

同村組頭

勘左衛門(印)

井田忠右衛門様

右之外吟味仕候処、盜賊ニ出合候者無御座候、依之御達し申上候、以上

辰八月

太田村庄屋

林新右衛門

同断

林市左衛門

同村組頭

勘左衛門

井田忠右衛門様

乍恐御達申上候御事

是ハ先之願書と一所ニ致候而差上申候

一実綿 四斤程

一鍬 壹丁

右ハ当辰八月十日夜当村久左衛門方へ浦藪方忍入盜取申候、尤其節御注進

申上置候

一麦 五升程

一式升鍋 壹ツ

右ハ当辰八月十日夜当村仁左衛門方へ浦藪方忍入盜取申候、尤其節御達し

申上置候

卯

四月十九日

井田忠右衛門様

右御役所江御達申上候扣

(内表紙)

「辰七月十八日

困窮之者人別書上帳

太田村」

覚

一家内式人

一家内四人

一家内四人

一座頭盲人一人

一家内式人

一家内五人

一家内式人

一家内六人

一家内三人

一家内三人

一家内四人

一家内四人

一家内五人

一家内七人一人

一家内三人

○又右衛門

嘉七

○勘介

○松之助

○与十娘

○六助

○早助

○与七後家

○与七介

○彦八

○金治

○直助後家

○田藏

○小太

○岩助後家

太田村庄屋

林勘兵衛

一家内五人

○平四郎

メ四拾九人

式人 金助

メ五十七人

四人 藤助

式人 長三郎

右者当村之内渴命ニおよひ候もの共ニ御座候、何卒御慈悲之上、御手当被

仰付被下置候様奉願上候、以上

辰七月

乍恐御達申上候御事

当村献上之儀ニ付、当月十八日惣百姓代林新右衛門尾府下□出立仕候、依之

乍恐御 □（遺申上候、以上カ）

八月

同断

林市 □（左衛門カ）

井田忠右衛門様

右八廿八年以前

□（家 併 七 カ）

□（丑年御代官半田小）

□（兵 次 郎 へ カ）

□御願申上、被

仰付質取 □（奉 申 候 カ）

□其節印鑑差上申

□（相 違 無 御 様 候 以 上 カ）

右書上申候通 □（相 違 無 御 様 候 以 上 カ）

辰

八月

井田忠右衛門様

※欠損により差出人不明

〔史料編・旧太田宿福田家文書（福田幸周氏所蔵）〕

一、天明四辰願書扣

（表紙）

「天明四

辰

願書扣

庄屋

林勘兵衛

乍恐書付を以御達申上候御事

林勘兵衛

平左衛門跡

五平

孫兵衛

又助跡

新左衛門

右ハ私共儀、先祖方少々ツ、質取来候得共、何ケ年以前方取初候哉、相知不申候、尤八十二年以前元録（註）十五年午三月十日御改御座候而、御代官水野文四郎様江判鑑差上申候

林勘兵衛

孫兵衛

右ハ四十年前以前延享式年丑六月廿二日御改御座候而、郡御奉行清水太郎左衛門様江印鑑差上申候、此節平左衛門・又助儀ハ質取候儀相休居申候故、此節書上不申候

林勘兵衛
林新右衛門
林市左衛門

弥兵衛

右ハ四十年前以前、延享式年丑六月廿二日、御支配浅御代官浅井茂左衛門様へ御願申上候、被仰付質取来申候、以上

惣次郎

右ハ廿九年八以前、宝曆六年七七年丑、御代官半田小兵次様へ御願申上候而被仰付、質取来申候、以上

辰

右村庄屋

閏正月（印）

林勘兵衛

組頭

平兵衛

井田忠右衛門様

（印・改合）

乍恐御注進申上候御事

一居風呂釜 壹ツ

一すき輪 壹ツ

一いかき 壹ツ

右ハ当村善六儀、当月十四日夜風呂仕、翌十五日風呂桶小家二片付置、昨十八日見出候処、右之品無御座候、吟味仕候処相知不申候、盜賊ニ取られ候趣ニ相見申候ニ付、依之御注進申上候、以上

13	慶応二年四月九日奉鎮守豊受皇太神宮風雨潤除災溜水大麻 美濃国加茂郡太田村福田太郎八幸周
14	明治十三年一月上峰屋村瑞林寺祠堂金寺納証
15	明治十四年六月八日懐妊内祝諸事記 福田一郎幸慶
16	明治三十年一月年内仕用帳支配人權理心得書 福田家
17	過去帳 (昭和までの書込あり)
18	万尺寺由緒書 付絵図面
19	福田太郎八幸周傳
20	福田幸周事績
21	役割 (何かの行事の役割を記したもの)
22	歴代戒名簿
×	天保十二年五月福田家由緒書 福田太郎八
×	天保十二年福田家勤功書 福田太郎八
×	元治元年太郎池抔張願 同仕様書
×	明治七年太田村連印差入一札 (一)
×	同 (二)
×	同勘定支払皆済書

(注) ○番号は今回の調査で新たに確認されたもの、×は美濃加茂市史編纂過程において確認されていたが、現在は未確認となっているものを示す。

(会員) 鈴木重喜・小田島和彦・佐光篤・神田年浩・長沼毅・大海崇代・大野邦雄・村瀬英彦・杉浦綾子

凡例

- 史料には通し番号を付し、史料内容を示す簡単な表題をつけた。
- 史料の作成年代は史料にしたがって表記し、史料に記載されていないが推定できるものはそれを採用した。
- 収録にあたっては、史料の体裁を尊重しつつも、読解の便宜を図るため、次のように扱った。ただし、明らかな乱丁部分については、修復可能な箇所については「」で囲み、もとの位置に記号を付した。
 - 漢字は常用漢字表にしたがって表記した。史料に記載された文字が常用漢字表にないものは、正字をもちいることを原則とした。但し、固有名詞については現行使用されているものを優先して用いた。地名、人名、寺院名などについては、史料の記載にしたがって異体字などをを用いたものもある。
 - 変体仮名は原則として平仮名に直した。但し、者(Ⅱは)、江(Ⅱえ)、而(Ⅱて)、茂(Ⅱも)、而(Ⅱのみ)、与(Ⅱと)が助詞として用いられている場合は、そのまま用いた。
 - 併せ字のうち方(より)、「(こと)はそのまま用いた。
 - 繰り返しの記号は、漢字は「々」、平仮名は「ゝ」「ゞ」、片仮名は「ヽ」「ヾ」、二字以上の場合は「〳」を用いた。
 - 誤字の場合、正字が明らかかなものは右側に()を付して正字を、正字が推定できるものは(○カ)、正字が推定できないものは(ママ)と注記した。
 - 脱字・衍字の場合には、(○脱)・(○脱カ)・(衍)・(衍カ)と注記した。
 - 史料に掲載されているルビ・返り点・傍点・傍線は、史料の通り表記した。また、判読を助けるために、適宜読点、並列点などを付した。文中にすでに用いられている句点は、便宜上読点に改めた箇所もある。
 - 表紙は、「」で囲み、(表紙)と注記し、本文の前に、裏表紙は表紙に準じ(裏表紙)と注記し、本文の後に表記した。
 - 欠字は一字、平出は二字あけとした。
 - 虫損などにより判読できない場合は、一字分□を記し、字数が判明しないものは□で表記した。
 - 宛字はそのまま用い、初出のみ()で注記した。
 - 墨印は(印)、朱印は(朱印)、花押は(花押)、摺印は(摺印)、爪印は(爪印)、筆(軸)印は(筆印)、割印は(割印)と表記した。また、写しなどの場合には、史料の記載により、「印」「花押」「花押影」と表記した。
 - 合点、割印、印文などについては、必要に応じて史料の後に注を記載した。
 - 史料の記載に応じて活字の大きさや行間を変更したものがある。
 - 貼紙・下札などは、本文の末尾に「」をつけて表記し、右側にそれぞれ(貼紙)・(下札)などを注記するとともに、「」でその位置を示した。
 - 後筆、朱書などは、「」で囲み、(後筆)と注記した。
 - 抹消文字は、左に「々」を記し、訂正文字がある場合は、右側に記した。また抹消のため判読できない文字で、字数が判明するものは一字分■を字数分記し、字数が判明しないものは()の部分抹消と表記した。

中山道太田宿の研究 一

カモ地域史研究会

今年度からは、太田宿に関する古文書の収集調査および読解に努め、近世太田宿の様相を明らかにしていく。まず最初に取り上げるのは、本陣を務めた福田家の所蔵文書である。美濃加茂市史の編纂室長であった故神保朔郎によれば、福田家に所蔵されていた文書は、戦後間もなく家人の手により悉く焼却されたとあり、その存在すら確認されていなかった。しかし、市史編纂過程で、同家の押入より思わぬ文書が発見された。これは昭和三年に福田家より真野林一郎家へ貸し出されたもので、返却後台所の押入に収納され焼却を免れたものであるという。その内容は、「福田家由緒書」「福田家勤功書」など六冊と天明四年から八年までと天保八年の村より太田陣屋に出された願書の控七冊（天保八年のものは二分冊）であった（史料紹介 太田宿本陣・福田家文書について）『美文会報』七七一No.二。現在ではこれらの中のいくつかは確認されないものの、新たな史料の存在も確認できる（表一 福田家文書一覧）。

この中で比較的まとまった内容のものとして、村より陣屋へ出された願書の控七冊がある。神保の調査によれば天保八年のものは二冊に綴られていたとするが、うち一冊は天保七年の誤りであろう。また、これらは神保により一部内容の紹介はされているもの（「天明時代の太田宿の一様相」凶作と盗難）『美文会報』七七一No.四）、『美濃加茂市史』史料編には一点も掲載されていない。

ところで昭和五十八年（一九八三）に起った木曾川の大氾濫である「九・二八災害」は、この地域に甚大な被害をもたらした。先の市史編纂過程で調査確認された史料もこの水難によりその多くは失われたが、現美濃加茂市文

化財保護審議委員の間宮瑞夫氏の修復により、福田家所蔵の史料の大部分は散逸を免れた。研究会では、これら願書の控を一時期ではあるが、太田宿の様相を把握する上で重要な史料であると考え、全員で読解し翻刻することに決めた。今後研究会では史料調査を継続して行い、将来的には太田宿に関する歴史を総合的な研究としてまとめあげ、市民の歴史教育や生涯教育に役立てることを目指している。もし、関係史料に関する情報をお持ちの方は、是非とも美濃加茂市民ミュージアムまでお寄せいただきたい。

末筆ながらこの史料を世に出すことを許された福田幸周氏には衷心より謝意を申し上げる。

表一 福田家文書一覧

番号	表題
①	明和三年二月稲荷大明神安鎮之事 正官目代従五位上行伯耆守荷田宿欄信之 福田次郎右衛門殿
2	天明四辰願書扣 庄屋林勘兵衛
3	天明五年巳年願書扣 庄屋林市左衛門
4	天明六年午年願書扣 庄屋林市左衛門
5	天明七年未年願書扣 庄屋林市左衛門
6	(天明八申年) 願書扣 庄屋林市左衛門
7	(天保七・八兩年) 丙申諸願書記簿
⑧	天保十二年七月頓空院正因妙性大姉諸事記帳
⑨	安政五年戊午二月過去帳(明治期までの書込あり)
10	由緒書(万延元年申九月差出) 福田太郎八
⑩	万延二年酉正月二十四日一郎平産祝儀受納并諸事記 福田太郎八幸周(花押)
⑫	勤功書(元治元年子八月差出) 福田太郎八

美濃加茂市民ミュージアム 紀要

第5集

2006年(平成18)3月 発行

編集・発行

美濃加茂市民ミュージアム

岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋3299-1(〒505-0004)

TEL 0574-28-1110 / fax 0574-28-1104

<http://www.forest.minokamo.gifu.jp>

印刷 株式会社 岐阜文芸社

